

なんじょう
歴史文化
保存継承事業
年報

2024

なんじょう歴史文化保存継承事業について

1. 沖縄戦体験の証言	1
沖縄戦体験の証言について	
凡例	3
証言	
新垣 美佐子（知念・具志堅／救護班）	4
内間 新三（知念・久高／防衛隊）	6
内間 秀子（知念・久高／村内避難）	19
親川 孝栄（知念・志喜屋／義勇隊）	22
親川 久子（知念・志喜屋／救護班）	24
岸本 松子（知念・志喜屋／村内避難）	26
具志堅 順栄（知念・知念／ヤンバル避難）	30
城間 貞子（知念・志喜屋／村内避難）	32
知念 芳子（佐敷・新里／村内避難）	34
知花 幸栄（知念・具志堅／ヤンバル避難）	40
照喜名 朝一（知念・知名／佐敷村・知念村へ避難）	42
当間 春子（知念・具志堅／ヤンバル避難）	46
仲里 幸雄（知念・志喜屋／村内避難）	48
仲村 徳広（知念・知名／知念村・佐敷村へ避難）	52
永吉 盛隆（知念・吉富／一般疎開）	55
比嘉 勇仁（知念・久手堅／ヤンバル疎開、あるいはヤンバル避難）	57
屋比久 末雄（知念・安座真／佐敷村・知念村へ避難）	59
証言に出てくる主な用語（五十音順）	65
2. 戦後史（産業）調査	69
3. 普及・継承事業	83
（1）沖縄戦体験証言を用いた教材開発ワークショップ	84
（2）民話劇学校アウトリーチ事業	95

なんじょう歴史文化保存継承事業について

本事業は、南城市の歴史・文化について調査研究を行い、冊子の刊行や、調査成果・資料を活用した学習会等を通して普及・継承を図ることを目的としている。本『年報』では、令和6年度（2024）に実施した事業の成果について掲載、報告する。

また、本市教育委員会が運営しているウェブサイト「なんじょうデジタルアーカイブ（略称：なんデジ）」（<https://nanjo-archive.jp/>）においては、南城市地域の古写真や映像、デジタル化した市町村史等を公開しているほか、本事業の調査成果も順次公開している。このように、紙媒体で調査成果を普及するほか、ウェブ上で調査成果の公開を即時に行うことで、南城市の歴史・文化情報の発信の拡大・充実化に努めている。

■令和6年度（2024）実施事業

令和6年度に実施した事業の概要は以下のとおり。

1. 調査研究に関すること

（1）沖縄戦体験の証言の原稿化作業

『南城市の沖縄戦 資料編』の調査過程で聞き取りを行ったが、未発表である沖縄戦体験の証言について原稿化し、本書に掲載した。

（2）南城市の戦後史（産業）調査

令和5年度（2023）より調査を開始した戦後史（産業）について引き続き、市民への聞き取り調査、資料収集を行った。また、調査成果のレポートを「なんデジ」において公開した。

（3）オーラル・ヒストリー調査

市出身者の戦前、戦後の生活史について聞き取り調査を行った。また、調査成果のレポートを「なんデジ」において公開した。

2. 普及継承に関すること

（1）戦争体験証言を用いた教材開発ワークショップ

市や旧町村の調査によって聞き取った戦争体験の証言を学校現場の平和学習で活かすノウハウを共有することを目的として開催した。対象は市内小中学校の教員。令和6年8月1日実施。

（2）民話劇学校アウトリーチ実施事業

令和4年2月に刊行した『大里のちてーばなし』及び過去に刊行した民話編の活用普及推進のため、民話を題材とした演劇を創作し、市内小学校2校において上演した。

3. 『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』刊行

01

沖縄戦体験の証言



1. 沖縄戦体験の証言

2006年（平成18）に南城市が誕生して以降、南城市教育委員会文化課においては、沖縄戦体験にかんする多くの聞き取り調査を行った。その成果の一部を『南城市の沖縄戦 資料編』（2020年）、『南城市の沖縄戦 証言編 - 大里 -』（2021年）に掲載した。しかし、新型コロナウイルス感染症による作業の遅滞や、紙幅の都合等により計画変更を余儀なくされ、現在も多くの証言が未発表のまま残っている。

沖縄にとって最も重要な歴史的事象のひとつである沖縄戦。これらの貴重な証言を次世代へ継承していくために、過去の聞き取り調査の内容をまとめ、掲載許諾を得たものから順次発表することとした。本紙では、掲載許可をいただいた17人の証言を掲載している。

体験を語っていただいた話者の皆さま、そのご家族の皆さまに対し、この場をお借りして感謝申し上げます。

話者一覧※敬称略、五十音順

	氏名	出身字名 ※現在の名称		氏名	出身字名 ※現在の名称
1	新垣 美佐子	知念・具志堅	11	照喜名 朝一	知念・知名
2	内間 新三	知念・久高	12	当間 春子	知念・具志堅
3	内間 秀子	知念・久高	13	仲里 幸雄	知念・志喜屋
4	親川 孝栄	知念・志喜屋	14	仲村 徳広	知念・知名
5	親川 久子	知念・志喜屋	15	永吉 盛隆	知念・吉富
6	岸本 松子	知念・志喜屋	16	比嘉 勇仁	知念・久手堅
7	具志堅 順栄	知念・知念	17	屋比久 末雄	知念・安座真
8	城間 貞子	知念・志喜屋	証言に出てくる主な用語（五十音順）		
9	知念 芳子	佐敷・新里			
10	知花 幸栄	知念・具志堅			

協力者一覧※敬称略、五十音順

川満 彰（沖縄国際大学非常勤講師）

山内優希（北中城村教育委員会生涯学習課）

山城彰子（北中城村教育委員会生涯学習課）

凡 例

- 1 本紙に掲載している証言は、事務局が話者または話者のご家族から許可を得たものである。
- 2 引用した書籍、論文などは原則として脚注に次の順序で表記した。
 - (1) 書籍
著編者名『書籍名』出版者名 刊行年 頁
 - (2) 論文
著者名「論文名」編著者名『収録書名』出版者名 刊行年 頁
- 3 人物名については敬称を略した。
- 4 人物の生年は原則として和暦で表記した。
- 5 本文中において固有名詞、専門用語、読み方が難しいと思われるものなどにはよみがなを振った。原則として平仮名で振り、方言音についてはカタカナで振った。ただし、引用文や資料などに関してはその限りではない。
- 6 地名・行政区名は原則として当時の地名を記載し、() 内に現在の地名を記載した。
例：知念村（現 南城市）
- 7 本文中の年号は基本的に和暦で表記し、() 内に西暦を表記した。
例：昭和 20 年（1945）
- 8 証言は、事務局及び調査協力者が採録した音声を起こした原稿のほか、聞き書きで作成した原稿もある。
- 9 証言は、話者の語りを翻字した原稿をもとに読みやすさを考慮し、事務局並びに原稿作成者が文章を整え、脚注等を加えた。
- 10 しまくとうばの語りは() で現代語訳を補った。
- 11 屋号は〈 〉で括って表記した。
- 12 沖縄戦体験者たちは、しばしばアメリカ軍に収容されることを「捕虜ほりよになる」と表現している。軍事用語としては「捕虜」とは相手側に捕らえられた兵士を指す言葉だが、本書ではそのまま掲載した。

井上部隊の救護班に動員

私は、具志堅（戦前はシマグラーと呼ばれていた）の区長を通して、知念村（現 南城市）に配備された独立混成第44旅団第15連隊第2大隊（井上部隊）の救護班員に動員された。私たち救護班員も各自手りゅう弾を2個持たされ、いざというときに備えて、それを爆発させる方法を教えられた。

具志堅のウージミチャガマ（別名ウージヌガマ）¹に避難していた家族を訪ねたときには、私が逃げやしないかと思張りの兵隊がついてきた。それぐらい、部隊による監視が厳しかった。

射殺されたスパイ容疑の男性たち

〔沖縄戦中、フナクブ（現 南城市佐敷手登根にあるフナクブ洞穴）には、知念村出身の男性2人がスパイ容疑をかけられて拘束されていた。1人は軍に納入していた饅頭代などを請求したため、もう1人はハワイ移民帰りであったため、容疑をかけられたと思われる。彼らは部隊が壺屋（現 那覇市）に移動する際に連行された。衰弱していた1人は途中の大里村（現 南城市）付近で、もう1人は壺屋の壕付近で射殺された²。〕

スパイ容疑をかけられた男性2人のうちの1人の娘さんが父親を見舞いに来た。そのとき彼女は、水滴で濡れになって手を縛られていた父の姿に驚き、その場で倒れて救護室に運ばれた。

壺屋に連行される際、衰弱していた1人は歩行困難になったため途中で銃殺された。

部隊とともに移動

部隊の移動にともない、私たち救護班員もフナクブを出て大里村、津嘉山（現 南風原町）を経て真和志（現 那覇市）を通り壺屋に行った。そこで、前線に出撃した1人の兵長が足を撃たれて運ばれてきていた。

戦死者が多く出てくるようになると、部隊は沖縄島南部方面に撤退を開始し、私たちも負傷兵とともに具志頭村（現 八重瀬町）に移動した。そこで救護班は解散となり、同郷の人達と一緒に知念にたどり着いた。

「お金よりも命が大事」

〔昭和20年（1945）6月上旬以降、知念村はアメリカ軍により制圧され、各地に収容所が開設される³。〕

¹ 具志堅集落の北方に位置し、琉球石灰岩の崖下にある自然洞穴。

² 『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』（南城市教育委員会 2021〔第2版〕）541頁参照。

³ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』第7章第1節参照。

家族⁴や親戚^{しんせき}たちも知念村外に避難していたため、私は誰もいない民家でしばらく暮らした。のちに、ウージミチャガマからヤンバル（沖縄本島北部）に避難していた家族が帰ってきて再会を果たすことができた。

わが家では、防衛隊^{ぼうえいたい}に召集^{しょうしゅう}された兄が戦死した。どんなことがあっても、あのような戦争は二度と起こしてはならない。お金よりも命が大事である。

（2016年 知花幸栄・永吉盛信・事務局による聞き取り 構成：山内優希）

⁴ 新垣さんのきょうだいの証言は本紙に掲載されている（当間春子さん、知花幸栄さん）。

久高尋常高等小学校を卒業

私の家では、私が4歳のときから父がテニアン島^{とう でかせ}¹に出稼ぎに行っていた。父から、家族をテニアン島に呼び寄せようとする連絡があったが、母が行くと祖父母の世話をする人がいなくなるので、祖父たちが「絶対に親を捨ててはいけない」と反対し、母と私たち子どもは久高に残った。

私は久高尋常高等小学校^{く だかじんじょうこうとうしょうがっこう}（現在の久高小中学校の前身）に進学した。同級生は、私を入れて男子3人（卒業のときには2人）、女子7人だった。学校に奉安殿^{ほうあんてん}はなかった。校内に天皇陛下^{てんのうへいか}の写真相^{かざ}が飾られているのも見たことがない。だが、宮城遥拝^{きゅうじょうようはい}をしたことや、紀元節^{きげんせつ}²や天長節^{てんちょうせつ}³などの行事のときに、校長先生が「朕惟フニ〜」と教育勅語^{きょういくちよくご}を奉読^{ほうどく}していたことを覚えている。勅語奉読^{ちよくごほうどく}のときには、生徒たちは頭を下げていないといけなかった。ちなみに当時、校舎の一部屋が校長用の住宅になっていて、校長先生はそこに住んでいた。

私は昭和16年（1941）3月に高等科^{こうとうか}を卒業した。私の学校の成績は良い方だったので、卒業前に校長先生^{おおざとそん}（大里村出身^{ちんおもうに}の玉城清助校長^{たまきせいすけ}）⁴は私の祖父の元に何度も通い、私を必ず中学校に進学させたいと話していた。しかし祖父は、「自分たちの力では上の学校までは面倒を見きれないから」と言って断っていた。進学していたら学徒^{がくと}として戦争に巻き込まれ、どうなっていたかわからないので、進学しなくて良かったのかもしれない。結局は防衛隊^{ぼうえいたい}として戦争に参加したが、運良く生き延びた。

祖父母は私が高等科を卒業するころに立て続けに亡くなった。その後、真珠湾攻撃^{しんじゅわんこうげき}で戦争が始まり（太平洋の島々は危険になったので）、それからはテニアンの父の元に行こうという話はおなくなった。

父はテニアン島での戦争で生き残り、昭和21年（1946）、16年ぶりに久高に帰ってきた。

石垣島と久高島で漁師をする

高等科卒業後、私は漁師^{りょうし}になった。4月から9月までの半年間は、石垣島の^{あらかわ}新川にいた母方の親戚^{しんせき}のカツオ船^{かつおふね}に乗り、カツオ漁に従事した。10月ごろに久高に戻り、冬の間は追い込み漁^{お こ}やタコ捕り^とをした。追い込み漁では毎日クリ舟^{くりふね}を漕ぐので筋肉がたくさんついた。鍛えられて力が強くなった。当時は、寒くても海の中^{はなか}を裸でビュンビュン泳いだ。どの辺にタコがいるかわかっていたので、泳いで行って、たくさん捕ることができた。このように、4月から9月は石垣で、10月から3月は久高で漁をする生活を昭和18年（1943）まで続けた。石垣には3回行ったのを覚えている。

¹北マリアナ諸島の島のひとつ。現在はアメリカ合衆国の自治領。

²神武天皇が即位したとされる2月11日を祝った祝日。1966年（昭和41）から建国記念の日として国民の祝日となった。

³天皇の誕生日を祝った祝日。1948年（昭和23）に天皇誕生日と改称されるまで、この呼び方が用いられた。

⁴ここでは内間さんの語りをそのまま記載したが、『知念村史 第2巻 資料編2』では、「タマグスク セイスケ」となっている（知念村史編集委員会編『知念村史 第2巻 資料編2 知念の文献資料』知念村役場 1989 600頁）。

石垣から帰るときには、蒸気船じょうきせんに乗って西表島いりおもてじまに行き、船浮港ふなうきこうで1泊した。翌日は宮古島で1泊して、それから沖縄本島に帰った。つまり石垣を出て3日目に沖縄本島に着いた。船に乗る際には、「アメリカ軍の潜水艦せんすいかんに船の航路こうろがばれてしまうので、海にごみなどを落とさないように」という注意があった。宮古島で1泊したときには、徴用ちょうようで連れて来られた朝鮮人ちょうせんじんを見た。

青年学校での訓練

昭和19年(1944)には週に一度、仕事を終えた夕方に久高の小学校の校庭で軍事訓練を受けるようになった。訓練のときには、知念村役場の兵事係へいじがかりだった前城セイフウまえしろさんという知名出身の方が来て、銃剣術じゅうけんじゆつや銃の持ち方などを指導していた。銃は3丁ほどあったと思う。

この訓練に出席していたのは徴兵検査ちょうへいけんさを受ける前の男性だけで、7、8人ほどだったように思う。私の2歳年上の先輩せんぱいが最年長さいねんちやうだった。

防衛隊に召集

昭和20年(1945)の1月中旬だったと思うが、久高から知念村(現南城市)安座真あざまに立ち退かされて一週間ほど経ったころ、防衛隊に召集しょうしゅうされた⁶。召集のとき知念村の兵事係が安座真まで来た。同じように召集された安座真の人たち約10人も一緒に、集合場所ぐしかみの具志頭国民学校⁷(現八重瀬町)の校庭まで歩いた。

召集されたとき「戦いに行くぞ」というような感じではなかった。召集されたから行くだけで、「行って、いつ死ぬかな」というくらいの思いしかなかった。

召集されて3日目には軍医による身体検査ぐんい しんたいけんさがあった。100人ほどが、パンツ1枚だけ身に着けて一列に並べられた。沖縄本島の人(肌が)色白で筋肉がなくヒョロヒョロしていたが、私は色が黒くて筋骨隆々きんこつりゅうりゅうだった。軍医が最後の方に並んでいた私の方に目を向け、「こんな体格たいかくは見たことがない」と驚おどろいていた。中隊長も「申し分のない、立派な甲種合格だ」と大きな声で叫んで大変褒めてくれた。

召集された際に、軍服ぐんぷくや靴くつ、靴下くつした、背囊はいのう(背に背負う布製のカバン)、飯盒はんごうなどが支給しきゅうされた。軍服には階級章かいきゅうしょうはなく、白い布に名前を右から横書きにした名札なふだがつけられていた。防衛隊員には銃の支給もなかった。

第28船舶工兵隊に配属

私は、暁部隊あかつきぶたいの第28船舶工兵隊せんぼくこうへいたい⁸という、特攻艇とっこうていによる攻撃こうげきを目的にして編成された部隊に

⁵『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』(南城市教育委員会 2020) 67～70頁および、知念村史編集委員会編『知念村史 第3巻 戦争体験記』(知念村役場 1994) 204～210頁に掲載されている、「兵事主任の手記」の執筆者の前城盛夫氏のことが。

⁶防衛研究所所蔵の『沖縄戦時に於ける部隊所在表 防衛召集概況一覧表』(沖台-沖縄-28 アジア歴史資料センター C1111001980)では、知念村から「海挺基地二八大隊」の防衛隊として召集された人々が「入隊」したのは昭和20年2月18日、集合場所は「東風平記念運動場」と記されている。「東風平記念運動場」は、現在の東風平小学校の校庭部分にあった明治記念運動場のことだと思われる。

⁷ここでは内間さんの語りをそのまま記載したが『知念村史 第3巻』234頁に掲載されている内間さんと内間末七さんの証言では「東風平国民学校の記念運動場」となっている。

⁸海上挺進第28戦隊所属の部隊だと思われる(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』438～439頁参照)。

配属された。中隊長は鈴木少尉で、カワサキ兵長が分隊長をしていた第4分隊に割り当てられた。部隊にいた兵隊の大半は高知県出身者で、タカサキ、ヤマザキ、トクダ、キシという名前の兵隊がいたのを覚えている。

第4分隊の人数は40人ぐらいで、私を含む6人(並里センジさん、内間末七さん、糸数兵五郎さん、西銘十三郎さん、内間エイジさん、私)が久高の人たちだった。6人の中で私が1番年下だった。

第28船舶工兵隊に召集された久高の防衛隊員のうち、西銘文真さんと西銘十三郎さんが戦死した。アメリカ軍が沖縄に上陸したあと、彼らはクリ舟を漕いで神山島⁹へ日本兵を連れて行ったそうだ。防衛隊員は(兵の移送を終えたら)そのまま帰ってきてよいという指令を受けていたようだが、2人は兵隊と一緒に弾薬を担いで行って亡くなってしまったらしい。このことは、私が部隊の炊事班として根差部(現豊見城市)にいたときに、知念村海野の出身で第2分隊か第3分隊にいた運天さんから聞いた。戦後、私は、2人の遺族に、かれらが神山島で亡くなったことを伝えた。また、「遺骨は探せないだろうから、現地の小石を拜んで墓に入れたら良いのでは」と言った。その後、遺族の1人が現地へ行き、小石を拾って持って帰った。

特攻艇と壕

奥武島(現南城市)の観音堂の広場には大きなテントが張られ、特攻艇に乗る隊員が宿泊していた。特攻艇は40隻あったので、隊員も40人いたと思う。彼らはみんな20歳前後の本土出身者で、夕方になると必ず「海行かば」を合唱していた。

奥武島と志堅原(現南城市)には特攻艇を入れるための壕が造られ、1つの壕には3隻の特攻艇が入れられていた。また、壕から海に向かって特攻艇を出すための台車のようなものが造られていた。その長さは30メートルぐらいあり、12センチ、15センチ角ぐらいの角材を組んで造られていたが、車輪はついていなかったと思う。

特攻艇は弾1発で穴があくような、薄いベニヤ板で造られた消耗品だった。私は、試運転をしているのを見たが、エンジンはキリキリという音を出してよく回り、船はすごく速く進んでいた。エンジンの後ろにワイヤーで爆雷が取り付けられていて、船を操縦しながらスイッチを押すとワイヤーが外れて爆雷が投下されるようになっていた。中隊長から、爆雷を投下してから4秒間で200メートル進むと、この特攻艇の乗員は助かると聞いた。

防衛隊員としての生活

第4分隊の久高出身者6人は、身体検査を受けたあと、志堅原の民家で寝泊まりすることになった。この民家は広場の隣にある茅葺きの家で、親切なおばあさんが1人で住んでいた。朝の起床は6時で、毛布はピシャーっときれいに畳まねばならなかった。広場で朝・夕の点呼があった。分隊に配属されていた兵隊が、各家に防衛隊員の見回りに来ていた。

朝ご飯の時間は6時半ごろで、炊事班が準備したものを人数分もらってきて食べていた。部隊に

⁹ 慶良間諸島の最も東側にあり、隆起したサンゴ礁でできた3つの無人島(神山島、ナガンヌ島、クエフ島)のひとつ。この3つの島を総称して慶伊瀬島(チービシ、チービシ諸島)という。

は粉味噌や粉醤油などの食料がちゃんとあった。朝ご飯のあとは毎日何かしらの作業をさせられたが、召集されて初めてのころは奥武島の砂浜に行って、体操などいろんな訓練をさせられた。

また、あるときの作業では、避難壕の上部の柵にするための松の木を切るために親慶原（現南城市）まで行った。大きな松の木を伐採して10人で担いだが、親慶原から富里（現南城市）に下りる下り坂では、木の運搬が大変きつかった。富里から奥武島へ向かう曲がり角で、私たちは5分から10分くらい座って休憩した。その後、分隊長が「さあ、いの一」と言った。それは高知の言葉で「さあ、帰ろう」という意味だったが、私たちにはわからなかったのでそのまま座っていると、「コー！」と大きな声で怒鳴られた。

休みは1日もなく、家族のいる安座真へ帰ることもできなかった。だが、十三郎さんと兵五郎さんの奥さんは面会に来ていた。十三郎さんは喘息持ちで、息苦しそうに咳をしていた。班長はかわいそうだからと作業を休むのを認めていた。下宿先のおばあさんが十三郎さんにお粥を炊いてあげることもあった。

沈んだ特攻艇を引き上げる

3月中旬、検査のためにすべての特攻艇を奥武と志堅原の壕から出し、奥武島の橋の下につないでいた。すると23日の夜明けに、玉城（現南城市）の新原方面から米軍の飛行機が1機飛んできて、つないであった特攻艇に機銃掃射を行なった。この攻撃で16隻の特攻艇が沈められてしまった。

残って浮いていた特攻艇は、のちに飛行機が来ない間に引き上げられて壕の中に移された。なお、この機銃掃射のとき、奥武の竹藪のほうで国吉シンユウさんという東風平（現八重瀬町）出身の同年代の防衛隊員が機銃掃射を受けて亡くなった。夕方の点呼を取っていたときに彼だけおらず、そのときに彼が亡くなったことがわかった。彼は2人の防衛隊員と奥武まで行ったが、そこで攻撃を受けたようだ。あとの2人は逃げ帰ってきた。数日後に空襲で志堅原の茅葺きの家が燃えたが、その際、私たちは奥武から運んできた彼の遺体をそこにに入れて火葬した。同じ東風平出身のコハツさんという人が国吉さんの遺骨の一部を拾って持っていたが、コハツさんが戦争を生き延びたのかどうかはわからない。

沈んだ特攻艇16隻は、私を含む久高島出身者4人で海に潜り、一晩ですべて引き上げた。3月中旬で寒い中、水中メガネも灯りもないまま5メートルほど潜り、手探りで船を探した。夕方から作業を始めたが、途中で兵五郎さんがガンガゼ（ウニの一種）を踏んでしまい、作業ができなくなったので、その後は3人で潜ることになった。途中で2回ほど火を焚いて休みながら作業を続けた。最後の特攻艇を引き上げるころには夜が明けてきていた。水中メガネがあれば、それほどきつくはなかったと思う。

引き上げ作業が終わったとき、中隊長が来て、「本当にご苦労だった。ありがとう」と言って、私たちに頭を下げた。

引き上げた特攻艇は、一晩のうちに玉城村（現南城市）船越のキビ畑までトラックで運んだ。そして、キビ畑の真ん中を伐採して穴を掘り、1隻ずつ隠した。

アブチラガマに移動

4月に入ると、私たちの部隊は志堅原から玉城村糸敷のアブチラガマへ移動した。アブチラガマには5月20日ごろまでいたと思う。ガマの中にはいろんな食料品が山積みになっていた。「慰安婦」もガマの中で見た。

このころには毎日夜間作業があった。たとえば、船越に隠した特攻艇がアメリカ軍に見つからないようにするため、擬装を施した。夜に船越の楠を伐採して、特攻艇を隠していた穴の枠にし、上からその枠に土とサトウキビの葉っぱを被せて、外からはわからないようにした。部隊が、一度沈められたこれらの特攻艇を再び使おうとしていたのかどうかはわからない。

同じ第4分隊の防衛隊員の中に、内間エイジさんという先輩がいた。彼は目が悪かったので、夜間作業に出るのをいやがって参加しなかった。しかし、班長は、エイジさんの昼間の元気な様子を見て、彼が目が悪いことを言い訳にして夜間の作業に参加しないとみていた。

ある日の夜9時ごろ、班長がいたところにロウソクの火があったので、エイジさんが私に「タバコの火をつけてきてくれ」と頼んだ。私が班長のところへ行くと、班長は「内間、もう消灯時間だからタバコを吸わせるな」と言った。戻ってそのことを伝えると、彼は自分で班長の元へ火をつけにいった。すると班長は「貴様、何べん言ったら分かるのか！消灯時間だからタバコを吸うな！」と言った。それでも彼はタバコに火をつけようとした。それで班長から「タバコ全部持ってこい！」と言われ、エイジさんはタバコを没収されることになった。

しかし彼はタバコを少し残していたようで、数日後にタバコを吸っているのを班長に見つかった。彼は班長に呼び出された。そして、2人の間でこのような言葉のやりとりがなされた。「貴様、『吸うな』と止められているのになぜタバコを吸うか」「辛抱できなくて、すみません」「辛抱ができなければ、何で班長の前に来んのか」「班長が怖いです」「班長が怖ければ、貴様、別の中隊に行け！」と（エイジさんは言葉で叱責されただけでなく）見ていてかわいそうになるくらい、竹の鞭で叩かれた。彼は結局、別の部隊（第1中隊）に異動させられた。

ちなみに彼はその後、クリ舟での斬り込みに参加させられたそうだ。しかし、斬り込みに行きたくなかったため、舟が那覇港を出て波之上（現 那覇市）まで来たところで水はけ用の穴を開けて（海に出るときは閉じている）、舟を浸水、沈没させたという。彼は泳いで陸に上がって捕虜になり、戦争を生き延びた。

クリ舟で斬り込みに出る

私たちの部隊もアブチラガマから豊見城（現 豊見城市）の高安にあった本部の壕に移動し、夜間にクリ舟10隻以上で斬り込みに出ることになった。クリ舟は糸満や小禄（現 那覇市）からかき集めてきたもので、1隻に12、3人ずつ乗っていたと思う。兵隊も防衛隊員も一緒だった。

私が乗ったクリ舟では先輩（内間末七さん）と私が漕ぎ手になり、先輩が舵取りを行った。同乗していた兵隊は軽機関銃を持っていたが、私たち防衛隊員には武器はまったく支給されなかった。末七さんは伝書鳩が入った箱を持たされていたが、それは中隊長への連絡用だったのかもしれない。

夜の8時半ごろ、暗闇の中、舟はメガネ橋（豊見城市の石火矢橋）あたりから那覇港を出た。嘉

手納沖にアメリカ軍の艦船の灯りが見えていた。初めは(それが艦船だと気づかずに)それに向かって漕いでいった。しかし、近づくとそれが艦船だとわかったので進路を変更した。たどり着いたところが牧港(現 浦添市)の海岸だった。漕ぎ手が2、3人しかいないので(速く進めず)、着いたのは夜中だった。私たちはその海岸から上陸し、アメリカ軍に斬り込みをしようとした。

アメリカ軍からの機関銃攻撃

しかし、舟から下りて上陸を始めようとしたとき、照明弾が上がり、辺りが昼と同じように明るくなったので、逃げも隠れもできなくなった。そして2つの機関銃陣地から攻撃を受けた。初めのうちは、弾は頭の上を飛んでいたのが恐怖感はなかった。しかし、私たちが陸地に近づくとつれて弾が体の周辺にピューッと飛んでくるようになると(怖くなってきた)。

やがて、周りの兵隊たちがバタバタ倒れて(地面は)真っ赤になった。自分のところにも弾が飛んでくるのが見えた。陸に上がるまでに半分以上の兵隊は撃たれてしまった。私は乾麺(乾パン)2袋と握り飯2個を入れた背囊(背に背負う布製のカバン)を持っていたが、自分の身の安全さえ、まともに確保できない中で、これらを持って歩く余裕はなかった。なので、(身を軽くして動きやすくするために)背囊を捨てた。末七さんも伝書鳩を捨てた。

私は何とか陸に上がった。海岸の護岸を飛び越えると、そこは麦畑のような平坦地になっていた。畑の真ん中から底の浅い水路が伸びていたが、それに沿って、ソテツの木があちこちに2、3本ずつ生えていた。私と末七さんは、ほかの兵隊と一緒に、あらかじめ決められていた通り、アメリカ軍の陣地の方へ向かって進んで行った。しかし、兵隊たちは次々にアメリカ軍の機関銃攻撃を受けて倒れ、亡くなった。

このとき、アダン林の隙間からアメリカ軍の様子が見えた。座ってタバコを吸っている兵隊や本を読んでいる兵隊もいた。座談会のような雰囲気があり、余裕が見えた。向こうは戦争気分じゃない。その様子を見てすぐ、もう戦争は負ける。もう絶対ダメだと分かった。武器を見ても、日本軍の武器や鉄砲で勝てるはずがない。向こうの銃は引き金を引いたら何発も撃てたが、日本軍の銃は1発1発、弾をこめて撃たなければならなかった。アメリカ軍は「おもちゃのようだ」と笑っていたのではないかと思う。

私と末七さんは話し合い、弾もそのうち止むはずだからそれまで待とう、ということになった。それからしばらく経つと、日本の兵隊が動くのが見えなくなったからか、とうとう弾が撃ち止んだ。末七さんが「海岸に戻ろう」と小さな声で言ったが、私は撃たれるのが怖くて先に行けなかった。すると、末七さんが先になって死んでいる兵隊の上を這って行った。(私は末七さんの後に続いた。)

そうして移動している途中、動いているのがアメリカ軍にばれて銃撃が始まった。私のすぐ横を通過した弾もあった。

私たちはゆっくりゆっくり這って行き、とうとう護岸の下の海岸にたどり着いた。そこは日本軍の機関銃陣地だったのか、海に向けて穴が開いていて、ちょうど2人隠れるぐらいの空間があった。私たちは夜明けまでそこに隠れていた。

夜が明けるころ、今度は2人の日本兵が私たちの方に向かってきた。私たちはアメリカ兵だと思

い、もう命がないと思って手を挙げると、日本兵から「防衛隊か？」と小さな声で聞かれた。その後日本兵はそこから出たが、出ると同時にアメリカ軍の攻撃を受けた。彼らはそこでそのまま亡くなったと思う。

私たち2人はその後、海岸のアダン林の根の下に横穴を掘って入り、飲まず食わずで日が暮れるまで隠れていた。

波之上まで泳ぐ

私と末七さんは、そこから海を泳いで避難することにした。日が暮れると同時に、隠れていた穴から飛び出て海に飛び込んだ。陸にはアメリカ軍がいるため、水深1.5メートルぐらいまで潜り、那覇の方向に向かって平泳ぎで泳いだ。深いところしか泳げなかったが、海岸沿いを泳いでいけば大丈夫だと判断した。毎日泳いでいたので10キロメートルは泳げるという自信があったが、泊港（現 那覇市）のところは引き潮で大変だった。握り飯などが入った背囊は捨ててしまっていたので、飲まず食わずで4、5時間ほど泳いで、波之上（現 那覇市）にたどり着いた。

泳いでいたとき、2、30メートル離れたところにもう1人、誰か泳いでいる人が見えた。そのときは誰かわからなかったが、あとから順一さんだったことがわかった。順一さんによると、牧港に上陸した翌朝まで13人は生きていて、たくさんあったアダン林に隠れていた。しかし、陣地から下りて来たアメリカ軍に向かって日本兵が手りゅう弾を投げたので（日本兵の居場所がばれて、アメリカ軍に）めちゃくちゃに撃たれてしまい、ほぼ全員死んでしまったらしい。彼は（日本兵と）一緒にいたら死ぬと思って1人で逃げたので助かったのだそうだ。その後、日が暮れると同時に海を泳いで泊（現 那覇市）で上陸したという。

波之上で上陸した私と末七さんは、お宮の向こうにあった大きな丸い火災用タンクの中の水で軍服を洗った。その後、私たちは部隊の本部壕がある高安（現 豊見城市）まで戻ることにした。しかし、夜中になると那覇の街で方向がわからなくなった。那覇は焼け野原になっていたからだ。この方向かなと思った方に歩いて行くと、途中で避難民の一家に出会った。彼らは「こっちまでアメリカ兵が来ているから、自分たちは南部の方に避難する」と言った。私はそれを聞いて、自分たちが泊方面へ逆戻りしていたことがわかった。私と末七さんはこの一家と一緒に歩いて行くことにした。

歩いていた途中で艦砲の破片が飛んできて、この一家のお父さんがけがをした。「やられた」と言っ
て一家は右往左往していたが、私たちは助けるどころではなかったので、私と末七さんはそのまま歩いてその場を離れた。当時は（他人を助けるということは）あまり考えられなかった。

真玉橋（現 豊見城市）の近くまで来たとき、今度は男性2人に出くわした。薄月夜だったので顔や服装がはっきり見えなかったが、朝鮮人だったと思う。私は中隊の話をしようと思って立ち止まったが、末七さんが急に飛んで逃げたので、びっくりして私も彼のあとを追って走った。話を聞くと、「1人が短刀を持っていた」ということだった。

部隊に戻る

真玉橋はアメリカ軍に利用されないように日本軍が壊していたので、私たちは川の中を渡って高

安の本部壕へ行った。そこには漢那かなという名前の曹長そうちようが残っていたので、彼に牧港での状況を説明し、中隊長も小隊長もみんな戦死して誰も戻ってこないことを伝えた。彼は「全滅か」とがっかりしていた。

私たちは部隊に戻り、今度は残っている分隊すいじほんの炊事班ねさぶに入ることになった。壕は根差部ねさぶ（現豊見城市とみぐすく）にあり、壕の口は東を向いていて、内部はL字型をしていた。

その壕の向かい（高台の向こう）には避難民が自分で掘って造ったような壕が2つあった。それらの壕の前には小さな川があり、あちこちにソテツの木が立っていた。6月に入ったある日、その壕の避難民が川で洗濯をして、ソテツに洗濯物を干していた。それがアメリカ軍の偵察機ていさつきに見つかり、昼の4時ごろだったか、飛行機からその壕に爆弾ばくだんが落とされてしまった。

その影響で松の大きな木がドサッと倒れて壕にかぶさり、壕の避難民は生き埋めになった。2つの壕にはおそらく10人以上の避難民がいたのではないかと思う。その日の夕方にも、私たちの壕の数十～数百メートル先に爆弾が1発落とされて山も崩れてしまい、生き埋めになった人々を助け出すのはいっそう困難になった。自分のいた壕の向かいで起こった出来事だったので、私はその様子を実際に見ていたが、かわいそうと思うだけで、どうすることもできなかった。

戦後になって私の親族が地元の人に聞くと、それらの壕のことは分からないということだった。あの壕の避難民たちは地元の人ではなかったようだ。私も県に、この壕で遺骨収集いこつしゅうしゆうをしたかどうかを問い合わせたが、「わかりません」という答えだった。

危険と隣り合わせの炊事

避難民たちが生き埋めになってから2日後、今度は私たちが寝起きしていた壕が崩落ほうらくした。私は午前2時ごろから起きて炊事をしに行っていたので無事だったが、ちょうど私が寝起きしていた場所で崩落が起きたので、本当に運が良かった。

炊事は1日1回で、根差部にあった茅葺きの家でテントを張っておこなっていた。大きな鍋なべが2つあり、1つはご飯しるもの、1つは汁物を作るのに使っていた。汁物に入れるタマナー（キャベツ）は根差部の畑から盗み、出汁だしには部隊にたくさんあった牛缶を使った。部隊には粉味噌や粉醤油もあった。

ある日、班長が馬の肉をたくさん買ってきた。それは高安で売られていたという。それを「お汁に入れなさい」と言われて調理ちようりしたが、肉が生臭なまくさくて切るのに大変苦勞した。真昼間に切ったが、私はこの臭いにおのせいで吐はいてしまった。

別の日には、炊事くわいじのときに使っていた小さな井戸に爆弾が落とされ、そこにいた炊事班の隊員2人が飛ばされてしまった。2人は運ばれていったが、助かったのかどうかわからない。私はカマドの前にいたので無事だった。

それから数日後、炊事場もアメリカ軍の爆撃ばくげきを受けて燃えてしまった。隣の家は茅葺きだったので、そこが燃えて炊事場のテントに火が移ってしまったのだと思う。燃えてしまった炊事場を見てびっくりしたが、アメリカ軍の飛行機が来る夜明けまでにはご飯を炊かないといけなかったので、焼け残った釜かまを一生懸命洗った。

南部に移動

その後、アメリカ軍が近くまで攻めてきているということで南部へ移動することになった。

私たちが移動する前、根差部の避難民たちは天ぷらを焼いて私たちに持ってきてくれた。私たちはその礼に私たちの部隊が保管していたお米をかれらに持っていった。お米は根差部の広場に山盛りにして置いてあった。私たちはそれらを一俵ずつ担いで彼らが避難していた崖っぶちの岩陰まで運んだ。私は「私たちは移動するが、お米は置いて行くのでなくなる前に早く取りなさい」と伝えた。

(とはいえ、すべてのお米をかれらに渡したわけではなく) 私たちもお米を10キログラムずつ担ぎ、夜に糸満の名城ビーチのあたりまで歩いて移動した。軍から移動の指示があったのかどうかや、このとき部隊に何十人残っていたのかはわからない。私たちは名城で一晩泊まり、翌日にまた歩いて具志頭村(現 八重瀬町)の与座・仲座まで行った。壕はもうなかったの海岸の岩陰に避難したが、そこからは自由行動となった。このとき、アメリカ軍はそこまで来ていなかったが、部隊には陣地を造れるほどの組織や人数はもうなかった。

自由行動になってから、私は昼間に仲座の製糖工場のところにあった大きなガジュマルの横で休んでいた。すると偶然、軍に徴用されていた久高の出身者4人(漢那のオジー、西銘トウキンさん、糸数セイスケさん、川平傳次郎さん)がそこを通った。彼らは、久高出身で当添(現 与那原町)に住んでいた西銘モリジロウさんが所有していた小さな船に乗っていた人たちで、船ごと軍に徴用されていた。彼らはスコップを持って、「南の方に行く」と言っていた。4人のうち漢那のオジーと川平さんは亡くなり、西銘さんと糸数さんは生き残った。

その後私たちは、集落内に入ることができなかったので海岸線に戻り、岩陰に隠れながら歩いて避難した。アメリカ軍は玉城(現 南城市)の方まで攻めてきており、人々は南の方に追いつめられ、海岸にも避難民がたくさんいた。アメリカ軍の艦船は毎日毎日、海岸に向かって艦砲を撃ち込んでいた。

ある日、私たちと一緒に歩いていた、那覇から避難してきていた姉妹の妹が艦砲の直撃を受けた。姉はどうすることもできないし、私たちも助けることができず、妹は亡くなった。ちなみに、5月、6月はハブ(毒ヘビ)が出る時期だが、岩陰のどこに隠れてもハブを見ることはなかった。ハブも艦砲射撃に驚いて隠れていたのかもしれない。

「泳いで生き延びよう」と決める

私は並里センジさん、内間末七さんと一緒に、艦砲を避けながら岩陰を走って、摩文仁(現 糸満市)の近くにあるウルバマという平坦地まで行った。3人とも、靴下にいっぱい詰めたお米と飯盒を持っていたので、「(ここにいたら) どうせ最後には追い詰められて殺されるから、夕飯を食べて、泳いで生き延びよう」と決めた。それまでは逃げ隠れするので精一杯だったが、このときには「泳いで助かろう」と決意した。

しかし、ご飯を炊くために必要なマッチがなかった。それで避難民を探し、お米との物々交換でマッチ1個と換えてもらえないか頼むと、避難民は「助かった、助かった」と大喜びしていた。そうしてマッチをもらい、艦砲が落ちたところにできた穴に溜まった水でお米をとぎ、大きな松林の

下で、煙がたたないように枯葉を選んで火を点け、飯盒いっぱいにご飯を炊いた。そして日が暮れるのを待ち、日が暮れると同時に海岸に下りて、岩陰でご飯を食べた。

その後、私たちは夜の7、8時ごろから泳ぎ始めた。センジさんは非常用の海軍の乾パンを持っていた。私は「これ早く食べよう」と言ったが、彼は「島に帰ったら食べるものが無いよ」と言って、乾パンを頭に載せて縛って泳いだ。

私たちが港川（現 八重瀬町）の漁港の方まで泳いできたとき、潮が干上がっていた。それでリーフの上に立ち、今度は漁港の入口の方を泳ごうとしたら、真っ黒な不気味な物体がいくつか見えた。私は与座・仲座の海岸の岩陰にいたときに、アメリカ軍の水陸両用戦車が沖から入って来るのを見ていたので、それがここに2隻停泊しているのだと思った。しかしセンジさんは、「10月空襲（1944年10月10日の空襲）で沈没した日本の木造船が、潮が引いたから干上がってるんじゃないか」と言った。「違うよ、アメリカ軍の船がたしかにここに入って来たよ」と私は言い返した。

その後、立っていたリーフから漁港の入口の方に向かって泳ごうとした矢先に、センジさんが首をバーン！と撃たれた。センジさんの「やられたー！」という声を聞いて、末七さんと私は潜り、軍服を全部脱ぎ捨てた。その後浮き上がってきたときには、弾は撃ち止んでいた。

それから末七さんと私は沖の方に向かって泳いだ。足が痙攣するまで泳ぎ、もう大丈夫だろうと思ってたどり着いたのが新原ビーチ（現 南城市）だった。潮が干上がっていたので、私たちはリーフに上がった。センジさんがそのまま亡くなったと思っていたので、海の向こうに向かって手を合わせた。

志喜屋の収容所で証明をもらう

末七さんと私は新原の浜に上がり、その晩に久高に戻るつもりで、知念や久手堅の海岸沿いを片っ端からクリ舟がないか探した。しかし全然見つからず、島に渡ることができなかった。それで、志喜屋の向かいにある無人島のアドチ島（現 南城市）まで泳いで渡り、その岩陰の砂を掘って一晚寝た。

夜が明けると、砂浜の周辺にはアメリカ軍の艦船から捨てられたリンゴやオレンジなどがたくさん流れ着いていたので、それを拾って腹いっぱい食べた。その後、末七さんが「潮が引いたら志喜屋に知り合いがいるからそこに行こう。向こうでお芋を食べよう」と言ったので、志喜屋に渡った。

志喜屋集落へ芋を食べに行こうとしたら、知念の浜から銃を肩にかけたアメリカ兵が3人、こっちに向かって歩いてくるのが見えた。そのため私たちは、志喜屋の海岸のアダン林の中に入り、日が暮れるまで潜り込んでいた。

夕方になると、そこに志喜屋の青年が夕涼みに来た。彼に「こっちにはアメリカ軍がいるのか？」と聞くと、「もうここは収容所になっている。（捕虜であるという）証明をもらわないと自由に出歩けないよ」と言われた。それで証明をもらおうということになった。しかし、私たちは帽子をかぶっていた頭の部分以外は日焼けをしていたので、大変だということになった（軍にいた防衛隊ということがばれると思ったからである）。だが幸い、久高の同級生で母方の親戚でもある福地家の人が捕虜になっていて志喜屋にいた。彼は私立開南中学校に通っていたので、私は彼の制服を借りて帽

子もかぶり、「学生だった」と言っただけで、ササッと証明をもらうことができた。末七さんは、「遠洋漁業に出て戻ってくると久高島が全島立ち退きになっていて誰もいなかったの、ここに避難していた」と話した。すると、通訳をしていた大久保という日系2世の米兵が「そうか」といって簡単に証明をくれ、「こっちに網がたくさんあるから魚を捕ってこい」と冗談も言っていた。

久高に渡る

それから3日ほどしたころ、私たちは志喜屋の人から、センジさんの消息を聞いた。センジさんは証明をもらいに来て、「初めは3人でいたが自分はけがをした。あと2人が生きていいのか死んでいるのかはわからない」と話していたという。末七さんと私は、海岸にある網を保管する小屋にいたセンジさんと会うことができ、泣いて再会を喜んだ。センジさんは港川で撃たれたあと、「陸に上がったら死んでも良い」という思いで、奥武島近くの海岸まで泳いだらしい。センジさんも、末七さんと私は死んだと思っていたそう。

私たち3人は、「クリ舟があるはずだから今晚、島（久高）に行こう」と話した。それで久手堅の下のアダン林の中で、壊れた小さなクリ舟を見つけた。先の方が割れていたの縄で縛り、水はけのための空き缶も用意して、3人とも後ろの方に乗って漕ぎ出した。割れていた先の部分は水につけないように上げて漕ぎ、ひとまずコマカ島（現 南城市）に到着した。

私たちは、コマカ島にアメリカ軍がないかを確認し、誰もいる気配がなかったのでそこで一休みした。するとアメリカ軍の救命胴衣のような、綿が入っているものが流れ着いているのが目に入った。私たちはそれを割いて、クリ舟の先の部分を補修した。おかげで先の方にも1人乗れるようになった。

コマカ島から久高までクリ舟を漕いで、私たちは現在の徳仁港（久高島の港）の下にある小さな砂浜に到着した。そこから集落に上がり、「人がいるなら井戸の水が使われているはずだ」ということで新川に行く、確かに水が使われた跡があった。それで避難民がいることがわかり、その後、私たちより数日早く島に戻ってきていた母たちと再会することができた。他にも島の人たちが40名くらい戻ってきていて、「よく生きて帰った」と喜び合った。

島には40人くらいが入れる自然壕があり、その周辺にも4、5人が入れる小さな壕があったので、人々はそれらに隠れていた。男性で泳げる人はすぐに魚を捕ることができた。麦や大豆、芋などもいっぱいあったので、食べ物には苦労しなかった。

アメリカ軍に見つかる

久高で1番最初にアメリカ軍に発見されたのは、久高ノロ¹⁰をしていたおばあちゃんだった。このおばあちゃんは他の島民と一緒に壕に避難していたが、壕での生活が嫌になり、1人で集落に戻って空き家で暮らしていた。そのころ、アメリカ軍が週に1回ほど上陸用舟艇で島に来ていたのだが、そのときに見つかってしまった。彼女はアメリカ兵からタバコやオレンジ、リンゴなどをもらった

¹⁰ 村落祭祀をつかさどる女性祭祀。

らしい。初めは「毒が入っているのではないかと警戒していたが、アメリカ兵がみずからタバコを吸ったり、オレンジの皮をむいて自分で食べて見せたりしたので、タバコや食べ物をもらったそうだ。

そのとき、言葉がわからない彼女は「避難民があっちにたくさんいるよ」と、身振り手振りでアメリカ兵に教えたらしい。それでアメリカ兵が2人ぐらい、壕に続いていた足跡をたどって、人々が避難していた壕の中まで入って来た。みんな驚いて、こわいのであちこちに逃げたが、結局は東海岸のタチ浜の辺りに集まった。そして、ここで通訳のアメリカ兵から「壕にいたら飛行機に見つかって攻撃されるかもしれないから、集落の方に行きなさい。一週間後に迎えに来るから」と言われた。

それで集落に戻ると、4、5日ぐらいしてから上陸用舟艇で海軍兵が来て、タバコやオレンジをくれた。私はタバコを吸わないが、おじさんが吸うのでたくさんもらって帰った。当時、アメリカ兵は1人に1、2箱ずつタバコをくれたので、うちのおじさんはタバコをいっぱい吸っていた。

浜比嘉島に送られる

ちょうど一週間ぐらい経ったところにLST（戦車揚陸艦）が来て、久高にいた人たちは浜比嘉島（現うるま市）に送られ、そこで半年ほど生活した。浜比嘉ではアメリカ軍の物資を配給されて（その物資で）暮らしていた。夏だったので私たち男性は毎日島の周辺を泳ぎ、モリで魚を突いて捕っていた。当時は魚がいっぱいいて、1日に200斤（約120キログラム）ほど捕れた。地元には「網を持ったら自分にはかなわんよ」と言うおじいちゃんが出て、彼は船を出して網で小魚を、私たちはモリでミーバイ（ハタ類の魚全般）やチヌマン（テングハギ）などの大きな魚を捕っていた。

捕った魚は地元の比嘉集落の人たちに分けていたので、「久高の人のおかげ」と大喜びされた。私たちが浜比嘉を引き揚げるときには、「久高の人が行ったら魚食べられないね」と寂しがられた。

奥武島での生活

私たちは、浜比嘉での生活が終わると、アメリカ軍の水陸両用の車で屋慶名（現うるま市）まで送られ、そこからトラックに乗せられて知念村（現南城市）まで移動した。知念村内では知人の元に行き、のちに具志堅集落に行った。そこから奥武島に移動し¹¹、そこでまた半年ほど暮らした。

奥武島では、割り当てられた大きな瓦葺きの家で生活した。奥武島には久高の人たちが30人ぐらいいたと思う。（久高の）若者は（奥武島の人と）毛遊び¹²をしていたが、奥武島の青年に「なぜ久高島の若者同士で遊ばず、奥武島の人と遊ぶのか」と言われていたので、カップルはできなかった。

奥武島にいたときには、アメリカ軍が使わなくなった上陸用舟艇を2隻もらって漁業をした。それらは、現在のホワイトビーチ（現うるま市）にあった。そのような上陸用舟艇はそこにいっば

¹¹ 玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』（玉城村役場 2004）468頁によると、1945年（昭和20）11月17日から、「知念村久高島の漁民が許可を得て戦災を免れた屋号百次や神舎慶に入居して漁業を営んでいた」という。

¹² 未婚の若者が広場に集い、夜更けまで歌や踊り、会話などを楽しむ習俗。「毛」とは原野や広場のこと。

いあった。

また、日系2世のアメリカ兵で通訳をしていたチャーリーと大久保という2人から、アメリカ兵の大好物のエビを捕るように言われて、エビも捕った。夜にはエビが岩から出て来て這っているの
で、それをアメリカ軍が持ってきた水中電灯すいちゆうでんとうを使って手づかみで捕った。いっぱい捕れたのでアメリカ兵は大喜びしていた。

久高に帰る

昭和21年(1946)に久高に帰ると、私の祖父が建てた瓦葺きのきれいで上等な家がアメリカ軍に焼かれ、跡形もなくなっていた。私たちのように家が焼けて住むところなくなった人たちのために、40,50代の先輩方が復興班ふっこうはん、工務班こうむはんを作り、アメリカ軍から支給されたトゥーバイフォー¹³で、家族が多い世帯から優先的に茅葺きの家を建てていった。このころ、私は島の書記しよきをしていた。書記として2年間、島の復興たづさに携わった。

(防衛隊で牧港に上陸したとき)雨が降るように弾を撃ち込まれた中、生きて帰れたのは久高出身の3人だった。戦争で生き残ることができたのは、久高の神様のおかげだと思う。

(2018年 井口学と事務局による聞き取り 構成：山内優希)

¹³ 沖縄戦で家を失った住民や引き揚げ者のためにアメリカ軍が支給した住宅のこと。骨組みに2×4インチの角材が使用されていた。キカクヤー(規格家)やホンダテヤー(本建家)とも呼ばれた。

小学校卒業後に那覇に出る

私は八重山^{やえやま}で生まれた。生まれたころの私は、夜に泣いて眠らなかったそうだ。そのため、ウートー(神仏を拜むときの仕草や発する言葉)させた¹。すると、「久高島にいるおばあちゃんが初孫(私^{はつまご}のこと)を思っているから」と言われた。それで生後3ヵ月のときに、私は久高島^{くだかじま}に行くことになった。シマナー(島名)はグルーだった²。私が1歳のころに父が亡くなった。

私が6年間通った小学校を卒業したとき、台湾^{たいわん}で大きな事業をしていた伯父さん(父の兄^{おじ})が、「この子に、この島で農業をさせるのはかわいそうだ。台湾に連れて行こう。この子が望む通りに何でもさせる」と私を迎えに来た。私と親子2人で生きてきた母は、(伯父さんからその話を聞き)びっくりして、「ありがたいですが、この子は私の杖^{はな}ですから離しませんよ」と言ったそうだ。「親がそう言うのならかなわない」と、伯父さんは私を台湾に連れて行くのをあきらめたそうだ。

しかし、私は久高を離れることになった。当時那覇^{なは}でお店^{いとな}を営んでいた、伯父さんの娘さん(ユキ)に赤ちゃんが生まれたため、住み込みで子守^{こもり}をすることになった。そのため、私は3月に小学校を卒業したあと、5月から那覇に出て、戦争が始まる少し前まで那覇にいた。当時は定期船もなかったもので、久高にはなかなか帰れなかった。

今でも、頭の中には昔の那覇の記憶がいっぱい残っている。最近では今日あったことも忘れてしまいが、那覇のことは忘れていない。

久高島から見た十・十空襲

戦争が近づいてくると、「戦争が来るからもう島に帰りなさい」と言われ、私は久高に帰った。伯父さんの娘さん一家は、夫がヤンバル(沖縄本島北部)の人だったのでヤンバルに行くことになった。

島に帰ったあとの昭和19年(1944)10月10日の朝、私は切った芋を干すために外に出た。早く行かないと、干すための良い場所がなくなってしまうので早い時間に家を出た。すると飛行機が3機^き一組で、空いっぱい³に飛んでくるのを見た。家に帰ってから那覇の方を見ると、すごい大空襲で、大きな煙が上がっていた⁴。

久高からの立ち退き

十・十空襲の後、いつだったかよく覚えていないが、寒い時期に、「久高の人はみんな島から出

¹ 秀子さんのご家族によると「詳細は不明だが、ユタにみてもらったと思う」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

² 戸籍上の名前とは異なる個人名のこと。童名(ワラビナー)ともいう。秀子さんのご家族によると「グルーという名前は首里にいた祖母の名前から付けた」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

³ 秀子さんのご家族によると「3機1組の編隊で10以上の飛行機が飛んでいた」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

⁴ 秀子さんのご家族によると「家のある場所は西海岸のため那覇の空襲の煙が見えた。なお、芋を干す場所は東海岸だったので空襲の様子は見えなかった」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

なさい」と言われ⁵、島民は知念村（現 南城市）の安座真^{あざま}と具志堅^{ぐしけん}に分かれて住むことになった⁶。私は母と2人、具志堅（当時はシマグワーと呼んでいた）に割り当てられて住むことになった⁷。食べ物は配給^{はいきゅう}されていたと思う。ヤーサ（ひもじい思いは）しなかった。具志堅にいたときに、陣地^{じんち}構築^{こうちく}にかり出されたことはなかった。

久高島から全員出るように言われていたが、足の悪いおばあさん2人は島に残った。アメリカ軍が上陸する前のある日、島に残った2人のうちの1人の娘さんが、具志堅の水が出る場所^{せんたく}で洗濯をしていると、戦闘機が島に行くのを見たそうだ。私は、娘さんが「お母さん」と言って泣きながら歩いているのを見た。おばあさん達は2人とも戦争で亡くなってしまった。

中城で引き返す

島民が安座真と具志堅に分かれて住むようになった後、ヤンバルの金武村^{きんぶ}（現在の金武町と宜野座村^{ぎのざ}）に疎開^{そかい}するよう指示が出された。金武村に行った島民もいれば、私たちのように行かなかった島民もいる。私のいところはヤンバルまで行ったが、屋嘉^{やか}（現 金武町）にいたときに、子どもが背中におんぶされたまま亡くなった。いところは、戦後にこの子を埋めた場所を探したけれど、どこの山だったのか、どこの木の下だったのか、わからなかったそうだ。

私と母は中城^{なかく}まで避難した。このころには、空襲はもう始まっていたかもしれない。しかし、中城までから知念村（現 南城市）へと引き返した⁸。

安座真のアンガーガマに避難

中城から引き返してきた私と母は、私の同級生といとこと一緒に、安座真にあったアンガーガマ^{ひなん}に避難した。安座真に来たころには、もうあまり寒くはなかった。

安座真には日本軍の陣地があり、兵隊さんに「中城の方はもう戦争になっているから行かないで」と引きとめられた。アンガーガマにいたころには夜に畑へ芋掘りに行ったが、兵隊さんがおにぎりをくれたので、掘ってきた芋を食べることはなかった。兵隊さんたちも夜間に、煙を出ないように気をつけながらご飯を炊いていた。量がいっぱい食べきれなかったので私たちにもくれたのかもしれない。

私たちがアンガーガマにいたとき、兵隊さんたちが軍服^{ぐんぷく}を脱ぎ、あちこちに捨てられていた民間人の着物を着て、逃げ回っているのを見た。道で死んでいる兵隊も見た。

久高に戻る

その後、サトウキビ畑にあった、壊れた小さなサバニ（小型の木造船）を盗んで、6人くらいで

⁵ 秀子さんのご家族によると「島を出ていくように言われたのは十・十空襲前。誰に島を出ていくように言われたかは不明」とのこと（2024年事務局聞き取り）。ここでは秀さんの語りをそのまま掲載した。

⁶ 『沖縄県史 第10巻 各論編9 沖縄戦記録 2』（沖縄県教育委員会編集・発行 1974）904頁では、久高からの立退き命令が下された時期は1945年（昭和20）の「二月上旬」とされているが、同書922、925頁の島民の語りでは「昭和十九年十二月頃」または「昭和二十年の一月七日」に島から立ち退いたとされているため、立ち退きの詳しい時期はわかっていない。

⁷ 秀子さんのご家族によると「大きな家に間借りさせてもらっていた。家主家族も住んでいた」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

⁸ 秀子さんのご家族によると、秀子さん達は津覇小学校（現 中城村津覇）の辺りまで歩いていった後に引き返したとのこと（2018年事務局聞き取り）。

久高へ帰った⁹。夜にバーンと照明弾^{しょうめいだん}があがって昼のように明るくなる中で海を渡ったので命がけだった。このとき14, 5歳の人が先導^{せんどう}してくれた。

私たちの他にも、海を泳いで帰ってきた人や、同じようにサバニを盗んで帰ってきた人たちがいた。久高島に戻ってきた人は2, 30人くらいいたかもしれない。私と母は、久高島に戻ってきた人達と7人くらいで島内のガマ（ティンドゥルガマ）へ避難した。

ある日、アメリカ軍の戦車が久高島に上陸してカベール¹⁰の方まで来ていた。その後、一緒にいたうちの1人が「出ておいで、アメリカ兵は人を殺さないよ、出ておいで」と呼びかけたので、みんなでガマを出た。アメリカ兵はニコニコと笑って立っていた。

浜比嘉島に収容される

久高島に戻っていた人たちは、アメリカ軍の舟艇^{しゅうてい}に乗せられて浜比嘉島（現 うるま市）^{はまひがじま}に送られた。私たちが浜比嘉に送られる前は、久高には空襲をまぬがれて焼けずに残った家がいくらかあったが、私たちが移動した後にアメリカ軍に焼かれてしまった。

私たちが舟艇に乗せられる前から、私の夫（戦後に結婚した）のお兄さんは「いつまでもこっち（久高島）にいられないよ、やがてアメリカが迎えに来るよ」と言っていた。二世^{にせい}（日系二世のアメリカ兵）^{にっけい}も、「お嬢さん、急げ急げ」と言っていた。

舟艇に乗せられた後、アメリカ兵からリンゴをたくさんもらったが、慰安所^{いあんじょ}に連れて行かれて親とも別れることになると思っていたので、リンゴを食べる気にもなれなかった。

浜比嘉では現地の民家に数人ずつ割り当てられて寝泊まりし、平和な暮らしをすることができた。男性は海で魚を捕り、女性は芋掘りに行って生活をしていた。食べ物の配給もあった。

いつだったかは覚えていないが、浜比嘉からトラックに乗せられ、安座真ではないところへ行き、そこから船で久高に帰った。

(2018年 事務局による聞き取り 構成：山内優希)

⁹ 秀子さんのご家族によると「サトウキビ畑の場所は現在の齋場御嶽^{さいばみづたき}周辺の住宅地。ウランヌ浜（裏の浜）あたりから久高島に帰った」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

¹⁰ 久高島の北東端にある岬のこと。ハビヤーンともいう。

戦時下の知念村

私は、大正天皇が亡くなった昭和元年（1926）12月25日生まれた。知念尋常高等小学校（現在の知念小学校の前身）には奉安殿があり、登下校の際には奉安殿に向かって、不動の姿勢（気を付けの姿勢）で最敬礼をした。

村内から兵士が出征するときには、私たちはアカバンタ（南城市佐敷手登根にある高台）から手を振って見送り、武運長久を祈った。

（当時、金属は軍需資材として強制的に供出されたが）小学校にあった二宮金次郎の像や、おばあさんたちのかんざしも、その対象となった。

昭和18年（1943）に志喜屋（現南城市）で行われた献穀田田植式¹では、2歳上の姉（城間貞子）²が早乙女として参加した。志喜屋は大きな集落だったこともあり、3人が早乙女に選ばれた。具志堅などの小さな集落からは1人だけが選抜された。

田植式には、当時の沖縄県知事の早川元も、国民服を着て参列していた。早乙女たちは歌に合わせて稲を植えていた。その際、（植えるときについて）足跡を消してから、また植えていた。

昭和19年（1944）の夏には武部隊が来て、志喜屋のムラヤー（現在の公民館）や、村民の家に駐屯した。マジク（志喜屋集落南部にある岩山）には重機関銃の陣地が造られた。

沖縄戦中の志喜屋の人々

沖縄戦が始まると、アメリカ軍の軍艦が久高島（現南城市）から喜屋武岬（現糸満市）の方までいて、バンバンと艦砲射撃を行なった。

志喜屋の人々はヤローヤー³という壕に避難して命が助かった。ヤローヤーは崖の高い部分にあつたので、アメリカ軍に見つからなかったのかもしれない。ヤローヤーには風葬された遺体が2体ほどあったが、ここに避難した志喜屋の人々により、1カ所にまとめられ石で囲まれていた。

防衛隊から義勇隊へ

昭和20年（1945）の2月、私は防衛隊に召集されて（集合場所の）東風平（現八重瀬町）に行った。赤嶺少尉という沖縄出身の軍人から、「君らは今日から、国に対して貢献しなさい」という訓示があった。その後、私は玉城村（現南城市）志堅原で、ベニヤでできた特攻艇を格納することを目的と

¹ 1943年（昭和18）、志喜屋の親川仁盛の田んぼが献穀田に選ばれ、献穀田田植式が挙行された。献穀田は、新嘗祭（稲の収穫を祝う神行事。毎年秋に天皇が執り行う）に奉納する米を育てる田のことである。毎年、宮内庁が県を通して、村の代表的な篤農家の田んぼを指定した。献穀田に選ばれるのは農家にとっても非常に名誉なことであった。田植式には親川栄蔵村長や区長、小学校教員、県庁職員らも集まり、村から選抜された20人の「早乙女」（17～19歳の未婚の娘）が献穀田の歌を歌いながら田植えをした。（『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』南城市教育委員会 2021〔第2版〕 531～532頁）

² 親川さんの姉である城間貞子さんの証言は本紙に掲載されている。

³ 多くの志喜屋住民が避難していた壕。現在の「かちひん橋」北方に所在。急峻な場所にあり立ち入り困難（前掲『南城市の沖縄戦 資料編』577頁）。

した壕掘り作業⁴に従事した。

それからしばらくして、軍医による身体検査があった。そのときに「病気をしたことがあるか」と聞かれ、病歴のある人は家に帰された⁵。

私はそうして家に帰ったが、今度は集落の人の指示を受け、暁部隊に義勇隊として動員された。暁部隊は、(戦後の一時期)玉城村親慶原の知念高校があった場所⁶にいた。当時家にいた青年たちは、女性も男性も暁部隊に動員されていた。

暁部隊にいたとき、一週間から10日ほど、長堂(現豊見城市)の製糖工場があった場所にあった壕に待機した。そのときには、シュガーローフでの戦闘でけがをした暁部隊の隊員を、万福寺(現那覇市)の一角にあった小さな壕から、親慶原の「アシダガマ」(場所不明)という壕まで運搬する任務についた。私たちは4人がかりで、負傷兵をモッコに乗せて運んだ。モッコは、わらで編んだ網にマータク(竹の一種)を入れて作ったものだった。運搬中には砲弾が飛んでいた。ヒューヒューという音なら弾は遠くに落ちるが、ヒューバンという音の場合には弾の破片が飛んでくるので、その場で伏せた。そうやって伏せながら、小さな破片を受けて痛い思いをしながら運んだ。途中、糸数樋川を通して糸数アブチラガマ(どちらも現南城市)まで来たが、そのころには東の空が明るくなっていた。

「アシダガマ」には玄米などの糧秣があり、その上で寝ることもあった。玉城村新原から義勇隊として来ていた女性たちは、一升瓶に玄米を入れ、棒について精米していた。

そのほか、親慶原にいたとき「アメリカ軍が馬天(現南城市)に来ているから監視しろ」と兵隊に命令されて、交代で監視をした。その場所は、(一時期、親慶原にあった)知念高校の入口近くの壕であった。また、監視中、下親慶原にトンボ(アメリカ軍の小型偵察機)が墜落して燃えているのを見たことがある。

その後、部隊が与座・仲座(現八重瀬町)に撤退することになり、「アシダガマ」にあった無線機はみんなハンマーで割られた。私はそのときにお腹を下していたため、兵隊から「家に帰れ」と言われ、志喜屋に帰った。

戦後の志喜屋

[知念村は1945年6月上旬にはアメリカ軍に制圧され、志喜屋も避難民の収容所となる。⁷]うちの屋敷には上間(現那覇市)からの避難民が多く収容されていた。

[1945年9月に制定された「地方行政緊急措置要綱」により、知念市を含む12の市が誕生する。志喜屋には市庁舎が設置された。⁸]市庁舎は、当時は材料が不足していたので(木製の)電柱などを集めて造っていた。そのほかの材料は垣花(現南城市)から調達してきていた。

(2015年 知花幸栄・永吉盛信と事務局による聞き取り 構成：山内優希)

⁴ 志堅原西方のタカウザファには、特攻艇①を保管するための壕がいくつも造られていた(玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』玉城村役場 2004 514, 519頁)。親川さんが話している壕掘りとは、この壕の構築のことか。

⁵ 親川さんの話によると、病歴のある人が村の兵事主任に提出しなければならない資料があったようである。その資料は、病歴により防衛隊を除隊になったことを示す内容のものと考えられる。

⁶ 知念高校は1946年(昭和21)4月から1952年(昭和27)2月まで親慶原に所在していた。

⁷ 『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』(南城市教育委員会 2021〔第2版〕)第7章第1節参照。

⁸ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』第7章第1節参照。

おやかわ ひさこ
親川 久子 (旧姓新里 昭和5年生まれ 知念・志喜屋)

〈救護班〉

井上部隊の救護班に動員

私は、知念村（現 南城市）に配備された独立混成第44旅団第15連隊第2大隊（井上部隊）の救護班員として、宮城日出（旧姓安慶田）さんと共に動員された¹。当時15,6歳の女性が各字から2,3人ずつ、区長を通じて軍にかり出された。

昭和20年（1945）3月、アメリカ軍による空襲が激しくなると、井上隊は知念上原のガマや、佐敷村（現 南城市）手登根のフナクブ洞穴（ガマ）に移動した。私たちも部隊と共に行動した。フナクブには、知念村役場の職員も入っていた。

現在のつきしろ集落（現 南城市）の東側にあるイリジョーガマが炊事場になっていて、私たちはそこで炊いた食事をガマまで運んだ。民家に残されていた馬や牛、豚も潰して食べていたため食料に困ることはなく、その点だけはぜいたくができていた。

スパイ容疑をかけられていた男性たち

ある日、スパイ容疑をかけられた男性2人（どちらも字知念出身）がフナクブまで連行されて、ひどい仕打ちを受けていた。1人は軍に納入していた薪木などの代金を請求したため、もう1人はハワイ帰りで外国語を話すことができたため、容疑をかけられていたと思われる。洞窟入口の軒下で、しずくに打たれながら両手を後ろに縛られてかわいそうだった。

この2人は、部隊が壺屋（現 那覇市）へ移動するとき、縄で縛られたまま連れて行かれた。衰弱していた1人は途中の大里村（現 南城市）付近で置いていかれたと思う。もう1人は壺屋の壕付近で射殺された²。

壺屋へ移動

4月に入ってアメリカ軍の攻撃が激しくなると、首里（現 那覇市）方面の防衛のために部隊が移動した。私たちも大里（現 南城市）、津嘉山（現 南風原町）を経て、部隊と共に壺屋の壕に入った。部隊はそこから安里（現 那覇市）の高台へと転戦したが、ほとんどの兵士が戦死した。看護師だった私の姉も、そこで命を亡くし帰らぬ人となった。

負傷兵を連れてフナクブに戻る

私たちは負傷兵を連れ、アメリカ軍の攻撃をかいくぐりながら南下した。途中、あちこちに戦没者の遺体が転がり、悪臭が鼻をついた。壺屋から移動し、池田ダム（現 西原町）あたりに来たとき、

¹ 同部隊に動員されたときの経験を綴った宮城日出さんの手記が、『知念市誌』（『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』南城市教育委員会 2021〔第2版〕）所収に収録されている。

² 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』541頁参照。

墓に入って急場をしのいだ。その後、歩いて再びフナクブに戻り、そこで負傷兵の世話をした。

その後、救護班は具志頭村（現 八重瀬町）安里あたりで解散になった。そこから知念村に向かって歩いているとき、家族と再会した。

（2016年 知花幸栄・永吉盛信・事務局による聞き取り 構成：山内優希）

〈村内避難〉

昭和18年の献穀田田植式

昭和18年(1943)の献穀田田植式¹のとき、私より3歳以上先輩の人たちが早乙女として田植式に参加していた。田植式では、知念国民学校(現在の知念小学校の前身)の高等科2年の女生徒たちが一列に並んで献穀田の歌を歌い、その歌に合わせて早乙女たちが田植えをした。

翌年には玉城村(現南城市)の百名の田んぼが献穀田に選ばれた²ので、私はその田植式も見に行った。

変になっていった世の中

昭和18年までは世の中はおとなしかったが、昭和19年(1944)からは少し変になっていったように思う。軍国主義の風潮が強くなり、兵隊に対して少しでも文句を言えば首をたたき切られてしまうような恐怖さえ感じる、大変な時代だった。下^{した}端^ぱの兵隊でも、「兵隊」という名がつけば、民間人は何も文句を言えなかった。人間が人間じゃなくなってしまっていた。

[昭和19年の夏ごろから、知念村内でも第32軍の各部隊の駐屯や陣地構築が始まる。陣地構築や兵隊の炊事等に多くの村民が動員された。]³

当時のわが家は、私を含む子ども8人の10人家族だった。母が子育てなどで忙しく、軍の陣地造りや炊事に参加できなかったため、私が代わりに参加した。そのため私は勉強ができなかったし、戦後も家族のみんなを食べさせるため、勉強をする余裕はなかった。

タタンシチーに避難

志喜屋にはタタンシチー⁴やヤローヤー⁵などの壕があった。沖縄戦のときには、私たち一家はタタンシチーに避難した。私たち家族のほかにも、何世帯かが一緒に避難していた。

タタンシチーのそばには川があり、水には困らなかった。ヤローヤーの周辺には水が少なかった。食べ物は何を食べていたか、よく覚えていない。避難中、私は兵隊からの指示で、芋や畑から盗んできたキャベツを(軍の)大きい鍋に入れて炊事の手伝いをしていた。野菜を洗う余裕はなかった

¹ 1943年(昭和18)、志喜屋の親川仁盛の田んぼが献穀田に選ばれ、献穀田田植式が挙行された。献穀田は、新嘗祭(稲の収穫を祝う神行事。毎年秋に天皇が執り行う)に奉納する米を育てる田のことである。毎年、宮内庁が県を通して、村の代表的な篤農家の田んぼを指定した。献穀田に選ばれるのは農家にとっても非常に名誉なことであった。田植式には親川栄蔵村長や区長、小学校教員、県庁職員らも集まり、村から選抜された20人の「早乙女」(17～19歳の未婚の娘)が献穀田の歌を歌いながら田植えをした。(『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』南城市教育委員会 2021〔第2版〕 531～532頁)

² 1944年(昭和19)、百名一區の宜保盛昇の田んぼが献穀田に選ばれ、献穀田田植式が挙行された。献穀田は、新嘗祭(稲の収穫を祝う神行事。毎年秋に天皇が執り行う)に奉納する米を育てる田のことである。献穀田に選ばれるのは農家にとっても非常に名誉であった。田植式には県知事、村長、その他関係者らが見守る中で執り行われた。田植えは各字から1人ずつ(前川、奥武は2人)選抜された20人の「早乙女」(17～19歳の未婚の娘)が、高等科女生徒たちの「献穀田田植式の歌」に合わせて行った。(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』550～551頁)

³ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』533～534頁参照。

⁴ 志喜屋集落の後方にある熱田原貝塚の南側に位置する壕。

⁵ 多くの志喜屋住民が避難した壕。現在の「かちひん橋」北方に所在。急峻な場所にあり立ち入り困難。

ので土も混じっていたと思う。また、(アメリカ軍の)飛行機の音がしたら、炊事の煙が見つからないよう火を消していた。

兵隊は私の家族の人数が多いことを知っていて、「まっちゃん、お前の家族の子どもたちにあげなさい」と言って、鍋から食べ物を取り、飯盒はんごうに入れて持たせてくれた。私はそれを持ち帰り、弟たちに食べさせた。半端はんぱな煮炊きしかできなかったものを食べ、ようやく生きていた。

ある日、タタンシチーの中で弟(昭和16年生まれ)が急に立ち上がり、天井から垂れ下がっていた鍾乳石しょうにゅうせきに頭をぶつけて大けがをしてしまった。当時は薬もなかったのでどうすることもできなかったが、そのまま治って一命をとりとめた。だが体の弱かった彼は戦後、中学生のときに心臓病で亡くなった。

[次の話は、島田しまだ 叡あきら 沖繩県知事が沖繩戦中にタタンシチーを訪れたという話である。それが実際にあった出来事である可能性は否定できないが、事務局は2024年現在、それを裏付ける記録を発見していないということを前置きしておく。⁶] ある日、タタンシチーに長い靴をはいた男性が訪れた。彼は一晩ほど滞在して島尻しまじり(沖繩島南部)へ行った。私たちはその人が誰かわからなかったが、当時知念村役場の職員だった父が、「沖繩県の知事だよ」と皆に話した。父は彼と話をしていたが、何を話していたのかはわからない。

タタンシチーには球部隊たまや暁部隊あかつきの兵隊がよく来ていたが、私たち避難民を追い出すようなことはなかった。しかしある日、父が兵隊に文句を言い、危ない目に遭いそうになったことがある。当時は学生のような若い人も義勇隊ぎゆうたいとして軍にかり出されていたので、父がある兵隊に「何の役にも立たない学生や子どもたちまでも戦場に行かせてはいけない」というようなことを言った。するとその兵隊は「何を言っているんですかあんたは」と父に怒った。今にも父を攻撃しそうな状態だったので、私は陣地造りのときなどで知り合っていた別の兵隊を呼んできた。それでその場を収めることができたが、父に怒っていた兵隊は、「首をぶった切っておけばよかった」と話していた。父は首を切られるところだったのかもしれない。

タタンシチーを出る

ある日の昼、アメリカ軍がヤローヤーの上まで来た。そしてその夜、アメリカ軍がタタンシチーの中に上から何かを入れたようで、壕の中で煙が立ち込めた。この煙は毒ガスかもしれないから、ここにいたら大変だということで、私たちはタタンシチーを出て山里やまざと(現 南城市)に向かった。

その晩は雨が降っていた。アメリカ軍が迫っていてどこに行くのも怖かったので、みんなとある墓の中に入った。墓の中にあった遺骨からは変なおいがしたが、その中で一晩過ごした。

次の日の朝、アメリカ軍が私の知人の女性を連れて、鉄砲てっぽうをかついで歩いて行くのが見えた。そのとき、母におんぶされていた幼い妹がワーと声をあげて泣いた。私は後ろから妹をポンポンたたいてなだめていたが、妹の泣き声でアメリカ軍に攻撃されたら大変だと思い、持っていた帯おびで妹の口をふさいだ。しばらくして妹が「んんん〜」と苦しそうにしたので、死んでしまうと思って帯

⁶ 前掲『南城市の沖繩戦 資料編』539頁参照。

を取ると、妹はぐったりしてしまった。妹は幸い死なずに済んだが、このときのことを思い出すと、本当に、何とも言えない気持ちになる。

そのころから、昼はアメリカ軍や避難民が歩いているのが見えた。今思えば、このときに手を挙げて出て行けば助かっていたが、当時は何をされるかわからなくて怖かったので、私たちはカンチャ（上志喜屋。現在の南城市知念字志喜屋）に避難した。

自分達で山を下りる

私たちはカンチャの山に行ったが、砲弾ほうだんによる攻撃がなかったので、静かだね、もう戦争ないのかね（終わったのかね）と思いながら山の中にいた。アメリカ軍はすでに近くまで来ていてテントも設営していたのだが、私たちはそのことを知らなかった。

しばらくして、（近くにいた避難民たちと）「あの人たちもみんな生きてるようだ」「自分たちも出よう、出よう」と話し合い、自然な流れで自分たちは山を下りて行った。一方で、同じ山の中に避難していた佐敷村さしきそん（現 南城市）新里しんざとのある一家は、夜に新里に向かっていたときにアメリカ軍の照明弾しょうめいだんに照らされ、機関銃攻撃きかんじゅうを受けて数人が亡くなってしまった。この家族には赤ちゃんもいたが、照明弾を受けたときに泣いてしまったのか、親族の手で殺されたとのことだった。

〔昭和 20 年（1945）6 月上旬、アメリカ軍は志喜屋で避難民を収容し始める。〕⁷ 私たちの家にはすでに西原の人たちが入っていたため、私たち家族は自分の家に入ることができなかった。当時は避難民たちに、「（この家は）あんたたちのものではない」と言われていた。家のタンスの引き出しもみんな出され、避難民たちに箱として利用されていた。避難民たちがかれらの村に帰った後、私の両親は、（散逸していた）タンスの引き出しをすべて探し出し、洗った。今でも、これらの引き出しは残っている。

志喜屋での戦争被害

タタンシチーに避難していたとき、同じくタタンシチーにいたある男性が、「日本軍の飛行機を見る」と言って壕を出て木に登っていた。そうやって登っていたのは彼だけだった。当時、海ではアメリカ軍の艦船かんせんが激しい艦砲射撃かんぱうしゃげきを行っていた。彼は木の上で爆弾の弾の破片たま はへんを受けてけがをしたが、大事に至らずに済んだ。ヤローヤーにも弾が入って来たようだが、不発だったようだ。

しかし、マジク（志喜屋集落南部にある岩山）の下にあった壕に避難していた奥武おう（現 南城市）の人たちは、みんなやられてしまったようだ。

食べるのに必死だった戦後

戦争が終わってからは、私は年上のお姉さんたちと一緒にアメリカ兵に引率されて、島尻まで日本兵の遺体の片付けに行った。ほかにもアメリカ軍のテント掃除などといった軍作業があり、それに参加すると日本軍が捨てた乾物かんぶつなどの食料をもらうことができた。そのため私は学校には行かず、

⁷ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』641～642 頁参照。

家族のために軍作業に行っていた。

戦後は食べることにしか考えず、食べるものがあれば何でもよかった。人の遺骨の上にてできていた大きな芋も食べた。玉城村の富里^{ふさと}にはアメリカ軍のごみ捨て場があり、アメリカ軍は少し膨れた缶詰^{つめ}や(外装^{がいそう})の箱が壊れただけの食品も捨てていた。民間人たちは競争してそれらの食品を取っていた。なかには羊の肉もあり、ごみ捨て場で取ってきた食品はごちそうだった。

(アメリカ軍の食べ物はおいしいので)私の兄は「アメリカ軍の犬になりたいな」と言っていた。彼は大正15年(1926)生まれで、兵隊として召集されて(激戦地だった)南部まで行き、命からがら生きのびたが、昭和22年(1947)に海で亡くなってしまった。きょうだいの中では兄2人が兵隊に行った。戦争の映画を見たときには、兄たちのことを思い出して夜は寝られなくなる。

そのほか、モービルオイルを使って揚げた天ぶらもよく食べていた。役場職員だった父の同僚が家に来たときには、出せる食べ物がなかったのでその天ぶらを出していた。当時、「(モービルオイルで揚げた)天ぶらを食べたら何歳までに死ぬ」ということが言われていたので、「じゃあ私は30歳まで生きないね」と言うとき親に叱られた。だが、そんなものを食べていたけど、私は今もこんなに元気である。

ある日、わが家の畑に芋掘りに行くと、見たこともない、まるで牛のような、大きな爆弾があった。不発弾^{ふはつだん}だったと思うが、それが爆発するかもしれないということをそのときはわからず、頭に載せて運んだ。(爆発するかもしれないことを)何もわからなかったので大変なことだったと、今となっては思う。

私より年下の人達は戦後に毛遊び^{モーアシビ}を経験し、奥武まで遊びに行った人もいたようだ。しかし私たちが年頃のときには、毛遊びはできなかった。(アメリカ軍の一員として)沖縄に入ってきていたフィリピン人などの外国人が出歩いていたからである。

昭和20年代の半ばごろまでは本当に大変だった。

(2015年 知花幸栄と事務局による聞き取り 構成：山内優希)

日本軍が軍馬を飼育

沖縄戦が始まる以前から、日本軍は知念集落に駐屯していた。日本軍はたくさんの軍馬を飼育していた。「はな」という兵長が、よく日本刀を下げて軍馬に乗り、集落内を闊歩していた。

集落内のガマ（自然壕）からヤンバルへ避難

沖縄戦が始まると、初めは自分の屋敷の近くの壕にいたが、危ないと思い、別の壕（アンガーアブ）に移った。そこでは上から絶え間なく水滴が落ち、じめじめしていたので、2日でタンチブラーに移った¹。

タンチブラーで幾日か過ごしていたが、海上からの艦砲射撃が激しくなって身の危険を感じるようになった。そのころ、兵隊にタンチブラーを追われ、やむなく家族（祖父母、両親、姉、自分、弟2人）で、歩いてヤンバル（沖縄本島北部）に避難することにした。知念上原（現 南城市）に上がり、アカバンター（南城市佐敷手登根にある高台）から佐敷村手登根へ下りて、馬天（現 南城市）、与那原（現 与那原町）を通過して、ヤンバルへと向かった。当時、知念集落の多くの人々がヤンバルへ移動していた。与那原では電柱が倒れ、火がパチパチ燃えていた。

私は当時6歳だったが、病弱で目の不自由な父の手を引いて移動したので大変苦労した。母たちは頭に鍋などの荷物を載せて歩いた。また、荷物が多かったので、（荷物を運搬させるために）飼っていたジージーウマグワ²も引っ張って連れていった。

石川の民家で集団生活

中城村を経て石川（現 うるま市）に着くと、石川橋が壊されていたため、海側を歩いて渡った。

避難中、連れていたジージーウマグワを食料の足しにするため、殺して（肉をいくつかに分けて置いていた。しかし、）食べようとしたら、ほとんど盗まれてしまった。

艦砲射撃を避けるため、昼は近くの山に隠れ、夜間に暗い道を歩いて行った。途中で祖父母とはぐれてしまったこともあったが、のちに合流できた。

（その後）ヤンバルで捕虜になった。その後、すぐに家族で石川まで自力で移動させられた。そして、石川の収容所に入り、同郷の吉田さん一家を含む4家族で、同じ民家でしばらくの間暮らした。学校が近くにあり、私はそこに通って学ぶことができた。健康がすぐれない父を支えながらの避難生活だったが、母がしっかりしていたおかげで家族は何とか困難を凌ぐことができた。しかし、祖母は石川で亡くなった。

¹ 具志堅さんによると、避難の順番は「自宅近くの壕→タンチブラー（自宅から近かった）→アンガーアブ→タンチブラーに再び戻った」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

² 具志堅さんによると、「馬の品種で通常の馬よりも小柄。当時は農耕用として飼育していた」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

避難民が住んでいたわが家

石川から知念までは、アメリカ軍のトラックに乗って帰った。知念に着くと、集落が焼け野原状態になっていてびっくりした。うちの屋敷内には避難民^{ひなんみん}の16家族が住んでいた。その中には、久高島^{くたかじま}沖で船が攻撃^{こうげき}され、命からがら陸にたどり着いていた奄美大島^{あまみおしま}出身の人（マキという苗字だった）もいた。この人は戦後、奄美大島に帰ったあとも軍作業^{ぐんさぎょう}などがある沖縄は稼^{かせ}ぎどころであると、たくさんの人を沖縄に連れて来ていた。

避難民の中には幼児を抱えている女性もいた。子どもを抱えては軍作業の仕事ができないということで、彼女は私の母に子どもを預けていた。母はこの子が大きくなるまで育てていたが、学校にも通わせなければならなかったので、苦勞した。この子どもは成人したあと、自分の子ども2人を連れてわが家を訪ねてきた。

（2017年 知花幸栄・永吉盛信による聞き取り 構成：山内優希）

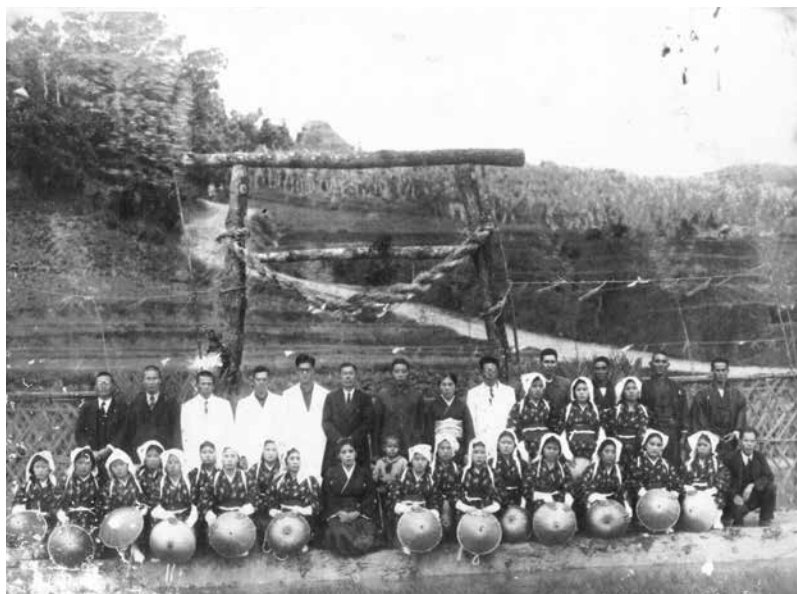
しるま 城間 貞子 (旧姓親川 大正14年生まれ 知念・志喜屋)

〈村内避難〉

献穀田田植式に早乙女で参加

昭和18年(1943)に志喜屋(現南城市)で行われた献穀田田植式¹で、私は早乙女に選ばれて参加した。田植式のときには、笠をかぶった早乙女の衣装のままで田んぼに入り、(田んぼのそばに立っていた合唱隊の)歌に合わせて、早乙女みんなで揃って田植えをした。このときの歌を今でも覚えている。「今日はめでたや 知念村の ユラティク ユラティク 献穀田の御田植え ユラティク ユラティク 苗は蓬萊 玉の苗」という歌詞だった。

(献穀田で収穫された、新嘗祭に献上する)米は、割れや欠けのない上等なものを選ぶために、一粒一粒、選別されていた。それはマスクをしながらの作業であった。



志喜屋での献穀田田植式の写真(昭和18年)



早乙女姿で立つ城間さん(昭和18年)

タタンシチーのそばの壕に避難

沖縄戦のとき、私はタタンシチー²のそばにあった大きな壕(ヤローヤー³ではない)に避難した。壕に弾が入ってくることはなく、弾は大里村(現南城市)の方に飛んでいっていた。

¹ 1943年(昭和18)、志喜屋の親川仁盛の田んぼが献穀田に選ばれ、献穀田田植式が挙行された。献穀田は、新嘗祭(稲の収穫を祝う神行事。毎年秋に天皇が執り行う)に奉納する米を育てる田のことである。毎年、宮内庁が県を通して、村の代表的な篤農家の田んぼを指定した。献穀田に選ばれるのは農家にとって非常に名誉なことであった。田植式には親川栄蔵村長や区長、小学校教員、県庁職員らも集まり、村から選抜された20人の「早乙女」(17~19歳の未婚の娘)が献穀田の歌を歌いながら田植えをした。(『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』南城市教育委員会 2021〔第2版〕531~532頁)

² 志喜屋集落の後方にある熱田原貝塚の南側の崖下に位置する壕。

³ 多くの志喜屋住民が避難していた壕。現在の「かちひん橋」北方に所在。急峻な場所にあり立ち入り困難(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』577頁)。

沖縄戦が始まってしばらくしたころ、避難民たちが志喜屋の大通りから^{あご}字知念や^{さしきぞん}佐敷村（どちらも現 南城市）の方に移動していくのが見えた。そのとき志喜屋の人たちは壕の中において、「あら、みんなイチュンドー（行っているよ）、イチュンドー」と言って、その様子を見ていた。

その後、夕方に私たちは自分の家がある志喜屋の方に下りて行った。家は焼けていた。

（2015年 知花幸栄と事務局による聞き取り 構成：山内優希）

女子青年として毎日竹ヤリ訓練

私は佐敷村字新里(現 南城市)の^{アガリ サ ク マヌメ}〈東佐久間前〉の長女として生まれた。戦争当時は 20 歳だった。戦^{いくさ}が来る前は、壕掘りや竹ヤリ訓練を相当させられた。訓練は新里の製糖工場¹で、男も女も一緒にあって毎日行った。1, 2, 3 の号令で「ヤー ヤー」と言いながらワラ人形を(竹ヤリで)突いていた。今考えると、ままごとのようだと思う。青年会として(この訓練を)やっていたが、男は出征していたので、参加者のほとんどは女子青年だった。

冗談を言いながら楽しんで壕掘り

大里村の旧^{いなふくく}稲福区(現 南城市)²の^{ミーヤグラー}〈新屋小〉の後ろの山に、^{たけ}武部隊の壕を掘った。壕はザンクビリの近くにあった。ザンクビリは旧稲福区の東側のはずれから、^{おこく}小谷集落(現 南城市)に向かっのびる山道で、〈新屋小〉の屋敷はその道に沿ったところにあった。私たちは一生懸命、(壕掘りを)やった。武部隊が台湾に移動したあとは、^{たま}球部隊が来ていた。

新里の女性に冗談好きの人(私より 4, 5 歳上)がいたが、兵隊たちやほかの作業する女性たちと冗談を交わしていた。なので、壕掘りは楽しんで行っていた。

あるとき、作業の様子を見ていた^{チニングラー}〈知念小〉のおじいさん(セイロウスーと言っていた)がやって来て、「兵隊さん、新里の女はみんな淫売ですよ」と、怒った口調で言った。すると、この冗談好きの女性は卑猥な冗談を言って(このおじいさんを)からかった。そのため、そのおじいさんは余計に怒っていた。そのおじいさんの顔は今でも目に浮かぶ。

板と米俵を担ぐ

新里や旧稲福では日本兵の人数が少なかった。壕掘りのとき、兵隊の姿はあまり見かけなかった。

壕掘りが終わると、次は佐敷の学校から野戦病院壕まで板を 2 枚運ばされた。野戦病院壕は旧稲福集落の西側にあった製糖工場の近くにあった(詳細な場所は不明)。私は板を担ぎながら、そこへ行くために小谷集落の坂を通り、そして、旧稲福区のザンクビリを上って行った。この作業は 1 日に 2 回だった。

野戦病院の壕では多くのけが人がいた。これらのけが人は木の枝で作った床に寝かされ、「水をくれー」と呻いていた。私はその様子をおかしいと思いつつ見ている。その壕は、今もそのまま残っていると思う(現存しているか不明)。

また、米俵も 4 人がかりで運んだ。米俵は棒で担いで、(板を運ぶときと)同じ道を通って、稲福^{トコ}の殿に運んだ。米を担いで坂を上るのはつらかったが、当時は若かったので難儀とは思わなかつ

¹ 当時の製糖工場は現在の新里公民館にあったと考えられる(佐敷町字新里字誌・編集委員会『字誌新里』佐敷町字新里区 2000 272 頁)。

² かつて集落の中心だった場所で、「上稲福」と呼ばれる。現在の稲福集落の東側丘陵上に位置する。稲福遺跡や稲福殿などの文化財が現存。

た。男がいなかったので女の人たちが力仕事をしていた。戦争当時は色々あったが、いい勉強になった。

戦争が始まったとき、日本兵は5、6人しかいなかった。「兵隊はドロボーだ。鶏も盗んでいた」という話を聞いたこともあったが、自分には関係ないと思っていた。

新里集落上の壕で避難生活

昭和20年(1945)の3月(何日かは不明)、自分たちで掘ってあった壕(名称なし)に避難した。父(助造)は義勇兵として出征していたので、私は祖父母(蒲、ツル)、母(カメ)、2歳下の妹(シゲ)、親戚の佐久間(本家)のおじいさん(名前不明)と、その人の孫で6歳くらいの男の子(セイケン)の7名で避難した。

壕は現在のユインチホテルの北側の崖下あたりに掘っていた。側には泉(新里坂を上った右側にあった)があった。私たちはその壕に避難してから、どこにも移動しなかった。

壕から眺めていた日本軍の特攻攻撃

壕のあるところは、ちょうど新里(集落)の後背地になっていた。そのため、壕からは海がよく見えていた。勝連半島(現うるま市の東南部に位置する半島)近くの海にアメリカ軍の軍艦が、いっぱい停留しているのが見えた。

日本軍の特攻隊が飛んできて、アメリカ軍の軍艦めがけて特攻攻撃をしていた。しかし、(特攻隊の飛行機は)突撃する前にほとんど落とされていた。一機だけ突撃に成功していたのを見たことがある。私たちは毎日、そのような状況を見ていた。

水も食糧も豊富な壕生活

旧稲福にいた日本軍が島尻(沖縄本島南部)に移動以降、私たちは1人の日本兵にも会わなかった。戦争が激しくなっていた時期だったが、私は夕方になると腰に木の枝を差して芋掘りに行っていた。また、殿には米が山盛りに残してあった。以前そこに米を担いで運んで行ったことがあるから、そのことを知っていた。私は、殿から(避難している壕まで)米を担いで運んだ。私たちが捕虜になったあとは、ほかの住民が殿の米を取り合うようになった。

旧稲福区にある慰霊塔の西側にあるカゾーラーヤマ壕(場所不明)にも、タオルや鯉節などの日本軍の物資が相当あった。私はその壕にも物資を取りに行った。

ある日、カゾーラーヤマ壕から現在の稲福の北はずれにあるイランダ(玉城盛明さんの家のあたり)で、アメリカ軍がテントを張っているのを見て、大変だと思って逃げ帰ったことがあった。

旧稲福区のザンクビリ付近に、〈上玉城〉の畑があり、その畑の下にガマがあった。そのガマには米や乾燥ジャガイモ、ワカメなどの食糧品や、毛布などがいっぱいあった。私たちはそのガマからも米を取っていた。私はそのとき、カリガマーというところで一軒だけ明かりが付いているのを見た。稲福の人たちが、ほとんど島尻に避難している時期だった。

日本兵がいたところでは、早く島尻に避難するように言われていたようだ。また、百名や喜良原

(どちらも現 南城市) あたりの人たちも島尻に避難していたようだ。私の親戚も喜良原に避難していたようだ。

新里には日本兵がいなかったので、私たちはそのまま壕にいた。捕虜になってから色々なことはあったと思うが、戦争中の新里の犠牲者は4、5人と少なかったと思う³。

弾は私たちの頭の上をヒューヒューと飛んでいたが、私たちのところには落ちなかった。新里を超えて日本軍のいる島尻に飛んでいた。

私たちが避難していた壕の近くには水が湧くところがあった。その水でご飯を炊いたり、風呂に使ったりしていた。そのため何の不自由もなかった。夜はシンメナービ(大鍋)で米を炊き、ヤギや豚を潰して夕飯を食べ、壕の中で寝た。翌朝はアメリカ兵が壕に来たら大変だということで、朝食をすましたあと、昼ご飯用に肉を詰めたおにぎりを作って山に隠れていた。

私は山の中に隠れているとき、捕虜になった住民を載せたトラックが、新里ビラ(坂)を歩いていくのを見たことがある。

当時は芋を主食とする時代だったが、(戦争中は)戦争前よりご馳走を食べられた。(そういった面では)喜びながら過ごしていた。しかし、シラミが大変だった。シラミはいくら潰してもずっと湧き出てきて、とても気持ち悪かった。あの体験はよく覚えている。今でも、(避難していた)あたりを通ると「おかげでご馳走になりました」と、礼をして通る。

情報が少なかったのが幸이었다

避難中、誰からも連絡はなかった。ある時、山のカズラ(芋の葉)を摘むために歩いていると、刀を差した日本軍の将校らしき人たちとばったり会って、びっくりしたことがある。その日本兵たちは「心配するな。向こう(東側の海)にはアメリカ軍の軍艦がいっぱいいるから、危ないときには豊見城の軍の壕を探して行きなさい」と言っていた。(この日本兵たちは)きっと偵察のために歩いていたのだと思う。しかし、私は豊見城の壕に行く気はなかった。なぜなら、食べ物があるから逃げる必要はないと思っていたからだ。どこにも行かなかったのは(今思うと)不思議なことだ。

山の中で食べたアメリカ軍の缶詰

私たち以外周囲には誰もいなかったので、私は(安全だと思って)たまに壕から出歩くことがあった。すると、アメリカ軍の缶詰やタバコ、石鱈^{せつげん}などを入れた小さい携帯箱が所々に置かれていた。私はそれを拾って壕に持ち帰っていた。

(一緒に避難していた)年寄りたちが「これはお前たち若い人が先に食べてはいけないよ。毒が入っていたら大変だ。年寄りは食べて死ぬのは構わないから、あんた方はあとで食べなさい」と言って、先に食べた。すると、「アイエナー こんな食べたことないよ。ハッサミヨー ご馳走だよ」と言って、かき込んで食べた。そして、年寄りたちは「こんなおいしいものは食べたことがない。早くあんた方も食べなさい」と言った。缶詰には卵やソーセージなどの肉が入っていた。携帯石鱈は長く

³『字誌新里』に掲載されている「字新里戦没者名簿」によると、軍人48人、軍属32人、一般住民215人とされている。(佐敷町字新里区字誌・編集委員会『字誌新里』佐敷町字新里区 2000 690頁)

使った。

アメリカ軍が小箱を置いていたのは、避難民が隠れていないか様子を探るためだと思う。あとで、アメリカ軍が避難民を探していたという話を聞いた。

壕を出て親戚の墓に移動

ある日の朝、ガヤガヤしているのが聞えたので見に行ってみると、アメリカ兵がいっぱいいた。私たちが避難していた壕の下側は山になっていたのだが、そこにテントがあった。アメリカ軍が一晩でテントを張ったのだ。ここにいたら（アメリカ兵に見つかって）大変だと思い、私たちは壕から移動することにした。

壕を出て、新里と小谷の間にあるチジンキ山（新里の山）の方に移動した。（山の中を）歩き回っていたら墓を見つけた。その墓には、おばさん（母の妹の嶺井ムタ）の着物があった。「ここに、おばさんは隠れていたんだね」と喜び、その墓に避難することにした。このおばさんたちは、私たちより先に捕虜になって墓から出ていたようだ。私たちは墓の中にあつた厨子^{ずし}ガメに寄りかかって寝ていた。

私たちは長い間、壕にこもって生活をしていたので、誰にも見られていなかった。そのため、（私たちが）死んでしまったという話が（親戚から）出ていたようだ。私と一緒に避難していた人たちの中で、弾に当たって被害を受けたのは1人もいなかった。

私たちの中で、死人を見た者は2人しかいなかった。1人は新里の上の山の中にあつた日本兵の死体を見た。もう1人は戦後に旧稲福区のカゾーラーヤマ壕の側からンマイー（馬場）に上がるところで死体（兵隊か民間人かは不明）を見た。

おばさんに促されて山を下りる

私たちが壕から墓に移動していた時期にはすでに、新里の人たちは、ほとんど捕虜になっていたようだ。

私たちが捕虜になったのは、おばさんが呼びに来たからだ。おばさんが墓に置いていた自分の着物を取りに来たとき、「ヨシコー」と私を大きな声で呼んだ。その声を聞いた私は、「大声を出したら（アメリカ軍に見つかって）大変なことになるのに」と怒った。するとおばさんは「ここにいたのか。あなた方だけがまだ出てきていない（捕虜になっていない）よ。あなた方は死んでしまったという話も出ている。早く（山から）出てきなさい」と言った。そこで私たちは、おばさんと一緒に山を下りた。

おばさんは「あなた方は生きていたのか」と言ったが、私は「私たちが死ぬもんですか」と笑って答えた。

新里での自由な捕虜生活

捕虜になった私たちは、新里の^{かわらぶき}瓦葺の民家（^{アラカチメー}新垣前）に収容された。近くのンマイー（馬場）には金網で囲われた施設があり、アメリカ兵がたくさん駐留していた。私を含めて女たちが、その

近くを歩いていると、アメリカ兵が「ハバー ハバー」と言っていたが、私たちが両手でバツ印の仕草をして相手にしなかったら、向こうは何もしてこなかった。このアメリカ兵は作業班だと思いが、彼らは囲いの中において、集落内や民家付近を出歩くことはなかった。(反対に) 私たちは集落内を自由に出歩くことができた。そのため、(アメリカ兵との間で)事件が起きるといことはなかった。

新里で捕虜になっていたときに、アメリカ兵による「女漁り」があったという話は聞いていない。小谷では、集団で畑に芋掘りに行った女たちの中で、アメリカ兵に引張られた人がいるという話を聞いたことがある。なお、近くの集落では「作業に出る」と言って、アメリカ兵相手に儲け(稼ぎ)に行く人もいたようだ。

ヤンバルでの苦しい生活

(しばらくして、)馬天港(現 南城市)から船に乗せられた。どこで降ろされたかわからないが、久志村の東喜(現 名護市二見の一地域)という小さい集落に収容された。

東喜でも配給はあったが少ししかなかった。米は1合ぐらいだし、他に食べるものはなかった。配給だけでは足りなかったので、チファンパー(フキ)の茎をゆがいて皮を剥ぎ、川で晒して灰汁を抜いて食べた。捕虜になってからの生活は苦しかった。

私たちは米を少し持っていたから、まだましなほうだった。戦争中は(苦労もそれほどなく食生活は)上等だったが、捕虜になってからはアワリ(苦労)した。それでも生き延びたからよかった。

戦時中も慈悲の心を忘れない母

母は、側にいる親戚の人たちが何も持っていなかったのをかわいそうに思い、米を分け与えていた。私が「難儀して担いできて、自分の食べるものも少ないのに、他の人にあげるのか」と言うと、「皆同じ(状況)であるのに、自分たちだけ食べることができるか」と言っていた。私の母はそんな人だった。

本家のおじいさんと孫が、ケガが元で亡くなる

ヤンバルでは食べるものがなかったから、「軍に稼ぎに行く」と言って、山に入ってアメリカ兵相手に商売をする女の人も多かったと聞いている。

当喜には何ヵ月いたかわからないが、そこで私や私の周りの人たちがマラリアに罹ることはなかった。ただ、一緒に行動していた佐久間のおじいさんと、その孫のセイケンは、ケガが元で亡くなった。私の母はセイケンを背負って病院に連れて行っていた。

2人は新里で私たちと同じ壕に避難する前に、他のところで怪我をしたそうだ。なお、そのときに母親(セイケンの母か?)は亡くなったという。その後、私の母親が2人を引き取り、2人は(新里の壕に)一緒に避難するようになったそうだ。

ヤンバルから新里へ帰る

東喜からは船で帰ってきたと思うが、(いつ乗って) どこに着いたかは覚えていない。上陸後、アメリカ軍のトラックに乗せられて新里に着いた。私の家は焼けてなくなっていた。私の家は製糖工場の側にあっただので、最初に焼かれたのだと思う。

私の新しい家は、区民の共同作業で建てられた。資材はアメリカ軍から配給された。そのころは、生活がすでに落ち着いてきていて、仕事もできるようになっていたの、区民たちは自分たちで建てることができた。

イクサユー（戦の世）は、みんな頑張った

戦の最中に栄養をつけて今まで元気である。イクサユー（戦の世）はみんな頑張った。私の祖母は八重山に寄留していた息子のところに行き、そこで93歳で亡くなった。私の母は長生きして92歳で亡くなった。妹も93歳まで生きた。

戦争中、島尻あたりに避難した人たちは食べることもできなくて、相当苦労したようだ。私たちは一切そのようなことはなかった。どこにも行かず（ひどい戦争被害を受けなかった。ほかの戦争体験者の苦労を考えると、戦争体験を語るのは）恥ずかしい。だから、戦争体験としてはあまり参考にならないと思う。

(知念昌徳による聞き取り 2016 構成：事務局)

日本兵に立ち退かされてヤンバルへ避難

知念村シマグラー（現 南城市知念具志堅）には、昭和19年（1944）ごろから日本軍が常駐するようになり、わが家にも日本兵が立ち寄るようになった。戦争の兆候を感じたのは、アメリカ軍の小型偵察機が海上を旋回しているのを目にしてからだ。

しばらくして自家製の防空壕掘りが始まった。その防空壕ができたあと、そこに避難するようになったが、空襲が激しくなってくると、集落の山手にあるウージヌガマ（具志堅ウージ洞穴遺跡）¹に移動した。当時、住民のほとんどがこのウージヌガマで避難生活をしてきた。

そこへ日本軍が来て立ち退き命令を出した。やむなく住民は沖縄島北部のヤンバルへと避難行動を開始した。私は、祖母はじめ両親、姉4人のうち3人と、2番目の姉の息子（生後数ヵ月）の8人で、歩いてヤンバルに向かった。長男の兄は防衛隊に召集され、3番目の姉は軍の看護要員として、それぞれ日本兵と行動を共にしていたので、家族と分かれていた²。

昼間は砲弾を避けて岩場や墓場に隠れ、暗くなったころに行動した。佐敷（現 南城市）を超えて与那原の町に入り小学校の前に来たとき、パチパチと家が燃えているのを見たことを覚えている。それから、中城村、泡瀬（現 沖縄市）、具志川、石川（どちらも現 うるま市）と進んだ。石川では、石川橋が壊されていたので、祖母におぶってもらって水の中を渡った。

ヤンバルでの思い出

私たちは金武村（現 金武町）屋嘉で一時過ごしたあと、久志村（現 名護市）の山中で捕虜となり、嘉陽（現 名護市）の収容所へ連れて行かれた。その後、羽地村（現 名護市）仲尾次の民家で暮らした。

ずいぶん落ち着いたところに仲尾次集落の道路沿いの川で泳いだこと、仮住まいの家のすぐ後ろにあった遊び場で遊んだことが頭に残っている。ある日、母と山に登ったとき、畑の中に死体を見つけた。恐らく戦争で犠牲になった1人だろう。

那覇市小禄に嫁いでいた2番目の姉は、戦争で夫を亡くし、生まれたばかりの子を連れて、私たち実家の家族と避難していた。ヤンバルの避難先で遭遇したアメリカ兵は、ポケットから写真を出して、姉に見せ「私もこんな小さい子を祖国に置いて戦争に参加している」と言ったという。姉は英語がわからなかったが、表情や仕草で、彼がそのように話していると感じたそうだ。そのようなアメリカ兵と会ったこともあり、姉は「敵のアメリカ兵の中にも良い人がいるんだよ」と言っていた。

召集された20代の兄は、ヤンバルへ避難する家族を追いかけてきたそうだ³。ところが、家族に「アメリカ兵に見つかるとう若い人は殺されるから隠れておきなさい」と言われ、山に隠れることになっ

¹ 具志堅集落の北方に位置し、琉球石灰岩の崖下にある壕。

² 知花さんのきょうだいの証言は本紙に掲載されている（当間春子さん、新垣美佐子さん）。

³ 知花さんと一緒に避難した2番目の姉である当間春子さんの証言によると、「家族の行方を尋ねて追いかけてきた弟ともやっと会うことができた。」とある。

た。しかし、彼はそのまま帰らぬ人となってしまった。

「戦争も平和も人の心でつくる。すべて心」

翌年、郷里へ帰ると家は跡形もなく焼き払われていた。そのため、テントで生活した。

兄をはじめ多くの犠牲者を出し、生活基盤を失った戦後の父母らの苦勞を見て、忌まわしい戦争は絶対に二度と起こしてはならないと心に誓っている。また、戦争に直接結びつく基地を造らせてはならないとも思っている。世界の人々を大事にする真の平和実現を求めていかなければならないと痛感している。

「戦争も平和も人の心でつくる。すべて心」と、ある小学校の校長先生が書き残した名言を肝に銘じて行動していきたい。

(2019年 本人執筆 構成：山内優希)

*文中の [] 内は、次の資料を参考にして補足した説明です。

- ① 2014年8月9・10日付『琉球新報』「未来に伝える沖縄戦—失われた青春時代— (128・129)」に掲載された照喜名さんの戦争体験の記事
- ② 琉球新報のYouTube「<未来に伝える沖縄戦 128>戦に震え、死は恐れず 照喜名朝一さん(82)上」(<https://www.youtube.com/watch?v=MLegHunQMN4&t=987s>)
- ③ 琉球新報のYouTube「<未来に伝える沖縄戦 129>父、米兵テント襲撃制止 照喜名朝一さん(82)下」(<https://www.youtube.com/watch?v=fSvYdT9fDsI&t=999s>)

戦時下の知念村

小学生だったころ、「敵機来襲¹！」という叫び声を聞いたら、すぐに耳と目を押さえる訓練をさせられたのを私は覚えている。[知念国民学校5年生になると、登校中に先輩たちが「敵機来襲！」と叫んだら、溝や岩の陰に隠れる訓練が始まった。逃げる練習をしないと罰された。]

日本軍は村内にいくつかの陣地を造っていた。知念岬²のクビリ(坂になった小道)というところには中城湾に向けた大砲、現在の守礼カントリークラブ(現南城市知念知名)がある場所には大砲2門、さらにその頂上には高射砲(航空機を攻撃する火砲)が設置されていた。現在、南城市知念社会福祉センター(現南城市知念久手堅)があるところには砲門³が3つあった。

昭和19年(1944)になると空襲警報が盛んに発せられるようになった。警報が出たときには、「ランプを消して明かりを戸外に漏らさないように」と自警団⁴が回って注意していた。

私の父はヤブー⁵をしていたので、体の具合が悪くなった日本兵がよく訪ねてきていた。[父の名前は半農半漁で生計を立てていたが村議会議員も務めていた。]治療代は無料だった。母が兵隊にゆで卵をあげているのを見たことがある。

当時、徒歩以外の人の移動は荷馬車や客馬車が主で、安座真(現南城市)から客馬車が出ていた。日本軍が来てからは車やトラックが往来するようになり、にぎやかになった。

十・十空襲

昭和19年10月10日の十・十空襲の日、私は板馬(現南城市知名の一地域)のイチクブリという場所で壕掘りの手伝いをしていた。2人1組でモッコを持って、掘り出した土を外へ運び出す作

¹ 敵の飛行機が激しい勢いでおそいかかってくること。

² 南城市知念久手堅にある岬で、太平洋を一望できる。現在は公園として整備されている。

³ 砲弾を発射するために城壁や砲塔、艦船などに開けた穴のことで、砲眼ともいう。

⁴ 自警団は、火災や盗難などから自分たちの安全を守るために民間人が自発的に組織する団体のことであるが、照喜名さんがここで述べているのは警防団(1939年1月に警防団令により新設され、地域の消防や防空、その他の災害の防護に従事した団体。1947年廃止)のことである可能性もある(空襲警報の発令時に活動していたということであるため)。

⁵ 鍼や灸、薬草などを使って治療を行う民間の治療師。

業をしていた。[そこに、馬に乗った吉岡隊の兵隊が来た。サーベル（軍刀）をさげてピストルも携行していた。この日、上空を飛んでいる飛行機の音がいつもとは違っていった。兵隊は「今日は友軍⁶の演習」だと言った。]しかし、その後、彼は双眼鏡で空を見上げて「敵機来襲！敵機来襲！」と大声を発し、180度回転して陣地の方へ走って行った。[急きよ、壕掘りは休みになった。しばらくすると、久高島のある方向から米軍機が飛んできて、バババババと機銃掃射を行なった。]海上で漁をしていた人は機銃掃射を受けて逃げまどった。このときの機銃掃射で、監視所にいた兵隊が1人亡くなった。青年たちが（機銃掃射で撃たれた）彼をサバニ（小型の木造船）に乗せて、板馬から与那原にあった部隊の本部まで運んだが手遅れだったという。[その後、30機ぐらいの米軍機が知念から去っていった。]

そして午前11時ごろに、がーん、がーんという大きな音と共に地響きがした。首里（現那覇市）の方を見ると、入道雲のような[黒い]煙が[下から上の方にボンボンすさまじい勢いで]わき上がっていた。[[首里がやられた]と大人たちが叫んでいたが、夜になり、首里ではなく那覇が攻撃されたという情報が入ってきた。]あとから、このときの空襲で、那覇の港に停泊していた船が破壊されたと聞いた。その残骸が、波之上沖（現那覇市）に戦後しばらく残っていた⁷。

疎開に行きそびれる

しばらくして、父から、私と次兄の妻の2人は、「（沖縄にいと）危ないから県外疎開をするように」という話があった。[当時、次兄は日本兵として中国大陸にいた。]

疎開に行くことになった私たちは、大きな風呂敷に着替えなどを入れて荷造りをした。[しかし朝方まで準備をしていたため、出発当日の朝に寝坊して客馬車に乗り遅れてしまった。この日は、安座真で客馬車に乗って佐敷（現南城市）まで行き、そこからバスに乗って与那原に向かい、与那原から軽便鉄道に乗って那覇に行く予定だった。結局、今から佐敷まで歩いてもバスに間に合わないということで]疎開に行くことを断念した。[これは運といえば運だと思ふ。疎開船に乗っていたら、その後どうなっていたかわからない。]

壕を転々として避難

三男兄（朝進）が海軍に召集されたが、彼を見送ってしばらくしてから、空襲警報がひんぱんに出されるようになった。昭和20年（1945）3月ごろには、大きな爆弾が下ターブック⁸に落とされた。アメリカ軍が上陸するという情報も流れてきたので、[両親と私、妹の4人で]防空壕に避難するようになった。

北谷（現北谷町）の方からアメリカ軍が上陸したという情報を聞いたあと、山の向こうで炎が上がっているのが見えた。アメリカ軍の艦砲射撃も激しくなり心配になってきた。アメリカ軍の艦船は、夜はみんな沖の方へ行き、翌朝になるとまた来て、陸に向かってバンバンと艦砲射撃をして

⁶ 味方の軍隊のこと。日本軍のことを指す。

⁷ 裏付けとなる資料を事務局は確認できていないが、照喜名さんの語りをそのまま掲載した。

⁸ ターブックは、沖縄の言葉で「田んぼ」を指す。場所は不明。

いた。日本軍も大砲を2、3発撃っていたが、それよりもアメリカ軍からの攻撃の方が激しかった。
[米軍機が落とす焼夷弾により祖母の家が全焼し、逃げ遅れた祖母が亡くなった。長兄も南洋で亡くなった。]

私たち家族は板馬の自然壕にいたが、そこは危ないということで海野(現 南城市)の防空壕へ移った。しかしそこには避難民が多く入っていたため、入れなかった。その後、場所をあちこち移動して防空壕を探した。親慶原(現 南城市)から港川(現 八重瀬町)に避難するつもりで歩いていたときに、爆風を受けて一時目が見えなくなった。気も失ったが、両親の声で目が覚めた。[海野からは佐敷村(現 南城市)の伊原、そして久手堅へと移動した。伊原から久手堅に向かうときには、ナーワンダー(久手堅にあるグスク)の近くで迫撃砲を撃たれたが、弾が爆発せず命拾いをした。久手堅の壕にいた6月ごろ、義勇隊に動員されていた四男兄(朝賞)が帰って来た。そのころ、父は戦争に勝ち目がないと思ったのか、壕の入口に隠してあった手りゅう弾を持って来るよう私に言った。しかし、隠してあったはずの場所に手りゅう弾はなかった。手りゅう弾があったら、みんな死んでいたかもしれない。]

避難中には、防空壕の裏で爆弾が破裂して亡くなった人や、佐敷の畑で機銃掃射を受けて命を落とした人など、計3人の死を見た。子どもながらも、戦争というのは人殺しをするものだと思った。

白旗をかかげて出て行く

[その後、家族で久手堅の山を下り、家がある板馬へ向かった。私は兄と2人で行動した。普段は20分くらいで通る道を8時間かけて、アメリカ軍の攻撃を避けながら移動した。板馬で両親と妹と合流し、壕を見つけ、家族5人と親戚の女性2人の計7人でそこに避難した。その約1、2週間後、アメリカ兵約10人が壕の近くでテントを張っているのが見えた。その後のある日、父は自分のふんどしを木の枝にくくりつけて白旗を作った。]

その白旗を私が持って先頭に立ち、家族みんなで壕の外に出た。道にはアメリカ兵が10メートルおきに座っていた。私たちはそこで捕虜になり、屋比久(現 南城市)に収容された。

三線とともに乗船

アメリカ軍は、板馬の前に栈橋を造る計画をたて、リーフの磯まで埋め立てるために砂利石を撒き、トラックが通る道を造っていった。そうして沖栈橋ができると、屋比久に収容されていた避難民たちは、そこから船に乗せられてヤンバル(沖繩本島北部)に送られた。私たちも強制的に船に乗せられた。私は、沖に行ったら重りを付けて沈められると思い、半泣きになっていた。

このとき、父が「これを持って行きなさい」と言って私に三線を持たせた。家は戦争で焼かれてしまったが、家宝として大事にしていた三線だけは防空壕に隠してあった。この三線は戦後にどこかで盗まれてしまい、今はない。[なお、船に乗るときにたくさんの避難民が移動する中、折れて捨てられていた三線を見つけた。父に言われて、その三線のチーガ(胴)も一緒に持って船に乗った。]

船が着いた先は久志村(現 名護市)だった。そこで降ろされた私たちはトラックに乗せられて、嘉陽(現 名護市)という場所に連れて行かれ、そこで生活することになった。

[次姉⁹に言われて、私は嘉陽の浜で三線を弾^ひいた。すると、若い女性たちが10人ぐらい集まり、彼女たちに「あれ弾いてくれ」「これ弾いてくれ」と頼まれた（このころ、若い男性は軍に取られていたのでいなかった）。伴奏^{ばんそう}すると、彼女たちは喜んで歌い、歌いながら泣く人もいた。今考えると、自分の恋人のことを思い出していたのかもしれない。その様子に驚いた父は、私とその三線をなくしたら困ると思い、カンカラ三線¹⁰を作って私に持たせた。それが、私にとって初めてのカンカラ三線となった。]

私たちは翌年（1946年）1月ごろまで嘉陽で過ごし、知念村に帰ってきた。しかし、知名岬にはアメリカの艦船があり、すぐに自宅に帰ることはできなかった。知名岬^{イチャンマ}、板馬^{ばんば}、佐敷^{さてん}、馬天、与那原までは立ち入り禁止区域になっていた。大きな台風¹¹が来て艦船が打ち上げられており、その整理に戸惑^{とまど}っていたようだった。板馬^{イチャンマ}のクビリ（坂になった小道）のところにCP（沖縄人の民警^{みんけい}察^{さつ}）がいて、アメリカ兵と2人で監視^{かんし}をしていた。

（2016年 知花幸栄・永吉盛信による聞き取り 構成：山内優希）

⁹ 照喜名さんのご家族によると、別々で避難していたが途中で合流し、一緒に収容されたとのこと（事務局による聞き取り2024）。

¹⁰ 空きカンと棒^{ぼう}を組み合わせて作られた、手作りの弦楽器のこと。

¹¹ 1945年10月に猛威をふるった台風（Typhoon Louise）のことか。

とうま はるこ
当間 春子 (旧姓大城 大正14年生まれ 知念・具志堅)

〈ヤンバル避難〉

日本兵にガマを追い出される

私は知念村シマグラー (現 南城市知念具志堅) から那覇へ嫁いだ。その後、沖縄戦が近づくと夫が兵隊として軍に召集されたため、生まれたばかりの息子連れて実家へ戻った。実家では住宅の後方に壕が掘られていて、避難訓練でその壕を使用した。

アメリカ軍による艦砲射撃が激しくなると、私たち家族18人 (祖母、両親、妹2人、弟、私、息子) は、隣近所の住民と一緒にウージヌガマ (具志堅ウージ洞穴遺跡)² に避難した。生まれて数ヶ月の息子が泣くと、声が漏れないように口をふさいだ。泣き声が外に漏れるのではないかと、戦々恐々の毎日だった。

しばらくして、ガマに日本兵が来て、「避難民たちは出て行きなさい」と言われ、追い出された。私たちはやむなく上原 (ウージヌガマがあった場所) から手登根 (現 南城市) に下りて、そのままヤンバル (沖縄本島北部) へと歩いて行った。

破壊されていた石川橋

私たち家族は、艦砲射撃を避けるために昼は木陰に隠れ、夜になってから歩いて移動した。夜間も照明弾を避けながらの移動だった。父はオーダー (もっこ) で荷物を担ぎ、私と妹は頭に鍋や着物、食べ物などを載せて運んだ。

道中では、与那原国民学校 (現在の与那原小学校の前身) の辺りが燃えているのを見た。中城村を過ぎた辺りでは、空襲を避けるためにこんもりとした森に一時避難したが、あとからそこがお墓だと分かってびっくりした。また、石川橋 (現 うるま市) はアメリカ軍の進攻を阻むために日本軍により破壊されていたので、私たちは浅瀬を渡って移動した。

私たちは、(知念村民の疎開先に指定されていた) 金武村屋嘉 (現 金武町) にたどり着いた。そこには大勢の避難民が集まっていた。そこで、知念村の隣の集落に住んでいた親子が、空襲に遭って犠牲になったことを聞いた。

弟との別れ

私たちはヤマモモやクービ (ツルグミ) の実を口にして飢えをしのぎながら、その後、久志村 (現 名護市) の辺野古へ移動し、さらに山の中まで入っていった。その道中では、弟と会うことができた。弟は防衛隊に召集されていたが、家族の行方を尋ねて追いかけて来ていた。しかし喜びもつかの間、山狩りをするアメリカ兵に見つかったら若い男性は殺されるかもしれない、しばらく身を隠していたほうがいいということで、彼は家族と離れて行動することになった。結局、彼は帰らぬ人

¹ 当間さんのきょうだいである新垣美佐子、知花幸栄の証言は本紙に掲載されている。

² 具志堅集落の北方に位置し、琉球石灰岩の崖下にある壕。

となっていました。

家族写真を見せてくれたアメリカ兵

私たち一家は久志村の山中で捕虜となり、しばらくの間民家で生活した。放置された畑から芋を掘り、食べられそうな草などをとって食料にしていた。このころは、銃を持ったアメリカ兵が時々まわってきていたので怖かった。

ある日、栄養不良になっていた息子を抱いていたときに、1人のアメリカ兵が私のすぐそばまで来て自分の軍服のポケットから写真を取り出して見せた。おそろおそろ写真をのぞいて見ると、それは妻子と一緒に写った家族写真だった。「私も国にかわいい妻子を残して来ています」と伝えようとしているかのようであった。彼は、恐怖におびえる私を安心させようとしたのだろう。私は彼のその優しい気持ち感じて、胸をなでおろしたことを今でも思い出す。

平和を祈り続ける

私たちは昭和20年（1945）の10月ごろに故郷へ帰ったと思う。家は焼かれていた。弟を失っただけでなく、夫も戦死して帰らぬ人となった。

それらの悲しみを背負い、「善人を悪人にさせ、人間同士で殺し合いをさせる忌まわしい戦争だけは、どんな理由があろうとも二度と起こしてはならない」と誓い、毎日を過ごしている。今年も、人が混むのを避けて、慰霊祭³の前日に夫と弟の霊が祀られた礎に行き、重箱とお酒、水をお供えして「安らかに眠り下さい」と手を合わせてきた。

（2016年 知花幸栄による聞き取り 構成：山内優希）

³糸満市摩文仁で行われる沖縄全戦没者追悼式のこと。

タタンシチーに避難

〔昭和19年(1944)の夏ごろから、知念村では第32軍の部隊の駐屯や陣地構築が始まった¹。〕志喜屋の公民館にも球部隊の兵隊が何人か駐屯していた。その中にナカヤマ軍曹という分隊長がいて、私は彼に非常に可愛がられた。私は当時から物おじしない性格で、ほかの子どもたちが怖がっていても、自分は平気で兵隊にすり寄っていき、肩車などをしてもらっていた。

志喜屋にはタタンシチー²、ヤドーヤー³、エーグチガマなどの自然壕があった。(沖縄戦が始まったころ)バンバンバンバンという銃声と、コロコロという葉莖が地面に落ちる音が聞こえるようになった。私たち家族はタタンシチーに避難した。志喜屋の住民はタタンシチーとヤドーヤーに分かれて避難していた。タタンシチーは小さな壕で、10世帯ぐらいが避難していたと思う。

タタンシチーが煙に包まれる

タタンシチーに避難してしばらく経ったある日、アメリカ軍がタタンシチーに何かを入れて、壕内に煙が立ち込めた。あれは催涙弾だったのではないかと思う。息ができなくなり、オホオホと咳をして壕の外に出た。すると葉莖が落下しコロコロという音がした。初めはそれが友軍(味方の軍隊のこと)のものだと思っていた。

あるおじいさんが、「自分は生きてって長くはないから、出て行く」と言って上の方に登って行った。その後、彼が走って戻ってきて、「エー、これヒージャーミー(アメリカ兵のこと)たちだよ」と言った。そのため、ここは危ないということになり、その夜にタタンシチーを出ることになった。

タタンシチーの上から機銃射撃

(私たちがタタンシチーから出た後)私のいとこのフミが(移動先を探して)マジク(志喜屋集落南部にある岩山)に様子を見に行っていたが、あわてて帰ってきた。どうしたのか聞くと、そこで何人かが死んでいたという。そのため私たちはマジクには行かず、カンチャの向かいにあった小さな壕⁴に移動することにした。

夜間に農道を通って移動した。私たちの後ろには、どこの人かわからないが数人の避難民がいた。そのうちの1人の女性は、鉄兜代わりに羽釜をかぶっていたが、石ころにつまずいて転んだ。その

¹『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』(南城市教育委員会 2021〔第2版〕)533～534頁参照。

²知念村史編集委員会編『知念村史 第三巻 戦争体験記』(知念村役場 1994)によると、畳を敷いたような平滑な石が入口にあると表記がされているが、タタンシチーという名称の由来については明確に記されていない。なお、仲里さんは、内部の上の方に畳を敷けるような平べったい場所があるので、タタンシチーは「畳敷き」という意味であると述べている。だが2024年現在、事務局はこのことを裏付ける文献資料やほかの証言を見つけていない。

³前掲『知念村史 第三巻 戦争体験記』では「ヤローヤー」と表記されている。「ヤローヤー」と呼ぶ人々はあるが、仲里さんは「ヤローヤーではなくヤドーヤーだ」と話しているため、ここではヤドーヤーと表記している。

⁴志喜屋集落内にある「カンチャ大川」の南の岩かげに掘った細長い壕のこと。

とき、羽釜が落ちてコロコロという、ちょっとした音が出た。

すると、タタンシチーの上からアメリカ軍が、盲滅法に機銃射撃をしてきた。羽釜を落とした音はちょっとした物音だったのに、アメリカ軍はそれを捉えてバンバンと撃ってきたので、すごいなと思った。私が戦争で1番怖い思いをしたのはこのときだった。

戦争というのは人間の神経を麻痺させる。怖いものを怖いと思わなくなる。汚いものを汚いと思わなくなる。知念岬には日本軍の陣地があったため、アメリカ軍の小型砲艦はその近くまで来て、毎日のようにボンボンとそこを砲撃していた。私は（それに慣れてしまい）艦砲射撃を怖いと思わなくなった。また、人が死んで腐れていようが、汚いとも何とも思わなくなった。（戦争は）それだけ人間の神経を麻痺させる。

ヤドーヤーに避難

私たちはカンチャの向かいの壕に到着した。そこには人がいた形跡が残っていた。しかし、この壕は雨漏りをしていたので、私たちはヤドーヤーに移動することにした。

ヤドーヤーの入口には、いつの時代のものかわからない人骨が集められていた。風葬された人の骨だったのかもしれない。

ヤドーヤーの入口は海に向かって開いており、入口にはやわらかい泥の沼地があった。そこに艦砲の弾が2発落ちてきたが、沼地に突き刺さっただけで爆発しなかった。もし爆発していたら私たちはヤドーヤーに閉じ込められてしまっただろうから、非常に運が良かった。

ヤドーヤーにいたとき、日本兵が何人か来て「ここは軍が使うから出て行け」と私たちに言ったことがあった。しかし、あるお年寄りが「どうせ死ぬんだったら、シマウティシヌ（自分の集落で死ぬ）」と言って頑として拒んだため、兵隊たちはあきらめて出て行った。もしこのときに日本兵に追い出されて南部に行っていたら、どうなっていたかわからない。

「戦争中ほどたくさん肉を食べたことはない」

志喜屋の人々は、貧しい家庭でも正月用に食べるための豚を養っていたし、山羊も飼っていた。沖縄戦のとき、アメリカ軍は夕方になると攻撃を止めていたので、私たちはその間に豚や山羊などをつぶして食べていた。当時、野菜はほとんどなかった。

また、日本軍の馬だったのかどうかはわからないが、どこからか来た馬が数頭、志喜屋の田んぼの稲を食べに集まっていた。その馬たちがアメリカ軍の機銃掃射で殺されたので、私たちはその肉も取りに行って食べた。だから私は、戦争中ほどたくさん肉を食べたことはない。肉には不自由しなかった。

ヤドーヤーを出る

（ヤドーヤーにいた志喜屋の人たちは）安全な場所（ヤドーヤー）にいたし、「（アメリカ軍に捕まると）男は殺される、女は強姦される」という噂も聞いていたため、（他の壕にいた人たちよりも）長い間、壕を出なかった。しかし、他の壕から出ていった人たちが「（壕を）出てみたらアメリカ

さんはそういうことはしない。物資を支給してくれるし、もう安心だ」と言ったり、マイクで「大丈夫だから出てきなさい。(アメリカ軍は怖いことは) 何もしない」と呼びかけたりしていたので、私たちはヤドーヤーを出た。ヤドーヤーには7月近くまでいたと思う。

[昭和20年(1945)6月上旬、アメリカ軍は志喜屋で避難民を収容し始める⁵。] わが家に行くと、すでに別の集落から来た避難民が入っていて、私たちが入る余裕はなかった。「ここは私たちの屋敷だから出て行け」と言うこともできなかったのもので、私たちはウシナー(闘牛場)のところにあった〈ナカジョー〉で長い間暮らすことになった。

アメリカ軍占領後の志喜屋

アメリカ軍に占領された志喜屋には学校もできていた[志喜屋初等学校が開校し、昭和20年(1945)7月24日に授業を開始⁶]。しかし校舎はなく、夏場は暑かったので、木陰で勉強した。

わが家の近所に住んでいた女性は、せっかく戦争を生き延びたというのに、玉城村(現南城市)前川まで日本軍の物資を取りに行った際、そこに潜んでいた日本兵に殺されてしまった。そこには、日本兵が置いて行った物資がいろいろ残っているという噂があった。

当時の志喜屋の海岸沿いにはアダンが植えられていたが、その後ろ側は避難民の墓地のようになっていた。亡くなった避難民は、そこにみんな埋められていた。

鹿児島の方から日本軍の特攻機が飛んで来たこともあった。特攻機は2,3機の編成で来ていたが、海にずらーっと連なったアメリカ軍の艦船からの集中砲火を受けて撃ち落とされていた。何機かは志喜屋の方に落ちていた。

アメリカ兵は子どもたちにはものすごく優しくかった。彼らは火炎放射器を持って壕を回っていたが、私はその後ろを一緒について行っていた。

豊富だったアメリカ軍の物資

アメリカ軍の物資は豊富だった。アメリカ軍の駐屯地に行って物資を盗ってくることを戦果アギー(戦果あげ)と呼んでいた。現在の刑務所⁷のあたりはアメリカ軍の駐屯地だったので、その辺りから戦果アギーをしてくる人たちがいた。私はまだ子どもだったのでしなかったが、いとこのフミがよく物資を盗ってきて、私にくれていた。

当時、赤帽と呼ばれていた沖縄人の警察(CP)が戦果アギーをする人を待ち伏せし、「コラコラ」と言って取り締まっていた。見つかった人は盗ってきた物資を捨てて逃げたが、赤帽が彼らを捕まえることはなかった。赤帽は、捨てられた物資を持ち帰っていた。

親慶原方面(現南城市)には、アメリカ軍の大きなチリ捨て場(ごみ捨て場)があり、アメリカ軍は、そこに大きなトラックでゴミをバーッと落とすしていた。チリ捨て場は宝庫で、食べ物やいろんなものが捨てられていた。

⁵ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』641～642頁参照。

⁶ 前掲『南城市の沖縄戦 資料編』690～691頁参照。

⁷ 南城市知念具志堅にある沖縄刑務所。

私が最初に覚えた英語は「ギブミー シガレット (たばこを下さい)」だった。私の祖母がたばこを吸う人だったので、祖母に「アメリカ軍からたばこをもらってきなさい」と言われていた。当時アメリカ軍がくれたチョコレートは苦くて私の口には合わず、「こんなまずいものがあるか」と思っていた。

浜には、アメリカ軍が捨てた期限切れの牛肉やオレンジ、りんごなどの食材がたくさん流れ着いていた。夕方になると、私たちは浜に行ってそれらを取りに行った。

あるとき、私が海で泳いでいると、アメリカ軍の上陸用舟艇^{じょうりくようしゅうてい}が、タマター (タマタ島⁸) とアドゥチ (アドチ島⁹) の間のアドゥチ寄りに来た。舟艇に乗っていたアメリカ兵が、泳いでいた私たちを呼んだので、2、3人で行くと裸の男性の遺体を渡された。アメリカ兵がその遺体をどこで拾ってきたのか、また遺体の男性がどこの人かはわからなかった。

また、志喜屋の護岸^{こがん}には3人ずつ、計6人の日本兵らしき遺体が流れ着いて来ていた。彼らの頭はみんな、きれいに割れていた。

戦後の歩み

戦後、私は具志堅^{ぐしけん}初等学校^{しゅとうがっこう}¹⁰、知念中学校を卒業したのち、知念高校に通った。入学当時の知念高校は親慶原にあった。しかし、校舎には水道がなかった。そのため、周辺にあったカー (湧泉、井戸) から朝に水を汲んでくるのが1年生の仕事だった。大きなドラム缶が3つあり、それが満杯になるまで運ばなければならなかった。

私が高校2年生のころ、学校が与那原町に移った。校舎を建築する大工が1人しかいなかったため、生徒も建築作業にかり出された。そのため、移転前の1学期、2学期は勉強ができなかった。

高校卒業後、私は裁判所に就職し、60歳の定年まで42年間勤め上げた。

(2015年 知花幸栄・永吉盛信と事務局による聞き取り 構成：山内優希)

⁸ 南城市知念にある志喜屋漁港から沖合いに位置する岩礁。近くにアドチ島がある。

⁹ 南城市知念にある志喜屋漁港から沖合いに位置する無人島。近くにタマタ島がある。

¹⁰ 1946年に授業を開始。具志堅、志喜屋、山里の子どもたちが通った。1952年、具志堅小学校に改称。同年、知念小学校に統合され、具志堅小学校は1、2年生が通う分校となり、1954年に知念小学校へ完全移行となった。前掲『南城市の沖縄戦 資料編』第7章第3節 参照。

〈知念村・佐敷村内へ避難〉

自宅が中城湾臨時要塞部隊の宿舎になる

[1941 年、中城湾臨時要塞が現在の与那原（現 与那原町）に建設され、中城湾臨時要塞部隊が駐屯するようになった。翌年 9 月の編成改正で、同部隊の重砲兵連隊第 2 中隊が、伊計島（現 うるま市）から知念半島（当時の村民の証言を総合すると、知念村知名・安座真・久手堅一帯だと思われる）へ移駐することになった。移駐時期は不明。また、いつごろかはわからないが、第 2 中隊は知念村民に「吉岡隊」と呼ばれるようになった¹。]

第 2 中隊の浜田少尉が率いる第 1 小隊は、知念岬（ウフグシク原²）に大砲陣地を 2 基構築した³。二木少尉が率いる第 2 小隊は、知名の須久名原（ワイトウイ。岩の切り通しの道）に大砲 1 門と、野戦砲 1 門の陣地、知名グスク（クビリ。坂になった小道のこと）に防空壕を構築した⁴。また、知名海岸には銃口が数カ所あった。

中隊長と 3 人の下士官（石原軍曹ほか 2 人）は個人の家を、ほかの一般兵は知名区事務所を宿舎にしていた。私の家にも、当時の区長だった神谷五福さんと、二木少尉と 2 人の部下が宿借りの相談に訪れ、二木少尉に 12 畳の床の間と廊下、勉強室を無償で貸すことになった。かれらの食事は、当番兵が区事務所の一般兵隊舎の炊事場から運んでいた。朝夕の清掃も当番兵が行っていた。風呂は区事務所の隊舎に設置されていた。夜中に時々、女性の声が聞こえたが、その声が「慰安婦」だったのかどうかはわからない。

毎朝、陸軍の准尉が率いる 12 人ほどの兵隊が、二木少尉が泊っていた私の家の前を通り、門前で「歩調を取れ」という声で行進し、陣地壕掘りに出かけていた。

沖縄戦前の生活

私が昭和 18 年（1943）に知念国民学校（現在の知念小学校の前身）に入学して間もなく、担任の先生が徴兵された。その後、校舎の一部が日本軍の兵舎として使用されることになった。そのため、生徒は各字の事務所を転々と移動して、授業を受けることになった。また、陣地構築に民間人が動員されるようになった。

昭和 19 年（1944）の十・十空襲のあとからは、避難壕を掘るよう指示が出され、親戚や隣近所の人同士で壕掘りを始めた。このように、アメリカ軍が沖縄に上陸する前から、知念村（現 南城市）でも戦争の準備が着々と進められていた。

¹「南城市の沖縄戦 資料編」専門委員会編「南城市の沖縄戦 資料編」（南城市教育委員会 2021〔第 2 版〕）530～531 頁参照。

²ウフグスク一帯のことだと思われる。

³知念村史編集委員会編『知念村史 第三巻 戦争体験記』（知念村役場 1994）39 頁では、浜田少尉は第 2 小隊長で、「サイハの下」（同書同頁に出てくる「知念岬サイハ嶽の東斜面」のことか）の陣地について、とされている。

⁴前掲『知念村史』39 頁では、二木少尉は第 1 小隊長で、「知名のワイトウイ」の陣地について、とされている。

避難生活

昭和20年(1945)3月末にアメリカ軍の艦砲射撃が開始されると、私たち家族は、家財道具を適当な場所へ埋め、食料や衣類などを可能な限り持って、知名に造っていた自分たちの壕に避難した。当時のわが家は、明治33年(1900)生まれの祖父母と母親、兄弟2人の計5人家族だった。

そのころから、住宅地はアメリカ軍の飛行機からまかれたガソリンと焼夷弾で焼き払われた。知名の須久名原の大砲陣地への道路には日本軍が地雷を敷設していた。そのため、逃げまどう馬や牛などが地雷を踏んで爆発させていた。それらの死んだ家畜を食肉にしようと取りに行き、銃撃されて亡くなった人もいた。また夜間に、壕から家に宿泊しに行き、焼死した家族もいた。

ワイトゥイの大砲陣地から2,3発発砲すると、間もなく空爆とすさまじい艦砲射撃が1日中続いた。大砲陣地やスクナ森頂上の高射砲陣地、知名グスク海岸の特攻艇陣地がことごとく爆破され、兵隊は各陣地を撤去するはめに追い込まれた。住民も迫ってくる艦砲射撃に、自分たちの壕では危ないという思いから、山を越えて佐敷方面へと避難を始めた。

私たち家族は、現在ゴルフ場になっているところ(守礼カントリークラブ⁵)の道路を歩いて、佐敷村(現南城市)伊原のウティンダ壕に避難した。何日かして、知名へ戻ろうと伊原の壕を出て歩いていた。その途中、スクガー屋取(現在の南城市知念字知念にあった。現在は廃村)のところで来たときに、アメリカ兵の姿が見えた。そのため方向を変え、久原集落方面へ逃げて、その壕で生活した。

収容所生活

それから約一週間後に知名に戻ると、「アメリカ軍は何もしない、早く出て来い」と日本語で呼び掛けられた。投降をうながすビラも配られ、着の身着のまま捕虜となった。それまで見たことなかった、青い目と赤い髪をしたアメリカ兵にびっくりした。

それから私たちは、佐敷村屋比久のテント張りの収容所に収容された。数日後に知名へと移って、戦火を免れた瓦葺きの家に数世帯ずつ入居して過ごした。

そこでの生活もつかの間、今度はヤンバル(沖縄本島北部)への立ち退き命令が出された。軍用トラックに乗せられて佐敷村新里の仮収容所で1泊し、翌日に歩いて馬天の港へ行った。そこから上陸用舟艇に乗せられて、久志集落(現名護市)で降ろされた。

私たち知名と安座真の人々は、主に嘉陽、安部(ともに現在の名護市)にGMC(米軍のトラック)で運ばれて収容所生活を始めた。そこにいたおよそ7,8ヵ月の間にマラリアが流行し、お年寄りや体の弱い人の中から、ほとんど毎日、高熱で亡くなる者が出た。棺箱などもなかったため、遺体は毛布に包んで近くの埋葬場で埋めるという残酷なものだった。

村に帰る

昭和21年(1946)2月に村へ帰れることになり、トラックで運ばれて安座真で降ろされた。

⁵ 現南城市知念知名にあるゴルフ場。

知名と安座真の境の大川（ウフガーラ）が境界線で、知名側が立ち入り禁止になっていた。知名から海野、久原、さらに佐敷村仲伊保までの土地が、飛行場を思わせるほどに平坦にならされていた。安座真に来た一週間後に旧正月を迎えた。

知念村に帰ってから、私は知念初等学校に通った。教室は初めテント張りのものだったが、のちにコンセット校舎に変わった。その校舎は、窓もない馬小屋のような教室で、生徒はガリ版刷りの教科書を使って勉強した。

日本兵に殺された知念村の人々

戦時中、知名の壕で日本兵による住民の虐殺があった。吉岡隊が知名城原（クビリ）に構築した壕から兵隊が撤収したあと、そこに知名出身の男性3人（1人は村の収入役、2人は字の幹部）が入って区民や家屋などの見守りのために滞在していた。

そこに逃亡兵が現れて「壕を出て行け」と言ったため、村収入役の男性が「民間人も戦場で戦っている中で逃げてくるとは何事か」と言ったところ、逃亡兵は「お前らはスパイだろう」と言うなり彼を銃殺した。残った2人は横穴から逃げて命拾いしたという。

射殺された男性の母親は当時90歳近く、村内でもまれな高齢者だった。ほかの家族がヤンバルへ疎開したあと、男性は高齢の母親を近くの岩穴に避難させて、毎日食事を届けていた。男性が亡くなったあと、私たちが知名の壕にいる間は、母親のいここにあたる私の祖母が代わりに食事を運んでいた。母親は、「息子が来なくなっているが元気か」と気にしていたという。私たちが伊原の壕に移動してからは食事を届けることができなくなった。その後、彼女は餓死してしまったのではないか。

男性を埋葬した場所は、のちにアメリカ軍が道路拡張のためブルドーザーで敷きならしてしまった。散乱した遺骨を、私たちが拾ってお墓に納めた。

「戦争は命の尊厳を喪失させる」

戦時中、私は幼かったが、当時の様々なことがはっきり記憶に残っている。自分の家に吉岡隊の小隊長が宿泊していたし、村婦人会の顧問だった母が国防婦人会（1942年に大日本婦人会となる）の活動で、陣地構築や兵舎などに行く際に一緒について行っていたからである。

戦争は人類を滅亡させるばかりでなく、地球の自然や文化を破壊・滅失させ、残るものにとっても何一つして益ない。戦争は愚かであり、命の尊厳を喪失させる。いかなることがあっても起こしてはならない。

（2018年 知花幸栄による聞き取り 構成：山内優希）

親戚一同で宮崎県に疎開

戦時中の私の家族は、父方の曾祖父母と祖父母（セイスケとカメ）、両親（盛忠と節子）、2歳上の兄（盛賢）、妹2人（ヨリコとカヨコ）、私の10人だった。父は日本兵として従軍していたため不在だったが、どこに派遣されていたのかはわからない。

私が国民学校1年生だった昭和19年（1944）、「沖縄が危ないから本土に逃げなさい」という指示があり、曾祖父母以外の家族で疎開することになった。曾祖父母は、いろいろな情報を得ていたようで、「ここ（沖縄）は全滅するから、家族みんなで疎開しなさい」と勧めてくれた。ありがたいアドバイスだった。

祖父と母、下の妹（カヨコ）は、先にほかの人々と一緒に大阪に疎開した。その後、祖母と兄、上の妹（ヨリコ）、私の4人は、祖父のきょうだいとその家族とともに、知念村（現南城市）から疎開する人々と一緒に宮崎県へ疎開した。大阪にいた祖父、母、カヨコとは、宮崎県で合流した。私たち家族と祖父のきょうだいの家族を合わせると、総勢約20人の大所帯だった。

疎開にどのような荷物を持っていったのか、那覇の港までどうやって行ったのかは、当時幼かったこともあり覚えていない。那覇で人力車に乗ったことは記憶に残っている。

疎開先の京町温泉

疎開船は鹿児島に着き、私たちはそこから疎開先（宮崎県西諸県郡真幸村大字向江。現宮崎県えびの市向江）へ移動した。初めの一時期は、名前は覚えていないがどこかのお寺に宿泊したと思う。地元の人たちからの歓迎会のようなものはなく、よそものが来た、という感じだった。

その後、私たちは京町温泉¹の、カイジョーさんという現地の大地主の2階建ての屋敷に移った。おそらく親戚一同で同じ屋敷に移ったのではないかと思う。私たち家族は2階に住んだ。屋敷のそばには温泉があったが、それもカイジョーさんが所有していたと思う。

カイジョーさんは年配の男性で、私たちはカイジョータンメー（カイジョーおじいさん）と呼んでいた。カイジョーはおそらく名前だったと思う。姓は覚えていない。私はまだ子どもで遊びたい盛りだったので、カイジョーさんによく叱られた。

京町温泉には、傷や病気を治すために温泉に入りに来る人が多くいた。（傷痍軍人などの）日本兵は見たことがない。また、私たち家族のほかにも、知念村からの疎開者が何人かいた。

疎開中に空襲警報が何度かあった。そのときには山奥の、自然にできた岩と岩の間のくぼみのようなところに避難した。空襲で弾が落とされたという話を聞いたことはあるが、私たちが住んでいた地域が被害を受けたことはなかった。日々が平穏すぎて、（今振り返っても）本当に戦争中だった

¹ 疎開先の向江に現在もある温泉街。

たのかな、と思うくらいだった。

母や祖母たちが農家の手伝い

若い男性はみんな兵隊にとられていたため、疎開者の中には女性や年配の人が多かった。そのため、疎開地では女性の労働力に頼ることが多かった。母や祖母、疎開した女性たちも働いていた。かれらは、日雇いで現地の農家の手伝いに行き、家族を食べさせてくれた。

麦飯をよく食べたこと、それが美味しかったことを覚えている。彼女たちは働き者だったので、現地の農家からよく手伝いを頼まれていた。私は家族で疎開していたおかげで、極度にひもじい思いをすることはなかった。

しかし、学童疎開の子どもたちが、(ひもじさのために)食べ残しや道にポイ捨てされた食べ物を拾って食べているのを見たことがある。また、学童疎開の子どもたちが隊列を組んで歩いていたのを見たことがある²。かれらがなぜ京町温泉に立ち寄っていたのかはわからない。

疎開先での学校生活

私はカイジョーさんの屋敷から学校に通った。学校は屋敷から近かったように思う。田植えのときには、学校の生徒たちも手伝いをした。

学校の近くには大きな川(川内川)があった。川が1,2度ほど氾濫し、学校も浸水したことがあった。

担任はオオハラトシコ先生で、私のことをかわいがってくれた。沖縄の人を見ると遠くからでも殴りにくるような子もいたが、仲良く遊んでくれる子たちもいた。彼らとはコマで遊んだり、竹をよじ登ったり下りたりしてよく遊んだ。当時の同級生とは戦後も年賀状のやり取りをしたり、会いに行ったりして、交流を続けた。

沖縄に引揚げ

疎開中、一緒に疎開した親戚のうちの一人が病気で亡くなった。残った者はみんな、戦争が終わると沖縄に戻った。鹿児島から船に乗って帰った覚えがある。

船は久場崎(現 中城村)に着き、そこでDDTをかけられた。久場崎からはGMC(アメリカ軍のトラック)に乗って知念村に帰った。

知念村に帰ると、家は焼けずに残っていた。沖縄戦中、家の近くの山に逃げていた曾祖父母も、無事に戦争を生き延びていた。父も戦地から無事に復員した。

(2018年 事務局による聞き取り 構成：山内優希)

² 読谷村史編集委員会編『読谷村史第五巻資料編4 戦時記録上巻』(読谷村役場 2004 499頁)によると、加久藤村(現 宮崎県えびの市)に疎開していた読谷山村(現 読谷村)の古堅国民学校の疎開学童たちが、真冬に京町温泉まで温泉に入りに行ったことが時々あったという。彼ら以外にも京町温泉に来ていた疎開学童がいたのかは定かではないが、永吉さんが話すように、京町温泉に疎開学童が来ていたのは確かだったといえる。

ひが 比嘉 勇仁 (大正6年生まれ 知念・久手堅)

〈ヤンバル疎開、あるいはヤンバル避難¹⁾〉

日本軍の駐屯と陣地構築

アメリカ軍が沖縄上陸する1年ほど前から、集落のあちこちに日本軍が常駐するようになり、学校(知念国民学校)も軍に占拠された。

日本軍が来てから、集落内では壕掘りが始まった。初めはタコツボ壕のようなものを掘っていたが、これでは艦砲射撃を防御できないということで、避難壕造りに切り替えられた。現在の吉富(現南城市)の上の自衛隊基地の近くにも、大砲の台座が構築された。

ヤンバルへ移動

十・十空襲以降、地方にもアメリカ軍による爆撃が行われるようになっていった。爆撃が次第に激しさを増してきたので、ヤンバル(沖縄本島北部)へ避難するよう命令が出された。

私が両親と共にヤンバルへ移動したとき、字知念のある一家も一緒だった。彼らは馬に荷物を積んで移動していた。現在のハートライフ病院(現中城村伊集)の前まで来たところで、その一家の男性が突然思い出したように、「日本兵に売った薪の代金を取って来なくては」と言って引き返して行った。彼は、のちに日本軍に殺されたと聞いた²⁾。

私たちは、昼はアメリカ軍に見つからないように隠れ、夜に歩いて安田(現国頭村)や有銘(現東村)などを目指して避難した。避難中には、のちに糸満町長になった伊敷(喜蔵)さんや、立法院議員になった伊芸さん、國場さんたちにばったり会った。彼らとは、教員時代に面識があった。

現在の福地ダム一帯(現東村)が避難場所となっていた。しかし、アメリカ軍により空から爆弾が落とされて犠牲者が出た。知念村(現南城市)山里のある一家も、子どもを残して犠牲になった。

また、あるときは、アメリカ兵の「ハーバー、ハーバー」という声が聞こえて、大きな川に飛び込んで逃げて命拾いをした。

しばらく日が経つと、アメリカ軍は名護に移って野球をしていた。このころは、まだ南部で戦闘が続いていたと思う。

知念村からヤンバルへ避難したのは、具志堅と字知念、久手堅の人々だった。志喜屋や吉富、安座真、知名の人々は、多くが自然壕か自分たちで掘った壕に隠れて難を逃れていた。

知念村に戻って学校建設

ヤンバルから知念村へ帰ると、家は焼かれて跡形もなかった。よそから来ていた避難民とともに、

¹⁾ 本書では、アメリカ軍による沖縄への大規模な空襲が始まった昭和20年(1945)3月23日以前に、役場等の指示にしたがって人々が集団でヤンバルの割り当て地へ移動した経験をヤンバル疎開と称している。一方、3月23日の空襲開始以降に人々がヤンバルへ避難した経験を、ヤンバル避難と称している。比嘉さんの語りからは、比嘉さん一家がヤンバルへ移動を開始したのが3月23日以前なのか、あるいはそれより後なのか判断できなかったため、比嘉さんの経験を「ヤンバル疎開、あるいはヤンバル避難」とした。

²⁾ 『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』(南城市教育委員会 2021〔第2版〕)541頁参照。

飢えを凌いででの生活が始まった。

私は、(当時の知念半島の) 中心地だった玉城村(現 南城市) 百名³ や親慶原⁴ 方面からアメリカ軍のトタンをもらって来て、学校の校舎建設に取りかかった。私が初めに建設した学校は久手堅校(久手堅初等学校) だった⁵。私はしばらく学校に戻らず、班長^{はんちやう}として働き、アメリカ軍との交渉役^{こうしやうやく}を務めた。佐敷村^{つと}や大里村^{さしきそん おおざとそん}(どちらも現 南城市) からも、アメリカ軍のトタンを許可なく取りに来る人たちがいたので、けんかになったことも度々あった。

(2017年 知花幸栄・永吉盛信・幸喜徳雄による聞き取り 構成：山内優希)

³ 1945年6月に開設された百名の民間人収容所には、警察署や病院、孤児院、養老院、捕虜収容所などの公共施設が整備されていた。

⁴ 1946～49年には、親慶原に隣接する佐敷村新里(現 南城市)に沖縄民政府が設置され、政治の中心地となった。また、同じく1946～49年には、現在の琉球ゴルフ倶楽部内(旧玉城村玉城一区・仲村渠二区一帯。この地域も親慶原に隣接する)に琉球列島米軍政府が設置されていた。

⁵ 『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会編『南城市の沖縄戦 資料編』(南城市教育委員会 2020)所収の『知念市誌』によると、1946年1月8日より久手堅校の建設が開始され、アーチ型の校舎3棟が出来上がったという(前掲『南城市の沖縄戦 資料編』674頁)。

楽しかった幼稚園の閉園

私の家族は祖母（数え80歳近く）、両親、子ども6人（私より10歳上の長男、8歳上の長女、6歳上の次男、3歳上の三男、四男の私、2歳下の次女）の合計9人で、私は5番目の子どもである。沖縄戦が始まった昭和20年（1945）当時、私は6歳だった。その年の4月、私は知念国民学校1年生として入学する予定だった。

沖縄戦前の昭和19年（1944）、安座真区事務所（今の字公民館。戦前はムラヤーとも呼ばれていた）の幼稚園¹で習った唱歌が、今でも忘れられない思い出の1つである。「ぼくは軍人大好きだ 今に大きくなったなら 軍刀さげて剣さして お馬に乗ってはいドードー²」という歌詞だった。

楽しい幼稚園生活だったが、区事務所は日本兵の宿舎にすることになり、幼稚園はわずか1カ月半ほどで閉園³となった。その後、日本兵の数が多くなり、宿舎として使われる民家もあった。上空には、毎日のようにアメリカ軍のB-29⁴の偵察機が飛んでいて、戦争が近づいて来るのを感じるようになった。

家族で防空壕掘り

沖縄が戦場になるということで、我が家でも私と長兄の2人で防空壕^{ぼうくうこう}を掘った⁵。掘った場所は、現在の安座真にある慰霊塔の上の平地である⁶。掘ったのはフィンチャーゴーというもので、平坦地に溝のような穴を掘り、その上に木材や板などを置き、さらにその上に土などをかぶせたものである。ところが、十・十空襲で那覇の民間のフィンチャーゴーがほとんどやられたという噂を聞き、別の壕を掘ることになった。

そこで、ワンヂン（安座真集落南西の丘陵上）近くの崖^{がけ}の麓^{ふもと}のナカンザと呼ばれる場所に壕を掘った。そこに位牌^{いはい}や家具などを持ち込んで避難の準備をした。そこから20メートルほど離れたところでは、別の家族も壕を掘っていた⁷。

屋比久に避難

アメリカ軍が沖縄に来て、艦砲射撃^{かんぱうしゃげき}や飛行機からのガソリン投下^{ひこうき}が行われ、集落の瓦葺き^{とうか}の家や^{からぶ}

¹ 屋比久さんのお話によると「当時も幼稚園と言っていた。希望すれば4～5才（数え7歳）でも入園できた。人数は結構いたと思うが覚えているのは2人」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

² 明治37年（1904）に発表された軍歌「日本海軍」（作詞：大和田建樹、作曲：小山作之助）の替え歌。替え歌の作詞は水谷まさる。

³ 屋比久さんのお話によると「日本兵が空き家や大きな民家を使うようになったため、再び開園することはなかった」とのこと。屋比久さんはサーターヤー（製糖場）で遊んでいたという（2024年事務局聞き取り）。

⁴ ボーイング社が開発した4発重爆撃機。アメリカ軍の爆撃機を代表する機体の1つ。乗員区画が与圧されており、高高度飛行性能が高かったため、飛行高度によっては日本軍の高射砲（高角砲）の射程に入らず、また戦闘機による迎撃が困難であった。

⁵ 屋比久さんのお話によると「掘った時期は十・十空襲の後。当時、長兄は学校を卒業しており、次兄・三兄が学校に通っていた。長兄は足に神経痛を患っていたため防衛隊に動員されていなかった。また、陣地構築などの軍作業ではなく、鍛冶屋の手伝いをしていた」（2024年事務局聞き取り）。

⁶ 屋比久さんのお話によると「現在の安座真公民館近くの丘陵の麓にある、安久仁の塔の裏側にある農道あたりに掘った」（2024年事務局聞き取り）。

⁷ 屋比久さんのお話によると「安座真には自然壕がないため、各家庭で防空壕を掘っていた」（2024年事務局聞き取り）。

茅葺きの家が数軒焼かれた。私たち家族はナカンザの壕に避難した。この壕の真上には武部隊が新たに大きな壕を掘っていた。そのため、艦砲射撃に狙われたら危ないと心配していた。しばらくして、虫の知らせか、近くでギンバエが異常発生したということがわかった。それを知った母が「ここは危険だ」と言い、家族でその壕を出て、斎場御嶽の近くの岩陰に隠れた。このとき、父は義勇隊として日本軍の荷物運びに動員されていて留守だった。そのため、母はこの後どこに避難したらいいか判断できず、迷っていた。この岩陰から海を見ると、コマカ島や久高島の沖にアメリカ軍の艦船がずらっと並んでいて、ここも危ないと思った。

そのとき、日本軍の命令を受けた区長から「安座真の人達は佐敷村（現 南城市）屋比久に避難しなさい」と言われたので、私たちは屋比久に行くことになった。その日の夕方、ナカンザの壕に戻り、夕飯（芋）を食べた。その後、家族で手分けして衣類や食器、食糧などを持てるだけ持ち、屋比久に向かって夜道を歩いていった⁸。

屋比久までは、ワンデンからウティンダという道（群道）に入り、その道を通して移動した⁹。この道は大正時代に山腹を削って造った道で、所々で崖崩れが起きていた。そのため道が細くなっているところもあった。

移動中に1番困ったのは、戦争直前に日本軍が掘った戦車壕（戦車の進撃を妨害するために掘られた穴）だった。この壕は、道から1メートルほど掘り下げられており、通るためには下ったり上ったりしなければならなかった。しかし、一緒に避難していた祖母は日頃から杖なしで歩くことができなかった。そのため、戦車壕にさしかかるたびに、母や兄は荷物を置き、祖母を抱えて降ろしたり上げたりした。そういったことが3回ほどあった。

また、移動している途中で、赤青白の点滅する光が私たちの近くを横切った。私はそれが珍しく見ていたが、長兄に「これは曳光弾というものだ。当たると死ぬよ」と言われ、びっくりした。屋比久に着いたのは夜遅い時間だったと思う。このときに私たちの後を追いかけて来た父と合流することができた。

屋比久では〈トンチジョウ小〉というエーキンチュ（お金持ち）の家にお世話になった¹⁰。大きな瓦葺きの家だった。〈トンチジョウ小〉の家族は、おじいさん、母親、子ども3人の5人家族だった。

私たちは、昼は安全そうなところを探して隠れ、夜は〈トンチジョウ小〉の家に戻って泊まった。

現在の手登根公民館あたりには壕が掘られていたと思う。その壕には日本軍がいて、そこから砲弾を撃っていた。日本軍の高射砲は移動式だった。大きな荷車のようなものに載せていた。そして、撃った後は高射砲を動かして壕の中に入れて逃げ込んでいた。すると、アメリカ軍のトンボ（偵察機）が飛んできて上空を旋回した。しばらくするとトンボがいなくなり、アメリカ軍の艦砲射撃が飛んできていた。

〈トンチジョウ小〉の家には防空壕がなかったため、私たちはスクナ森の木が茂っていた場所（手

⁸ 屋比久さんのお話によると「このとき、ナカンザの壕に入れていた位牌も持って行った」（2024年事務局聞き取り）。

⁹ 屋比久さんのお話によると「現在の国道331号線（当時は県道）はあった。しかし、県道より群道の方が近道だった。」また、「ウティンダは、ウティンダヤードウイのことで、現在は墓だけがある」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

¹⁰ 屋比久さんのお話によると「事前に割り当て地が決まっており、誰々の家を訪ねなさいと指示されていた。受け入れる側も避難者が来ることを知っていた」とのこと（2024年聞き取り）。

登根の壕がすぐ見えた)に壕を掘って避難した。そこは見晴らしがよく、艦砲射撃などもよく見えた。この壕にしばらくいたが、馬天沖からの艦砲射撃が激しくなったので、〈トンチジョウ小〉の家族と別れて移動することになった。

知念村に戻る

そこで私たちは、知念村(現南城市)久手堅^{くでけん}の「カイゲンショウ」の近くの壕¹¹を目指した。壕は現在の知念屋外運動場の山手のところにあった。このあたりには日本軍の壕がたくさんあった。夜間の移動時には、三男兄(当時小学4年生ぐらい)が先頭になって、地雷^{じらい}のなさそうなところを選んで進んで行った¹²。

「カイゲンショウ」の壕は、日本軍が掘った壕だったが、兵隊が出て行ったあとだったため使われていなかった。このころは梅雨^{つゆ}の時期で、よく雨が降り、じめじめしていた。その壕で一週間か10日間ほど過ごした。

次に、私たちは斎場御嶽の近くのナガニクブー(地名)にある大きな壕¹³に移動した。この壕には弾薬が置かれていたが、日本軍の指示で義勇隊として徴兵された久手堅の人々により運び出されていた。壺川^{つぼがわ}(現那覇市)まで運ばれたという話もある。そこには10家族ほどの民間人が避難していた。梅雨時だったため壕内ではあちこちに水滴^{すいてき}が落ちて、じめじめしていた。人数が多くて壕内での煮炊き^{にた}ができなかったので、夜になると安座真まで下って煮炊きをしたが、それは危険を冒しての行動だった。

伊原・安座真での収容生活

ナガニクブーの壕は人の出入りが多かった。そのため、「日本は負けている」という情報も入ってきていた。そこで、残っていた米を全部食べてから捕虜^{ほりよ}になろうということになった。鍋がなかったので一斗缶を探してきて、近くの岩陰で米を炊いていた。そのとき、叔父^{おじ}が来て「みんな手を挙げて下りて行ったよ(アメリカ軍に収容されたよ)」と言った。それで私たちも安座真^{イチヤンマ}に行った¹⁴。

大雨の中、生活する道具だけを持ち、家族みんな歩いて板馬^{イチャンマ}に向かった。長兄が大鍋をモッコに入れて持ち、三男兄がムシロを持ち、父が妹をおんぶしていた。途中、安座真^{イチヤンマ}の殿(拜所)の広場にアメリカ兵らしき人々が、小さなテントを張っているのが見えた。雨の中、キャーキャーと騒

¹¹ 『知念村史 第三巻 戦争体験記』によると、海軍が知念村久手堅ワンデン原に兵舎を、久手堅上原に二基の高射砲陣地を建造したという(知念村史編集委員会編『知念村史 第三巻 戦争体験記』知念村役場 1994 37～38頁。同書ではこれらが陸軍の中城湾臨時要塞部隊の施設だとされているが、同部隊関係の資料にこれらの施設は出てこない。また2024年時点、南城市教育委員会文化課は、海軍の資料でこれらの施設に言及しているものを見つけていないため、これらの施設がどの部隊により建造されたものなのかは不明である)。また、屋比久さんのお話によると「昭和15年頃に日本海軍が造った高射砲陣地の跡地。この陣地は現在の知念屋外運動公園付近にあった。そこには高射砲2門を主に、それに付随する探照灯及び弾薬庫が設置されていた。また、管理兵舎と発電所は現在の久手堅ワンデン原団地にあった。しかし、高射砲等の主設備は沖縄戦前に小禄飛行場近くに移設された。鉄筋コンクリート造りの弾薬庫とタン屋根の兵舎は沖縄戦まであったので、その管理者がカイゲンショウと看板表示をしていたと思う。」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

¹² 屋比久さんのお話によると「地雷は3センチメートルほどの穴を掘り、その中に爆薬を詰める。その穴の大きさに合わせて草を被せていたのだが、その草は枯れていた。また、被せた草は周辺の草と違って。それらを気を付けて見ながら歩いていたが、大人より子どものほうが見つけやすかった」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

¹³ 屋比久さんのお話によると「この壕は角のように突き出している2つの岩の間にあった。あざまサンサンビーチから見える。この岩は漁師が海に出た際、位置確認の目印としていた」(2024年事務局聞き取り)。

¹⁴ 炊いていたお米について、屋比久さんによると「食べたかどうかの記憶がない。もしかしたら炊けるのを待たずに移動したかもしれない」とのこと(2024年事務局聞き取り)。

いでいるようだった。

現在の国道 331 号線（当時は県道）を進み、知名^{ちな}と板馬の間にあるクビリ（坂になった小道）のところで、2 世のアメリカ兵が立っていた。避難民を誘導しながら、「道の側を歩かず、車が通った跡を歩きなさい」と言っていた¹⁵。

私たちは板馬のヤードウイまで歩いた後、アメリカ軍のスリークォーター車（アメリカ軍の代表的なトラック）に乗せられた。そして佐敷村（現 南城市^{いばら}）伊原に連れて行かれた。伊原では焼け残った民家に入ることになり、同じ家に入れられたほかの数家族と一緒に暮らした。食べ物が少なく、父は安座真に芋掘りに行っていた。

伊原に 2 週間ほどいたのち、安座真に移った。安座真は焼け野原になっていたのち、掘^ほっ立^たて小屋^こを建てて住んだ。そこではサトウキビを搾^{しぼ}った汁^{じゅう}でアメ玉^{しる}を作って食べていた。安座真に来て親から知らされたが、私たちが最初に避難したナカンザの壕^{ぼくだん}の近くに爆弾^{ぼくだん}が落ち、私たちの壕は土で覆^{おお}いかぶさされてしまったそう。母の判断のおかげで助かったと思った。

ヤンバルへ移動

安座真に来て 1 ヶ月ほど経ったころ、アメリカ軍から佐敷村新里に集まるようにとの移動命令があった。私たちは荷物を持って新里へ行き、そこで一泊した。その晩にアメリカ軍が空砲^{くうほう}を撃った。大人が話しているのを聞いて戦争が終わったことを知った。この日は 8 月 15 日だった¹⁶。

翌日、馬天港^{ばてんこう}（現 南城市）に移動した。その後、私たちは馬天港から LST（戦車揚陸艦^{せんしゃようりくかん}）に乗せられて、船の行先も知らされないまま出港した。大人も子どもも不安な思いをしていた。出航した日は、私の記憶では 8 月 16 日だと思う。

ヤンバルでの生活

私たちは辺野古^{へのこ}（現 名護市^{なごし}）で船から降ろされた。そこから大型トラックに乗せられ、嘉陽^{かよう}（現 名護市）で降ろされた。嘉陽には知念村や佐敷村、西原村（現 西原町）の人がたくさんいた。そこで、「子どもたちは勉強をさせるので海岸に出てくるように」と言われ、砂浜で ABC の文字を書くなどの授業を受けた¹⁷。しかし嘉陽にいたのは 3、4 日ほどで、授業を受けた次の日には安部^{あべ}（現 名護市）に移動した¹⁸。安部では木を切って茅葺き小屋を建て、2、3 家族と一緒に暮らした¹⁹。

ヤンバルでの生活で 1 番困ったのは食べ物がなかったことだ。アメリカ軍の配給物資だけでは足りなかった。そこで、海水を汲んできてシンメナービ（円錐状で丸底の大鍋）で塩をつくり、そ

¹⁵ 屋比久さんのお話によると「道の側は地雷が埋まっている可能性があったが歩きやすかった。車が通った跡の道は安全だが、すべりやすく歩きにくかった」また、「避難民を立ち止まらせて持ち物チェックをするようなことはなかった」とのこと（2024 年事務局聞き取り）。

¹⁶ このころについて屋比久さんは次のように話している。「8 月 13 日にナガニクブーの壕で生まれた子どもがいる。この子のお母さんは私のいここにあたる。そのお母さんが『この子が生まれるころには戦争終わっているかな』とお腹をさすっていたことを覚えている。また 8 月 15 日に、このお母さんは生まれた子どもを抱っこしながら、荷物を入れたユナバーキ（目の粗い竹カゴ）を頭に載せて新里まで来ていた」（2024 年事務局聞き取り）。

¹⁷ 屋比久さんのお話によると「学齢期の子どもたちを集めて授業をしていた。自分より 5、6 歳上の子たちもいた。足元の砂を集めたり、ならしたりして文字を書いた」とのこと（2024 年事務局聞き取り）。

¹⁸ 屋比久さんのお話によると「嘉陽も人が多すぎたため、安部に移動することになった」（2024 年事務局聞き取り）。

¹⁹ 屋比久さんのお話によると「一緒に暮らしたのは〈ヤビク〉と〈ニシヤビク〉で、どちらもお父さんが兵隊に行っていた。〈ヤビク〉は祖母と娘（20 歳くらい）の 2 人家族、〈ニシヤビク〉は母と子どもの 3 人家族だった」（2024 年事務局聞き取り）。

の塩と地元の人々の芋を物々交換した。また、パパイヤの木を切って芯の柔らかい部分を食べたり、食べられそうな草や木の葉っぱなどを食べたりもした。

家族全員がマラリアに罹^{かか}ったが、みんな命を失うことはなかった。

神風台風が来襲

ヤンバルにいたころ、大型台風^{おおがたいふう}が発生した²⁰。台風の高潮で安部川^{はんらん}が氾濫し、水が集落にまで流れ込んでいた。川沿いには淡水魚やウツボなどが打ち上げられていた。私が暮らしていた掘っ立て小屋は竹で床を造っていたので、地面から3センチメートルほど高い位置にあった。一方、ほとんどの避難民は地面に直接カヤなどを敷いて暮らしていた。そのため、台風のときは荷物を水で濡らさないために、床に置かず全部持っていた。荷物をまとめて置く場所がなかったので、手で持ち続けるしかなく、寝ることができないようだった。

しかし、この台風のおかげで私たちは安座真に帰ることができた。安座真にはアメリカ軍が基地を建設しようとしていた。だが、建設中の建物は台風で壊滅したので、アメリカ軍は別の場所に基地を建設することにしたそうだ。この台風は、私たちにとって、まさに神風台風²¹だった。

GMCに乗って安座真に帰る

数ヵ月後、知念村に帰れることになった。アメリカ軍から、迎えが来る日時の連絡があった。知念村に帰っても家もないだろうと思い、持ち帰れるものは全て持っていけるように準備した。私たちは年が明けてから安座真に帰ったと思うが、早くに帰れたほうだと思う。

迎えに来たGMC（アメリカ軍のトラック）には木の杵が付いていた。杵の高さまで荷物を詰め込み、人はその上に乗り出発した。途中、二見^{ふたみ}と辺野古（どちらも現 名護市）の間の坂道（私たちは東喜^{とうき}²²の坂と言っていた）に松の木があった。その松の木はGMCの荷台に乗っている人たちにぶつかりそうな高さにまで伸びていた。私たちが乗っている車の前の車に乗った人たちが、荷台の中からノコギリを取り出して、その木を切り落した。

戦後初期の安座真

安座真に戻ると、一帯は敷きならされて道路^{つく}が造られていた²³。安座真と知名の間の山にも、ブルドーザーを入れて道を造っていた。安座真の隣の知名一帯まで平らに敷きならされていたので、アメリカ軍はここに基地^{きち}を建設する計画を立てていたのではないかと思う。

²⁰ 昭和20年（1945）9月17日に鹿児島県枕崎市付近に上陸した台風16号（枕崎台風）のことか。なお、屋比久さんは「9月16日に台風が来た」と話している（2024年事務局聞き取り）。

²¹ 屋比久さんのお話によると「日本軍は、毎年上陸する台風のことを、全て「神風台風」と言っていた。戦時中は台風が来てもおかしくない時期だったが、なぜか台風が来なかった」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

²² 二見区はスギンダ（シジンダ）とスックの2小集落からなる区であった。両地域は民間人収容地域として、スギンダ（シジンダ）は東喜市、スックは二見市となった。「東喜」の由来には諸説あるが、定かではない。現在は、二見集落内を流れる杉田川に掛けられた「東喜橋」が当時の名残を残しているのみである（名護市史編さん委員会、名護市史『戦争』編専門部会編『名護市史本編・3名護・やんばるの沖繩戦』名護市役所 2016 443頁、498頁参照）。

²³ 屋比久さんのお話によると「3つあったサーターヤヤーの全てが敷きならされ、1つの敷地になっていた。アメリカ軍が基地を建設するための下準備をする場所だった。現在の安座真公民館一帯」とのこと（2024年事務局聞き取り）。

大型台風の影響で、アメリカ軍が造っていた仮設棧橋や、その先に繋がっていた浮棧橋、たくさんの砲弾や手りゅう弾などが、海岸に打ち上げられていた²⁴。知名岬にはアメリカ軍の艦船が打ち上げられ、台風のすごさを見せつけていた。この艦船はのちに、アメリカ軍のサルベージ船が持ち去った。しばらくして真鍮^{しんちゆう}ブームが起き、その次にスクラップブームが起きた。

安座真では、造られてあった小屋で暮らした。この小屋は戦争に出た若い人たちが捕虜（PW）になった後、アメリカ軍の指示で造った小屋だった。捕虜になっていた人たちは柵の中に入れられていた。

小屋は長さ四間^{よま}（約 7.2 メートル）、幅二間^{ふたまた}（約 3.6 メートル）ぐらいで、真ん中に仕切りがあった。その小屋に 2 家族が入って住んだ。仕切りの先はおば家族であったが、どちらの家族にも 10 人近い人数がいた。この小屋で暮らし始めて間もなく、祖母が亡くなった。祖母は安座真に戻ってくる事ができた安心感で亡くなったのかもしれない。

安座真にはヒューム管^{かん}工場が建てられ、4 メートルぐらいの高さのやぐらが造られた。鉄製の大きなものだった。このやぐらが移動するためのレール（約 30 メートル）も敷かれていた。

また、村山さんという韓国系のハワイ 2 世の人がアメリカ軍の通訳^{つうやく}を務めていた。配給所^{はいきゅうじょ}があったが、のちにトタン葺^ふきの公民館に造り替えられた。この公民館の資材は村山さんがアメリカ軍からもらってきてくれたものだった。そのおかげで、当時としては立派な公民館ができた。その公民館で避難民が 2 年ほど間借りしていた。

安座真に帰ってきた年には、知念小学校に通うことができた。その次の年から 6・3・3 制度が始まった。私が中学生になるまでは、知念小学校と具志堅小学校があった。

（2015 年 知花幸栄・永吉盛信による聞き取り 構成：山内優希）

²⁴ 屋比久さんのお話によると「無事だった手りゅう弾（1 箱）を隠しておき、1 個ずつ海に投げて魚を捕った」とのこと（2024 年事務局聞き取り）。

証言に出てくる主な用語（五十音順）

用語	よみかた	解説
青空教室	あおぞらきょうしつ	戦争により校舎が消失した戦後、子ども達を対象に屋外で行われた授業のこと。青空学校とも呼ばれた。
暁部隊	あかつきぶたい	陸軍船舶部隊全体を指す。通常の陸軍部隊とは異なり、一地域ではなく各地に配置されていたため、「暁部隊＝沖縄のみに配備されていた」わけではない。輸送部隊のほか潜水艦や揚陸艦も有していた。海上挺進戦隊などの一部の部隊は「暁」と「球」の両方の兵团文字符（所属兵团を示す漢字のこと）を持つ。
慰安所	いあんじょ	戦地や日本軍の駐屯地域に設けられ、女性たちに兵士との性行為を強制した施設。
「慰安婦」	いあんふ	慰安所で働かされた女性たちのこと。
一般疎開	いっぱんそかい	家族または個人単位で行われた疎開のこと。県外や台湾に住んでいた親戚を頼っていった「縁故疎開」と、頼れる縁故者がいない疎開者を沖縄県が調整して宮崎県・熊本県・大分県に割り振った「無縁故疎開」があった。
糸数 アブチラガマ	いとかず あぶちらがま	糸数集落東側に所在する全長約270メートルの自然洞穴で、沖縄戦中には軍の陣地壕、病院壕（沖縄陸軍病院糸数分室）、住民の避難壕として利用され、軍民混在の壕となった。1945年6月には、アメリカ軍による攻撃を受けて避難民と重症患者に死傷者が出るが、その後も壕に残り続けた避難民と兵士たちが壕を出たのは8月中旬以降だった。壕内には井戸や遺物などが残っている。
慰霊塔／ 慰霊碑	いれいとう／いれいひ	戦争や災害などで亡くなった人の霊を慰めるために建立されたもの。
沖縄陸軍病院 南風原壕	おきなわりくぐん びょういん はえばる ごう	黄金森（現 南風原町喜屋武）と現在の南風原町役場近くの丘に掘られた人工壕で、約30の横穴壕が作られた。アメリカ軍の艦砲射撃が始まった昭和20年（1945）3月下旬から、本島南部への撤退命令が出された5月下旬まで沖縄陸軍病院の壕として使用された。壕に運ばれてきた負傷兵に対し、軍医、看護婦、衛生兵、女学生（ひめゆり学徒）らが医療活動を行った。
学童疎開	がくどうそかい	縁故疎開（一般疎開）ができない国民学校の児童を対象とし、主に学校単位で行われた疎開。
学徒隊	がくとたい	軍の補助要員として動員された旧制中等学校（中学校、高等女学校、実業学校）や師範学校の生徒たちのうち、学校ごとにまとまって動員された生徒たちのことを、戦後に「学徒隊」と総称している。男子学徒たちは「鉄血勤皇隊」と「通信隊」に編成されて各部隊に配属された。鉄血勤皇隊は主に陣地構築や糧秣運搬、立哨など軍の補助任務に、通信隊は主に電話線の架設や補修など通信部隊の補助任務に就いた。女子学徒たちは県内各地の陸軍病院、野戦病院に配属され、負傷兵の看護、手術の補助、排泄物の処理、死体埋葬などの任務を担った。

ガマ	がま	琉球石灰岩が浸食されてできた自然の洞窟のこと。沖縄戦では住民たちの避難場所になったほか、日本軍の陣地や野戦病院としても利用された。
カンボウ	かんぼう	沖縄戦体験者が沖縄戦体験を語る中で、空襲による爆撃や艦砲射撃などのアメリカ軍の攻撃全を「カンボウ」と表現することがある。本書では、話者が「カンボウ」と話しているものの、その実態が艦砲射撃であると事務局がはっきり判断できなかった場合（実際には空襲だった可能性もある場合など）には、「艦砲」ではなく「カンボウ」と表記している。
艦砲射撃	かんぼうしゃげき	艦砲（艦艇に搭載された火砲の総称）による砲撃のこと。
宮城遙拝	きゅうじょうようはい	皇居（宮城）の方角に向かって最敬礼（手の先をひざままで下げて体を深く前方に曲げる、最も丁寧な敬礼）する行為のこと。
義勇隊	ぎゆうたい	アメリカ軍の上陸が間近に予想された昭和20年（1945）2月、翼賛会支部が主体となり、市町村ごとに市町村名を附した義勇隊と、その下部組織として町内会や字ごとの義勇隊が組織された。これは兵役法に基づくものではなかったが、沖縄戦では軍人でない一般の男女が半強制的に参加させられた。3月末にはアメリカ軍の攻撃が始まったため、ガマなどに避難している住民を直接動員する形もあった。義勇隊の主な任務は、アメリカ軍の上陸前は陣地構築などで、上陸後は戦場での弾薬・食料の運搬であったが、直接戦闘に参加させられた事例もあった。
斬り込み	きりこみ	敵陣を襲撃すること。刀を使用するとは限らず、手りゅう弾などの爆発物での攻撃も行われた。
久場崎	くばさき	1946年8月～12月に、県外・海外引揚げ者の受け入れを行う港として利用された、現在の中城村久場集落北側の海岸付近のこと。アメリカ軍はブラウンビーチとも呼んでいた。引揚げ者は久場崎に上陸するとDDTによるシラミ駆除を受け、久場崎港に隣接する久場崎収容所か沖縄市高原のインヌミ収容所に送られた。
軍属	ぐんぞく	軍隊に属し勤めていた軍人以外の人々。日本軍からの給与の有無に関わらず、民間人で軍に協力した人々はまとめてそう呼ばれることが多い。
軽便鉄道	けいびんてつどう	沖縄県営鉄道のこと。ケイビンまたはケービンと呼ばれる。沖縄戦で破壊されるまで、陸上の貨客輸送の要だった。
高射砲	こうしゃほう	航空機を攻撃する火砲。
国民学校	こくみんがっこう	昭和16年（1941）、国民学校令により、それまでの小学校が「国民学校」という名称に変わった。
CP (Civilian Police)	しーピー	本来は「文民警察」を指すが、アメリカ軍占領下の沖縄においては沖縄の住民で組織された警邏（けいら）組織を意味する。MP (Military Police アメリカ軍の警察組織で日本軍の憲兵に相当する) と比較すると権限や装備はかなり限定的で、避難民収容所の治安維持の任務を担っていた。赤い帽子を被っていたので「赤帽（あかぼう）」とも呼ばれた。

十・十空襲	じゅう・じゅう くうしゅう	昭和19年(1944)10月10日にアメリカ軍の艦載機が沖縄を襲った大規模な空襲。
収容所	しゅうようじょ	囚人、捕虜、難民などを収容する施設のことで、沖縄戦では民間人は民間人収容所、兵士は捕虜収容所に分けて収容された。民間人は焼け残った家屋やアメリカ軍が設置したテント小屋に収容されたが、なかには家畜小屋、木の下などで過ごさざるをえなかった人もいた。
シュガーローフ	しゅがーろーふ	沖縄戦の激戦地で、現在の那覇市おもろまち一帯の丘陵地帯に築かれた日本軍陣地のひとつ。日本軍は「安里五二高地」や「すりばち丘」、アメリカ軍は「シュガーローフ」と呼んだ。別名「慶良間チージ」。
手りゅう弾	しゅりゅうだん／てりゅうだん	手で投げる小型爆弾のことで、沖縄戦ではその爆風や破片で多くの人が命を落とした。安全装置を解除し信管を作動させた後、4秒前後で起爆した。
真珠湾攻撃	しんじゅわんこうげき	昭和16年(1941)12月8日、日本海軍がハワイ・オアフ島真珠湾のアメリカ軍基地および太平洋艦隊(アメリカ海軍)に対しておこなった奇襲攻撃のこと。
陣地構築	じんちこうちく	野外に一時的な陣地を構築すること。
青年団	せいねんだん	明治30年代後半ごろから日本国内で政府の指導により各地域で編成された組織。主に義務教育終了後の地方在住の若者が結婚するまでの期間在籍した。
戦果	せんか	本来は戦争や戦闘によって得られた成果を意味するが、戦後の生活について沖縄の人が「戦果(センカ)」と語るときは、アメリカ軍物資をかすめ盗る行為やその時の盗品を指す。
宣伝ビラ	せんでんびら	沖縄戦中にアメリカ軍の飛行機から撒かれた紙片のことで、日本軍や住民に投降を呼びかける内容が書かれていた。
武部隊	たけぶたい	第九師団とその隷下にある部隊を示す集団。1944年7月に沖縄へ配備されたが、12月に台湾へ移駐した。
球部隊	たまぶたい	第32軍と直轄部隊(第五砲兵、独立混成第四十四旅団など)を示す集団。
DDT	でいーでいーていー	有機塩素系の殺虫剤のひとつ。シラミ駆除などの目的で、住民を収容する際などにアメリカ軍が住民の頭に振りかけた。
擲弾筒	てきだんとう	手りゅう弾や小型の専用弾を発射できる小型軽量の迫撃砲のこと。
飯盒	はんごう	主に屋外で使用する、食器を兼ねた調理器具。
PW (Prisoner of War)	ぴーだぶりゅー	捕虜のこと。アメリカ軍に投降し収容所に送られた日本兵や防衛隊員などには「PW」と書かれた衣服が支給された。一方で、民間人はシビリアン(Civilian)と称された。

奉安殿	ほうあんでん	第2次世界大戦中まで、各学校で御真影（天皇・皇后の写真）や教育勅語（1890年に発布された、日本帝国の教育の基本理念を示した「教育に関する勅語」のこと）などを収めていた建物のこと。
防衛隊	ほうえいたい	本書では主に、陸軍や海軍の防衛召集規則に基づいて召集され、日本軍の補助兵力として動員された、17歳から45歳の沖縄人男性を指す。なかには17歳未満や46歳以上の人も含まれていた。主な任務は弾薬運びや陣地構築などといった戦闘部隊の補助や飛行場造成であったが、沖縄戦では教練や武器の支給無しで戦闘に投入された例もあった。
防空壕	ぼうくうごう	空襲などの際に退避するために掘られた穴や構築物。沖縄ではガマ（自然洞穴）も防空壕として利用された。
捕虜	ほりよ	敵勢力に投降し、とらわれた戦闘員を指す。本来は民間人に対して使われることはないが、沖縄戦体験者（民間人）がアメリカ軍に投降し保護されたことを「捕虜になった」と表現することが多々ある。
マラリア	まらりあ	熱帯・亜熱帯地域に分布し、蚊（ハマダラカ属）が媒介するマラリア原虫によって発症する伝染病。高熱、頭痛、嘔吐などの症状を引き起こし、死に至ることもある。沖縄戦中から戦後にかけて沖縄島や宮古・八重山で蔓延し、多くの犠牲者を出した。
モービルオイル	もーびるおいる	自動車等の内燃機関のエンジンオイルのこと。アメリカ軍占領後の食料難の際、このモービルオイルで天ぷらを揚げるなどの利用がされた。
屋取	やーどうい	琉球王国時代、士族が首里・那覇から農村地域へ移り住む人口移動が行われた。当初それらの士族たちはいずれ首里・那覇に戻る予定であったが、時勢の流れにより、結局は移住先の地域に定着・同化するようになった。これらの士族たちが移動先の農村で形成した集落は、移動先の本村と区別して「屋取集落」「屋取」と呼ばれている。また、屋取集落はしばしば、「(本村の)屋取」と呼称される。
ヤンバルへの立ち退き	やんばるへのたちのき	アメリカ軍は沖縄島各地への基地建設のため、沖縄島の全住民を中南部（前原地区を除く）からヤンバルへ移動させることを計画し、実際に県内各地から約25万人がヤンバルへと移送された。知念半島でも昭和20年（1945）7月中旬から8月中旬にかけて、佐敷村、玉城村垣花一区（垣花）・二区（親慶原）、知念村知名二区（海野）・三区（久原）、知念村知名、安座真の収容所にいた人々がヤンバルへ送られた。その後、人々は同年10月から翌年1月頃にかけて知念半島へ帰郷したが、ヤンバルにいる間にマラリアに罹るなどして命を失った人も少なくなかった。
レーション	れーしょん	アメリカの軍隊で支給される食糧。レーション（Ration）とは配給品を意味する。第2次世界大戦時の主なものは、A、B、C、D、Kの5種類であった。

02

戦後史（産業）調査



2. 戦後史（産業）調査について

現在、南城市教育委員会文化課市史編さん係では、戦後の産業史の編さん事業に取り組んでいる。2023（令和5）年度に専門部会を立ち上げ、外部の識者の協力を得る体制が整った。爾来、2031（令和13）年度の書籍（仮題：『戦後史 上巻 産業』）の刊行を目指して、専門部会の委員と事務局は、南城市における戦後の産業に関する調査を進めている。

産業分野の編さん事業を行うことになった理由は、次の通りである。

- 過去に刊行された、南城市及び旧町村の刊行物の内容をつぶさに分析した結果、戦後の産業に関する情報がきわめて薄いということが分かった。
- 産業は、すべての市民の生活に大きな影響を与える重要な研究分野である。
- 自治体の刊行物以外でも、南城市域の産業に関するまとまった資料はほとんど存在しない。

これらの3つの理由から、戦後の産業史の調査・研究を早く進めなければならないという結論に至った。そして、聞き取り調査を有効な調査の方法として、採用することになった。その理由は、次の通りである。

- 文献資料が少ない中、聞き取りでしか多くの情報を得ることはできない。
- 戦後は、情報や、人、モノ、カネの移動が激しくなったため、産業が多様化し、事業者の個性も目立つようになった。産業の多様性を把握するには、個々人から話を聞くことが不可欠である。

なんじょう歴史文化保存継承事業では、2012（平成24）年度以降、6冊の書籍をその事業成果として刊行してきた。しかし、戦後史調査事業において、これまでの事業と異なる点は、「書籍の発刊を待たず、聞き取り調査後すぐに原稿化し、なんじょうデジタルアーカイブ¹で公開する」ということである。これは、できるだけ鮮度の高い情報をインターネットで公開することで、市民サービスの質を高めることを意図している。

本年報では、なんじょうデジタルアーカイブにおいて公開（2024年7月11日）した、聞き取り調査に基づき作成された調査レポートを掲載する。なんじょうデジタルアーカイブでは、他にも戦後史調査のレポートを公開しているが、紙幅の都合で本書には掲載していない。ぜひ、なんじょうデジタルアーカイブにアクセスし、ご覧いただきたい。

現在、専門部会と事務局は多種多様な産業分野で聞き取り調査を行っている。また、同時に、戦後の産業に関する記録（パンフレット、日誌、帳簿、写真など）も収集している。これらの調査成果を、なんじょうデジタルアーカイブで順次公開しながら、最終的には南城市の『戦後史 上巻 産業』（仮題）として体系的に整理し刊行する計画である。

¹<https://nanjo-archive.jp/>

新開保育園のあゆみ 母と娘がつなぐ歴史

調査執筆者・たまき まさみ

はじめに

バスや車が行き交う大通り（国道 331 号）から離れて、海に向かって歩いていくと、住宅街に入っていきます。すると、どこからともなく子どもたちの元気な声が聞こえてきます。その声に向かって進むと、三角屋根の一軒家に掲げられた新開保育園の看板が目に入ります。

筆者・たまきまさみ（南城市教育委員会「戦後史 上 産業」専門部会委員）は、2024 年 2 月 11 日と 3 月 2 日、南城市佐敷新開にある新開保育園の園長・嘉数光子さんと津波博美さん（光子さんの長女）に、保育園の創業から現在に至るまでの話を聞かせていただきました。

話者プロフィール

<嘉数光子さん>

嘉数光子さんは 1939 年 10 月 20 日、長女（9 人きょうだいの一番上）として、愛知県名古屋市で生まれました。佐敷村手登根出身の両親は、当時、同市に出稼ぎに来て、三菱の工場で戦闘機を造る仕事をしていました。

しかし、家族は、アジア太平洋戦争の一時期、岐阜県に疎開していました。戦後は愛知県知多郡河和へ移動しましたが、1952 年、光子さんが 13 歳の頃に佐敷村手登根に引き揚げました。

光子さんは、1954 年に佐敷中学校を卒業すると働き出しました。那覇の親戚が経営していた洗濯屋や、小緑商店という小売業の店で、住み込みで働きました。1964 年、25 歳になると、宜野湾市大山でアメリカ 2 世の宮地さん宅にメイドとして住み込みで働くようになりました。

1969 年、光子さんの父親は、名護の獣医・宮里さんから豚の卵巣摘出や不妊去勢手術のノウハウを学び、その技術を活かした仕事をするようになりました。当時、両親の出身地・佐敷村一帯では養豚がさかんで、その仕事の需要があったので、両親の生活は経済的に落ち着くようになりました。やがて、光子さんは、佐敷村手登根の実家に戻り、父の仕事を手伝うようになりました。

光子さんは、31 歳の時、大工の男性（佐敷村新里出身）と結婚し、それを機に、新里へと移り住みました。しかし、数年後の 1972 年（本土復帰年）、夫は親戚のつてにより大阪で働くことになり、家族で移住することになりました。その頃には、2 歳の長女（博美さん）と 1 歳の長男がいました。

大阪で、3 人目となる次男が生まれましたが、夫が働かなくなったこともあり、1976 年に 37 歳で協議離婚をすることになりました。その後、光子さんは、子供を連れて、沖縄の実家に戻りました。

光子さんは、実家で肩身の狭い思いをしました。働かねばならないと思いましたが、勤めに出るにも、自分の子供を預ける所を見つけることができませんでした。そこで、光子さんは自分の子供の面倒を見ながら働ける方法はないだろうかと考えました。そして、自分の子供もよその子供も同時に世話をすることのできる託児所を経営するというのを思いつきました。

光子さんは、1978年、39歳の時に、託児所を開所しました。その後、運転免許と調理師免許を取りました。また、泊高校（定時制）に入学し、卒業後は、沖縄学院で学び保育士の資格を取得しました。

光子さんは、それ以来今日まで46年間、新開保育園の園長を続けています。また、今もなお現場に出て、給食作りなどを行なっています。

<津波博美さん>

津波博美さんは光子さんの長女で、1970年3月16日に佐敷村新里に生まれました。2歳ごろに大阪へ移り住み、1976年に佐敷村に戻ってきました。博美さんは佐敷小学校、佐敷中学校、知念高校で学び、高校卒業後は保育士の資格を取るためキリスト教短期大学に進学しました。卒業後、1996年に語学と美術の勉強のため、イギリスに留学しました。

博美さんはイギリスで学業を修めた後も、同地で生活を続けましたが、2019年の夏に日本に戻りました。そして、同年11月から保育士として新開保育園で働くようになりました。

博美さんは、アーティストとしての技能と外国暮らしで得た語学力を職場で活かし、園児たちにアートや英語を学ばせています。また、博美さんは、園児たちが園外で地域の人やアーティストと触れ合う機会もつくるようにしています。



嘉数光子さん・津波博美さん

新開保育園の1日

午前7時、住居も兼ねている保育園は開園となります。博美さんは1階で園児たちを出迎えながら、担当の先生が来るまで2歳から4歳までのキリン組の子たちに絵を描かせたりおもちゃで遊ばせたりします。一方、光子さんは台所に立ち、給食の用意を始めます。1歳児のヒヨコ組担当の先生は、出勤すると、1歳児たちを連れて2階へ移動します。なお、2024年4月頭の時点で、新開保育園には、4名の先生（光子さん、博美さん含む）と15人ほどの園児（1～4歳）がいます。

午前10時頃になると、「設定保育」が始まります。「設定保育」では、①英語を学ぶ、②散歩する、③リズムを学ぶ、④制作する（アートを学ぶ）などを行います。

午前11時からは給食の時間となります。食べ終えた園児から順に、着替えて、自由に遊びます。そして、お昼寝をします。

15時からはおやつの時間になります。光子さんは、給食とおやつの前、それらの準備のため台所に立つことが多いです。光子さんの作る料理は多彩です。たとえば、カレー、マカロニをケチャップで味付けしたもの。さらに、ジュース、スブイの汁など沖縄の家庭料理もあります。園児たちは、これらの料理をおいしいと言って食べるそうです。また、かつて、光子さんは「大根や昆布の



新開保育園・アート授業



新開保育園・嘉数光子さん調理

入ったてびち汁」を出したことがあります。その後、「(子供が) てびちを好きになったのは光子さんのおかげ」という母親の声を聞くようになりました。

さて、おやつが終わると、園児たちは迎えを待つことになります。かれらは待っている間、自由に遊びます。

18時には閉園となります。その時間が近づくにつれて、迎えに来る親の姿が増えていき、園内の園児の数が減っていきます。筆者はその様子を見学しましたが、その日、いろいろな園児を目にしました。例えば、迎えに来た母親に泣きつく子、そして、はにかんだ様子で筆者に手を振る子などです。最後の1人が帰ると、ようやく長い1日が終わります。

光子さんと新開保育園のこれまで

今から46年前の1978年、新開保育園は佐敷村字新開で託児所としてスタートしました。光子さんが39歳の時のことです。離婚して2年が経っていました。8歳の長女と3歳の次男を抱えて働きに出ることはできなかったため、「自分の子どもを見ながら働く方法はないだろうか」と思い、それがきっかけで、自ら託児所を開所したいと考えるようになりました。



嘉数光子さんインタビュー時

そこで、光子さんは、弟に「子供相手の仕事をしたい」と言って、託児所建設のための支援を求めました。弟は、彼が持っていた土地に一軒家を建ててくれました。また、妹も協力してくれました。彼女は、光子さんとともに、歩いて近所の家を一軒一軒回り、園児募集のチラシを配ってくれました。その他、親戚からはピアノを譲り受けました。何もかもが手探りのスタートでした。

託児所がオープンした頃、子供を預ける親は、現在とは異なり様々でした。当時は、看

護師や学校の先生、会社員に加えて、夜間バーで勤める女性、^{にしはらちょう}西原町から預けに来る人、ゴルフ場で勤務する人（キャディー含む）などがいました。

光子さんは、夜勤の人が多かったことを思い出しながら、こう言います。「子供を夜に預けて、朝に迎えに来る人がいました。私は子供たちと一緒に寝ました。24時間体制というか、生活と仕事が混ざっていました。当時は、食べるのに必死でしたからね。自分の生活の中で自分の子供を育てるように、よその子たちに接していましたね」

また、光子さんが託児所を始めた頃は、子供を預ける場所（同業他社）が少なかったので、園内の見学もせずすぐに預ける親や、孫を連れて来て「どこでもいいから寝かせてちょうだい」と言う人（近所の顔見知り）もいたと言います。

とにかく、当時、光子さんは、預ける側の様々な要求に応えるために、努力をしました。「お母さん方が働きやすいようにとの思いから、日曜以外は休みなく園を開けていました」と光子さんは言います。

預かる子供は、多い時には、0歳から学童に通う年齢までの子供が50人ほどいました。先生は1番多い時で7人いました。なお、先生の採用には困りませんでした。募集のチラシを見て来る人、知人からの紹介で来る人、飛び込みで来る人などがいました。

創業から7年ほど過ぎた頃、光子さんは託児所を保育園に切り替えようと思うようになりました。時代の変化に気付いたからです。1980年代までは、夜の飲食店で働く母親が多かったのですが、それ以降、店が減り、夜間に預ける人が減っていったのです。

そのような事情があり、光子さんは保育園をスタートさせましたが、この仕事を長く続けるためには幾つかの資格が必要であると思うに至り、まず、運転免許と調理師の資格を取得しました。そして、46歳になった1985年、定時制で泊高校に通うようになりました。保育士養成学校に入学するには高校を卒業しなければならなかったからです。ちなみに、当時、長女の博美さんも高校生でした。

光子さんは保育園を経営しながら泊高校で学び、4年間かけて卒業しました。その間、次男を高校へ連れて行っていっしょに授業を受けたこともあります。また、よその子供を授業に連れて行ったこともあります。理容業を営む女性から「お客さんが入っているので、うちの子を預かってほしい」と頼まれたからです。

光子さんは、高校卒業後、^{うらそえし}浦添市にある沖縄学院に通い、3年後、保育士の資格を取得しました。ついに、保育園経営に必要な資格をすべて手に入れたのです。それは1992年、光子さん53歳の時でした。

光子さんは、保育士の資格を取って少し落ち着いた頃、住居兼保育園の自宅の2階部分を増築しました。光子さんは託児所を弟の力を借りて建設しましたが、その増築は自分の力で行くべきであると思いました。光子さんは当時を振り返ってこう言います。「子供たちが大きくなってきて、家が狭く感じられるようになり、増築が必要と考えるようになったのです。弟からの勧めもあり、弟の名義で銀行からお金を借り、弟に毎月決まった額を返しました」

増築後、「自分たちの生活の場」と「保育園としてのスペース」を分けて使えるようになり、使

い勝手によくなりました。

しかし、当時、良いことばかりがあったわけではありません。近所に保育園が増え、保育ビジネスの競争が激しくなってきたのです。しかも、ただたんに子供を預かるだけでは認められなくなってきたのです。例えば、運動会やお弁当会などの行事を目玉にしたサービスも求められるようになってきたのです。

そこで、新開保育園でも、週1回のお弁当会を始めることになりました。そのきっかけとなったのは、よその保育園で勤務した経験のある先生の、次のような言葉でした。「お弁当会はしたほうがよいですよ。園児たちが普段家庭で何を食べているのかがわかるので、園児に食を提供する我々にとっては、お弁当会は勉強になります」

お弁当会を開くようになってから、年間を通して様々な行事を行うようになりました。それらは、運動会、ハロウィン、敬老の日の慰問、クリスマス会、お別れ遠足、作品展示会などです。そのように、光子さんは、時代の流れに合わせて、経営を行ってきました。また、忙しい母親たちのために、できるだけ保育園を休みにしないように、休日は日曜日だけにしてきました。

しかし、公立学校などの公共機関や、多くの民間企業が、「土日休みの週休2日制」を導入するようになると、光子さんは新開保育園も土・日曜日を休みにしました。次の2つの理由で、土曜日の需要が減ったからです。①小学生以上の兄や姉が、弟や妹といっしょにいられるようになった。②親が土曜日に子供の世話ができるようになった。

光子さんは、最近、歳を重ねてきたせいか、体の衰えを感じるようになりました。また、光子さんは「かつて託児所を立ち上げた頃より、運営しづらいが増えてきましたね」と言います。その理由は2つあります。1つは競合する他の保育園の数が増えてきたこと、もう1つは社会事情や教育事情の変化により規制が増加したことです。

そこで、光子さんは新開保育園を認可保育園にすることを考えました。そして、それを実現させるために、コロナ禍の前に、一度南城市に相談しました。しかし、光子さんは、認可保育園の制度



嘉数光子さんインタビュー時

などに関する説明を受け、ハードルが高いと感じました。例えば、移転先の確保やそのための費用を考えると、新開保育園を認可保育園とすることは現実には難しいことがわかったのです。また、資本金や経営者の年齢制限、後継者の確保など、いろいろな条件が定められていることもわかりました。光子さんは「意欲が削がれました」と言います。そして、「今は半分諦めながらも、運営を続けています」とさびしそうな表情で話します。

博美さんの帰国と新たな試み

長女の博美さんは、イギリス滞在が23年間になっていた頃、光子さんから「家業を手伝ってほしい」と頼まれました。博美さんは、帰国し、2019年11月から新開保育園で働くようになりました。

博美さんはキリスト教短期大学保育科出身で、光子さんが保育士の資格を取得するまで、保育園業務を手伝っていたこともあります。渡英後は大学院でアートを学び、イギリスを拠点に多くの国を旅しながら創作活動を行いました。



津波博美さんインタビュー時

博美さんが新開保育園に戻った当時、園児は30人ほどいました。博美さんは、排泄、着替え、食事の世話といった基本的な保育業務をこなすことに加え、イギリスでの経験を活かした企画にも取り組みました。それは、週に1度園児が英語に触れる時間をつくること、そして、アートを学ぶ時間を取り入れることでした。なお、英語の時間は、その前にもありました。週に1回、外国人の先生に英語の授業を行ってもらっていましたが、その先生が辞めたために、英語の時間は中断されていたのです。博美さんはそれを再開させたのです。

博美さんの活躍で、新開保育園に活気が出てきました。しかし、すべてが順風満帆に進んだわけではありませんでした。大きな問題が発生したのです。それは、新型コロナウイルスの感染拡大でした。これにより、世の中の多くの活動が停滞または阻害され、社会の隅々にまで変化がもたらされるようになりました。

コロナ禍においても、新開保育園が休むことはありませんでした。学校が休みになった時でさえ、新開保育園は開園しました。同園は、運営停止という最悪の事態に陥ることはありませんでした。しかし、運営に関する様々な、判断の難しい問題に直面することになりました。例えば、マスクの着用ひとつとっても、判断が容易ではありませんでした。園児にマスクの着用を強制するのは厳しいので、園児はマスクを着用しないということになりました。その代わりに、園は、細心の注意を払って、換気や消毒を行いました。それでも不安はありました。子供たちの健康を考える立場にある博美さんたちは、新型コロナウイルスが子供に深刻な影響を与える可能性は低いとわかっていたものの、「もし感染により重症者が出たらどうしよう」と、心配を払拭しきることはできなかったのです。そのように、運営に携わる全員が、常に気を張りつめながら業務を行っていました。かれらは、次第に、精神的に疲れるようになりました。

また、コロナ禍は、新開保育園に別の問題をもたらしました。それは、園児数の減少による減収でした。コロナ禍の混乱は出生数を減少させました。その結果、入園する3、4歳児の数が減少しました。この影響は大きく、園児の総数が半分になってしまいました。

そのように、新開保育園は経営面で大きな打撃を受けましたが、博美さんは、苦しい中でもでき

ることをやろうと思い、新たな試みを行うことにしました。それは、新開公民館で、園児たちのアート作品の展示を開催することでした。結果は良好で、園児たちは展示会を楽しみました。その様子は、博美さんがイギリスから帰国した年とは異なっていました。その当時の園児たちは、展示会にまったく興味を持たなかったのです。「展示会？ やらない」といった素っ気ない反応を見せました。ところが、公民館での展示会の後、園児たちの態度は一変しました。かれらは、何かを描くたびに「はい！ 公民館に！」と言うようになったのです。



新開保育園・展示会の様子

博美さんは、2024年3月22、23日の展示会では、開催に関する手伝いを依頼したり、展示会への参加を求めたりするために、地域の多くの人々に声をかけました。

例えば、次のような人々に声をかけました。デイサービスの人々、公民館の絵画サークルの人々、写真撮影を趣味とする近所に住む女性などです。なお、博美さんは、手作りの招待状を家々の郵便受けに投函するというも行いました。博美さんは、園児たちといっしょに「郵便屋さんごっこ」と称して、公民館に向かって歩きながら、道沿いの家々に招待状を配っていったのです。

その展示会は2日間開催されました。たくさんの地域の人々が公民館に集まりました。オープニングでは、博美さんの友人のアーティストと飛び入り参加の近所の人々が、歌三線を務めて「かぎやで風」を演奏しました。子供たちはそれに合わせて歩きました。また、子供たちは、歌も披露しました。近所の97歳の男性は、その歌に合わせてハーモニカの演奏をしました。

博美さんは、この経験について次のように振り返ります。「地域の人と子供たちのつながりができました。地域の方々がみんなで子供たちをみる。そういう感じがして、いいなと思いました。今年、子供の数が少ないですが、その分、地域の方々に展示の手伝いをさせていただきました。子供を介して、いろいろな出会いの機会を得たことを嬉しく思っています」

母と娘、それぞれの思い

光子さんは、46年間の保育園の運営を振り返りこう語ります。「もう何もかも兼務ですよ。園長先生をしながらご飯を作るのは、昔からずっと続いています」

また、光子さんは、多忙な中でも保育の仕事をやってこられたのは、自分の力だけではないと、

次のように言います。「ある日、保健所の方がみえて、『できたら調理師の資格を取ったほうがいいよ』と言ってくれました。何もわからなかった私は、そのようにして助けられてきました。今があるのはみなさんのおかげだと思っています」

人生に苦労は多々ありました。きょうだいが多かったので、光子さんは、家計を助けるために、中学を卒業すると働くようになりました。住み込みの仕事も含めて、職を転々と変えながら、31歳で結婚するまで働き続けました。そして、出産、離婚を経て、再び、働かねばならなくなりました。託児所の仕事を始めたのも、そもそもは生活のためでした。光子さんは、そのような大変な人生を歩んできましたが、「人が大好きですからね。それに、人に恵まれてもきましたよ」と言って、人懐っこい笑顔を見せます。しかし、人が好きとはいえ、心ないことを言われることもありました。例えば、「(光子さんは)よその子の面倒はみているが、自分の子には何をしているのかわからない」とか「あの保育園には、(保育士の)資格を持った人がいない」といったことです。しかし、光子さんは、こう自分に言い聞かせて耐えてきました。「踏まれるほどいい。麦とっしょ。踏まれるほど強くなるからいいさ」



嘉数光子さんインタビュー時

心ないことを言う人がいた一方で、優しい言葉をかけてくれる人もいました。そのうちの1人は、遠い親戚のおばあさんです。光子さんは、彼女を思い出し、こう話します。「私の子供が小さかった頃、そのおばあさんは、この近辺に来るたびに、わが家にも足を伸ばしてくれました。彼女はある日、私にお金を渡してこう言いました。『今、(子育ては)一番苦しい時期だと思うけど、大変なのは一時のことだから、(我慢して子供たちを)大事に育てなさいよ』と。私は心苦しくなって『どうお返しをしたらいいの』と尋ねました。すると、彼女は『ヌーンイランサ。私がね、カーマカイチーネー、ウムティトゥラシ』と仰いました。それは、『何もいらぬ。私が亡くなった時に(葬儀に来て)見送ってくれればいい。(その時)思い出してちょうだいね』という意味だと思います」

その他にも、心の支えになることはありました。例えば、園児の親御さんがお雛様の人形を贈ってくれました。光子さんは「いろいろな方の気持ちで、(この保育園は)成り立っています。感謝感謝です」と言って、笑顔になりました。そのように、温かい気持ちを持つ人々によって、光子さんは支えられてきました。

筆者が「どのような時に、保育園を続けてよかったと思いましたか」と尋ねると、「うちで預かっていた子が親になって、子供をうちに預けるようになった時です。また、うちで育った子供が会いに来て『学校の先生になったよ』と言ってくれた時もそう思いました。普通の主婦は、こういう経験をしないですよ」と光子さんは言って、目を細めました。



嘉数光子さん・津波博美さんインタビュー時

また、光子さんは園児のことについて、次のように話します。「子供のいいところは、怒られても、嫌なことがあっても、すぐに機嫌を直して、笑わせてくれるところです。子供から元気をもらうことは多いですよ」

ただ、元気に見える光子さんも、先のことを考えると少し深刻な表情になり、こう言います。「自分の体と相談しながら、台所での調理業務も含めて、運営のバトンタッチをすることも考えています」

なお、筆者が、博美さんが戻って来たことについて尋ねると、光子さんはこう答えました。「やっぱり1人では何事もできないと思います。家族が揃って1つのことをまとめてやっていくこと、団結っていうのは大事だと思うのです。それに、家族だから無理も利くと私は思っています」

一方、博美さんは光子さんについて、次のように話します。「母は、給食やおやつのためにずっと調理を行ってきましたが、それと同時に、経営もいろいろと考えながらやってきました。母は、保育士の資格を持っていますが、保育士というよりは経営者という感じがします。そもそも、生活のために、この道に入ったということもありますし」

このように、博美さんは、光子さんを保育士というよりは経営者とみなしていますが、光子さんの保育士としての面については、こう語っています。「母は子供を産んで育てた経験を持つので、子供の扱いには慣れていますが、さすが、母親経験者だなと思います。私は、彼女にはなれません。私は私ができることをするしかないですね」

これが、現在の博美さんから見た「光子さん像」です。では、博美さんは、子供の頃、光子さんの仕事や保育園についてどのように見ていたのでしょうか。博美さんはこう回想しています。「子供の頃、よい思い出はなかったです。園内で、知らない子供がずっと泣いていたりしていましたので。それに、子供の数が多かったため、私はなかなか母に話を聞いてもらえませんでした。その状況がとても嫌でした。保育園はそういう所だったので、私はずっと外で遊んでいました」

しかし、やがて、気持ちの変化が生まれてきました。それは、短大で保育の実習に行った時のことです。博美さんは、「せんせーい」と言って寄って来る子供たちを見て、かわいいと思ったのです。

とはいえ、博美さんは短大卒業直後に保育士として働き出したわけではありません。1996年にイギリスへ渡り、23年間同地で暮らしました。博美さんが光子さんからの要請で帰国して保育の仕事をするようになったのは2019年です。博美さんは、帰国した当時の心境をこう語っています。「保育の通常業務は大切です。しかし、それを毎日くり返して行うことが、私に耐えられるのだろうか。その心配もあり、私は自分だからできることをやらねばならないと思いました」

通常業務の反復では飽き足らない。自分の個性を活かした保育をすることで、やりがいを感じられるようになりたい。博美さんはそのように考えたのでしょうか。

博美さんにはやりたいことがあります。それは、キリスト教短期大学の卒業生やアーティストによる新開保育園の活用です。具体的な構想を、博美さんはこう語ります。「学校を卒業して間もない若い保育士さんにはワークショップの場として、アーティストには練習や発表の場として、ここを使ってもら

いたいです。さらに、外国人のアーティストの受け入れ先としても、ここを活用したいのです。このように、場を提供することで、新開保育園の名を広げることができると思います。また、アーティストは、ここでの活動実績をかれらの履歴に加えることができるようになるでしょう。それに、子供たちにとっても、これは新たな経験になるでしょう。実は、この構想を帰国する前から考えていました。まだ、構想段階にあり、迷いもありますが、そのような希望を持っています」



津波博美さんインタビュー時



新開保育園・アート授業



新開保育園・散歩

この構想がまだ実現できていない理由について、「園児の数が足りていないし、保育園の今の業務で手一杯だし、キリ短大との人脈もありません」と、博美さんは説明します。

さらに、博美さんは、園児数の減少の問題に絡んで行政の問題についても、こう述べています。「3、4歳児があと5人いたら助かります。しかし、うちの園児数は逆に減っていく可能性があります。認可園に空きが出ると、年度の途中でも、園児がそこに移ることがあるからです。行政側が、認可・非認可問わず、均等に園児を振り分けてくれたらよいのですが……。今の状況では、やりたいことはなかなか実現できませんね」

このような悩みがある中でも、希望はあります。博美さんは希望を子供たちの中に見出しています。博美さんはそれについてこう語ります。「子供たちは、幼いからか、外国人のアーティストに

対しても、物怖じせずに喋ります。また、私が、子供たちを地域のおじいちゃん・おばあちゃんの所へ連れて行くと、かれらは喜びます。子供は外部の人たちとつながることができるのです。子供を通して、我々と地域の輪を広げることができると思っています」

このように、地域のネットワークの重要性を感じ始めた博美さんは、2023年5月から、新開保育園のInstagramを開設しました。博美さんは、その写真プラットフォームを使って、毎日のように、保育園で園児たちが過ごす光景を発信しています。例えば、音楽や美術を楽しむ姿、散歩する姿などです。園児の後ろ姿や小さな手、かれらが描いた絵などがはっきりと写されています。これらの写真は、新開保育園の活動内容だけでなく、その場の雰囲気もよく伝えています。なお、博美さんは、プライバシーを考慮して、園児たちの顔ははっきりわからないように撮影しています。



新開保育園・散歩

終わりに

筆者が生まれた1978年から46年も続く新開保育園は、これまでたくさんの子供たちが過ごし、巣立った場所です。この長い歴史の中で、社会は変化し続けました。時代に合わせて経営を続けることは容易ではありませんでした。そのため、光子さんは様々な苦勞をしてきました。しかし、彼女は、努力と前向きな性格で荒波を乗り越えてきました。筆者は、そのたくましさに感銘を受けました。また、様々な取り組みを行う博美さんのチャレンジ精神にも感動しました。

これからも、光子さんと博美さんは、力を合わせて、新しい世代に合った保育の在り方を探していくことでしょう。

今回、取材をさせていただくことができよかったですと思っています。今後も、新開保育園を定期的に訪ねたいと考えています。

【新開保育園】

1978年に南城市佐敷新開で託児所として創業。80年代に新開保育園となる。保育士4人、1歳から4歳までの園児15人(2024年度)。設定保育(英語やリズム、アートの制作、散歩などを通じた情操教育)を行っている。住所:南城市佐敷新開1-55。電話:098-947-1424。Instagram:
https://www.instagram.com/shinkai_hoikuen

03

普及・繼承事業



(1) 沖縄戦体験証言を用いた教材開発ワークショップ

日時：2024年8月1日（木）13時～17時

場所：南城市役所 1階 大会議室

目的：令和3年（2021）に市が発刊した戦争体験証言集を使い、授業で活用できる平和学習の教材開発

参加：19名（市内小・中学校教員等）

講師：山口剛史氏（琉球大学教育学部教授）、山城彰子氏（北中城村教育委員会）

内容：講師による解説、グループディスカッション、グループ制作

第1部

1. 資料から読み解く南城市の沖縄戦について（解説：山口氏）

はじめに、山口氏が「市町村を使って沖縄戦を読み解く意義」について、以下の通り解説した。

(1) 沖縄戦体験者の高齢化

- ① 沖縄戦の話をしてもらうことが困難になってきている。
- ② 沖縄戦研究者による特設授業という学習方法に変化しつつある。

(2) 地域の証言を題材にする

- ① 子ども達にとって身近な場所であることに意味があり、学習意欲を高める。
- ② 自分の命のルーツを確認できる。

2. 「平和の礎」戦没者名簿の空間分布復元図から見る南城市の沖縄戦（解説：南城市教育委員会文化課）

続けて、文化課職員が「平和の礎」戦没者名簿の空間分布復元図の処理方法について説明した。その後、各分布図（A1用紙）を見ながらグループディスカッションを行い、疑問点などを発表した。



グループディスカッションの様子

発表された疑問点をまとめると、以下の2点となった。

- ①佐敷・知念は知念方面、大里・玉城は糸満方面へと行動が分かれているが、それはなぜか？
- ②8月以降の戦没者がヤンバルと南城市のほうで多いのはなぜか？

3. 南城市の沖縄戦の特徴について（解説：山城氏）

各グループの発表後、山城氏が発表で出た疑問に答えつつ、南城市の沖縄戦の特徴について解説した。

山城氏は「南城市は4地域が合併した市であり、その4地域それぞれで戦争体験が異なる」、「南城市全体で沖縄戦を取り上げようとすると非常に難しい」とし、南城市を題材にした平和学習をするうえで最初の壁になること、それを踏まえて自分がある地域の特徴を掴むことが大事であると述べた。

山城氏の回答については以下の通り

佐敷・知念は知念方面、大里・玉城は糸満方面へと行動が分かれているが、それはなぜか？

【5月21日：アメリカ軍によって与那原（当時大里村）制圧】

- ・大里村の人々が玉城村を通り糸満まで移動。そのため糸満で亡くなっている大里の人が多い。

【知念と佐敷の状況】

- ・知念と佐敷は地形的に山（スクナ森）に近い。そのため山に隠れている人が多い。しかし、スクナ森に艦砲射撃が飛んできて亡くなる人も多い。

【6月1日～3日ごろ：大里グスクでの戦闘】

- ・南城市域で最も激しかった。
- ・住民の多くは糸満まで避難している。そのため6月は糸満での戦没者が多い。
- ・糸満まで避難した理由は「日本軍がいる南の方が安全だろう」と思い、移動した人々が多かったと考えられる。

8月以降の戦没者がヤンバルと南城市のほうで多いのはなぜか？

【知念半島に収容所が開設】

- ・6月4日ごろ。
- ・知名、屋比久、仲伊保、新里など、主に知念・佐敷地域に大きな収容所が開設。
- ・収容所で亡くなる人もいた。

【ヤンバルへの強制移動】

- ・南城市の特徴のひとつ。
- ・7月中旬～8月中旬に行われた。
- ・移動対象は佐敷村、玉城村垣花一区・二区、知念村知名一区～三区、安座真の収容所にいた人々。
- ・ヤンバルでは、飢餓とマラリアで多くの人が亡くなる。
- ・知念・佐敷地域では「糸満に行っていないので地獄を見ていない。ただヤンバルに行ったときが辛かった」という証言もみられる。
- ・中部の収容所は食料があったとされるが、ヤンバルの収容所は食べ物が不足する状態だった。

山城氏の解説後の質疑応答は以下の通り

なぜ、知念出身者が伊江島で亡くなっているのか？
<ul style="list-style-type: none">・徴用・徴兵された人だと考えられる。・伊江島は昭和 19 年（1944）から飛行場建設が始まるので、南城市域から動員された人もいた。・日本軍は年齢や立場によって動員の名称が異なる。 <p>[正規の日本軍]</p> <ul style="list-style-type: none">・19 歳～24 歳程度の徴兵検査を受けた人（本来は 20 歳からが対象）・この正規の日本兵が伊江島に行き戦闘で死亡したと予想される。 <p>[防衛隊]</p> <ul style="list-style-type: none">・19 歳～45 歳の男性（60 歳超えもいた）・南城市域で日本軍の補助をするために動員された。・動員の集合場所は主に小学校。その地域に駐屯していた日本軍と行動する。 <p>[学徒隊]</p> <ul style="list-style-type: none">・学校単位で動員された。・南城市域では一中（現在の県立首里高校）、二中（現在の県立那覇高校）、ひめゆり（当時の第一高等女学校、師範学校女子部）が多い。 <p>[義勇隊]</p> <ul style="list-style-type: none">・学校に行っていない青年の男性。・防衛隊と似ており、日本軍の補助（弾運び）などを行った。・女子青年も弾運びや炊事班として日本軍と行動している。
北部に行った非戦闘員より、南部で亡くなっている非戦闘員が圧倒的に多い。これは戦闘に巻き込まれたからか？
<ul style="list-style-type: none">・沖縄戦全体の特徴は軍隊より住民の死亡が多いこと。それは図にも表れている。・避難した非戦闘員は武器を持っていない。また、壕の追い出しなどにあい厳しい状況に立たされた。・日本軍として動員された男性は浦添などの戦闘で、女性たちは避難先でそれぞれ亡くなったと考えられる。

第 2 部

1. 戦争証言を使ったワークシートの作成について（解説：山口氏）

はじめに、講師の山口氏が、戦争体験証言を教材化するためのポイントについて解説した。参考資料として、山口氏と琉球大学の学生らが作成し、小学校の授業で実際に使用したワークシート（大里・銭又出身の瑞慶覧長方さん、姉のシゲさんの証言）を用いた。

山口氏はこのワークシートについて、「戦場で住民はどうやって生き残ってきたのか。戦後世代である私たちを含め、どのようにして小学生、中学生が考えられるのか、想像できるのか。そういった問題意識で作った教材資料」と説明した。また「“どうやって生き残ったのか”を取り上げる」ということをポイントとしてあげた。これは、「戦争に生き残った人が見た風景から、私たちは沖縄戦について知り、学び、想像し、継承していくことを考えてきた」からである。さらに、「どうやっておじいさん、おばあさんはこの地獄の戦場を生き残ったのか。どう努力したのかを学んでいく。単純に 20 数万人が亡くなっただけでなく、ひとりひとりがどう生き延びてきたか。どんな不条理があったのか」を、具体的に子ども達に見せるために、証言は有効活用できると語った。

つぎに、このワークシートを使い、小学校の授業でどのような展開をしたか説明した。山口氏は「あなただったらどうしますか？」と問うことで、証言者の心情、価値観、判断基準を想像して、読み解きながら悩んでみる」、「想像してもわからない、理解できないといった、子ども達のモヤモヤや疑問を膨らませること。これらの疑問の追求が、戦争や沖縄戦を考えるうえで、大事になるのではないか」と解説した。

2. ワークシート作成（各グループ）

山口氏の解説後、各グループにおいて割り当てられた4地域ごと（玉城、知念、大里、佐敷）の証言を読み、これらの証言を用いたワークシートを作成する作業を行った。

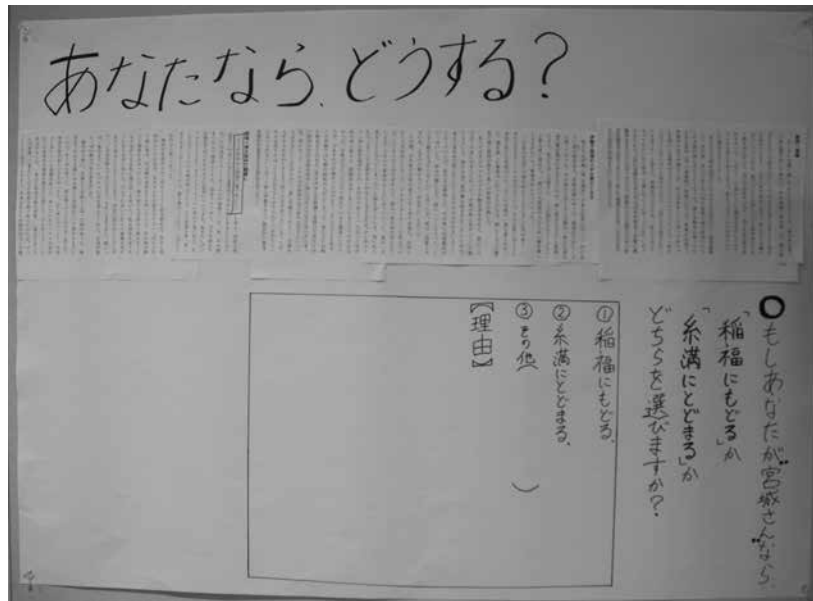


ワークシート作成の様子

3. 各グループの発表

作成後、各グループの代表者が発表を行った。ワークシートに用いた証言の特徴や取り上げた箇所、問いかけのポイントやねらいについて説明した。これに対し、講師の山口氏と山城氏がコメントした。各ワークシートのまとめは次のとおり。

グループ1 (大里地域) 証言：宮城艶子さん (稲福)



【宮城さんの体験内容】

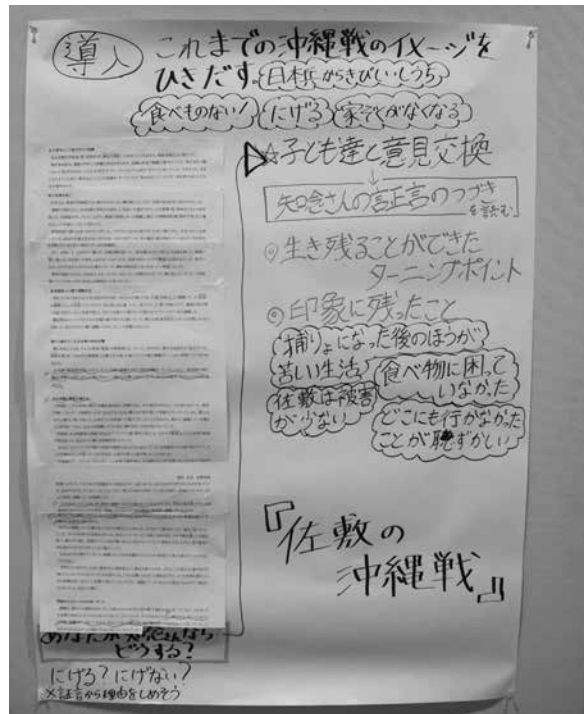
- ・戦前は家族で大里に住む。当時17歳。姉と小さな弟・妹がいる。
- ・母と弟・妹が疎開を予定していた。しかし小さな子たちを母1人で見るのが難しい、宮城さんやその姉のどちらかが一緒に付いていくことができないという理由から断念。
- ・稲福にいた兵隊は「糸満までは必ず行くこと。捕虜にはならず、いざとなったら自決すること」と言っていた。しかし、別の地域では「ヤンバルか知念・玉城への避難」を呼びかける兵隊もいた。
- ・宮城さんは糸満へ避難。糸満に行く途中で多くの人々の死を目撃。
- ・糸満まで行った後、「死ぬなら稲福で」と考え稲福に戻る。戻る道中で捕虜になる。

【問】もしあなたが”宮城さん”なら、「稲福にもどる」か「糸満にとどまる」か、どちらを選びますか？

ねらい：糸満に行く途中で多くの人々の死を目撃しているが、稲福まで戻る選択をする。その事実を踏まえての問い。

→アメリカ軍が北から南へ下りてきているため、ヤンバルへ行くのは困難と考える。

グループ2（佐敷地域）証言：知念芳子さん（新里）



【知念さんの体験内容】

- ・基本的に佐敷の壕にいて逃げなかった。
- ・戦争前より戦争中の方が食糧が豊富。芋ではなく毎日夜に米を炊いて食べていた。
- ・捕虜になった後が大変だった。

【問】あなたが知念さんだったら、どうする？逃げる or 逃げない

ねらい：生徒に証言の中にある根拠になりそうな部分を見つけてもらい、選択を決めてもらう。

※証言を途中まで読んだ後

- ・逃げる場合：「日本兵がいたところは、早く島尻に避難するように言われていたようだ。」「弾は私たちの頭の上をヒューヒューと飛んでいた」
- ・逃げない場合：「水も食糧も豊富な壕生活」、「日本軍の特攻隊が飛んできて、アメリカ軍の軍艦めがけて特攻攻撃をしていた。」

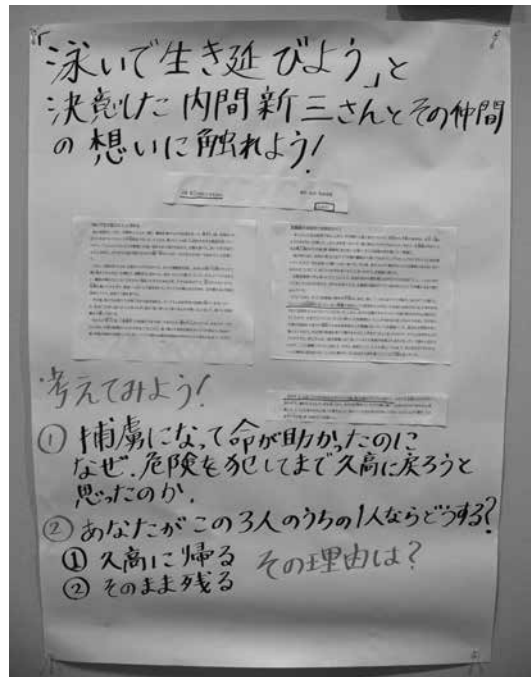
→証言の続きを読んだあと意見交換

【問】生き残ることができたターニングポイントや印象に残ったことを生徒にあげてもらう。

【補足】山城氏

- ・佐敷地域の体験者は、知念さんのような体験をした人が多い。佐敷と知念の山間の方に隠れていて、糸満まで逃げることはあまりなかった。
- ・佐敷に多くの収容所ができていくが、その際、アメリカ軍はテントではなく民家をそのまま使って収容した。そのため「家に帰って生活していたら収容所になっていた」という証言もある。

グループ3 (知念地域) 証言：内間新三さん (久高)



【内間さんの体験内容】

- ・筋肉モリモリの漁師。
- ・防衛隊として戦争に参加。壕の爆破や目の前で人が死ぬといった体験の中、泳いで生き延びる。
- ・同じ久高島の仲間が数人おり、その仲間と逃げて捕虜になる。

【問1】なぜ危険を冒してまで、久高に戻ろうと思ったのか。

- ・捕虜になって命は助かったはずなのに、なぜ危険を冒してまで久高に戻ろうと思ったのか。
- ・そのまま捕虜として残れば、無事に過ごせる可能性がある。
- ・久高に戻るとなると、撃たれる可能性もある。

【問2】あなたが、この3人のうちの1人だったら、「久高に戻ろう」と誘われたとき、どうするか。

1. 久高に帰るか：(仮説) 友情を裏切れないから
2. そのまま残るか：(仮説) 命が大切だから

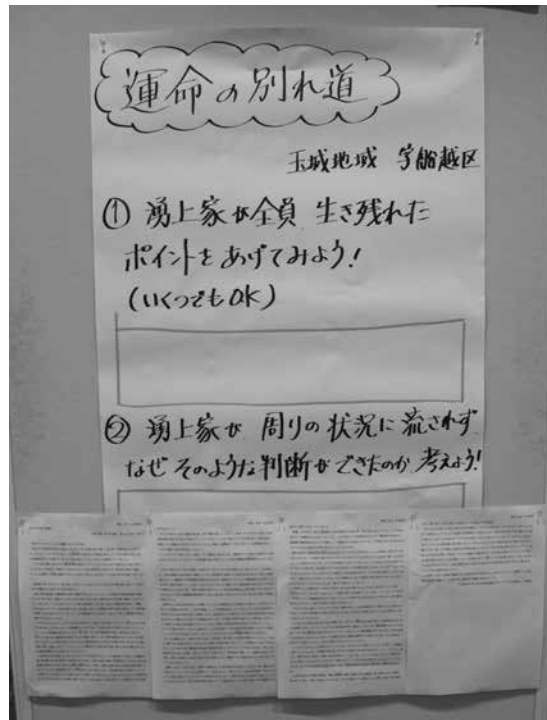
※久高に戻る際、内間さんのほかにあと2人の仲間がいた。

【質問】 山口氏

Q. 内間さんの証言には戦場体験が多くあるが、あえて戦場後に着目しているのがおもしろい。戦場での体験を使わず、この場面を選んだ理由、ねらいは？

A. 講師の山城さんから「防衛隊は戦場で日本軍がいなければ、すぐ逃げる性質があった」と聞いた。それを聞き、沖縄の人と本土の人では、戦争に対する気持ちが若干違うと感じた。「自分の生まれた土地で死にたい」という思いもありつつ、「生き残りたい」という気持ちもあったと思う。内間さんは捕虜になる直前まで生き残るために摩文仁から泳いで、あちこち逃げて、その中で仲間のうちの一人が首を撃たれてしまう。このときの気持ちは「とにかく逃げよう」と思っていた。だが、捕虜になったあと久高に戻ろうとする。戦争を体験して、「生き残りたい」という気持ちから「捕虜になって安心した」のではなく、なぜ殺されるかもしれない危険を冒してまで久高に戻ろうとしたのか。その部分が気になったのでそこをポイントにした。

グループ4（玉城地域）証言：湧上洋さん（船越）



【湧上さんの体験内容】

- ・ 宜野座村に家族で疎開。しかし食糧がなく、男性のみ（祖父、証言者本人、弟）船越に戻る。
- ・ 父は兵隊として出兵しているため不在。そのため、祖父の判断で家族は行動する。
- ・ 避難していた壕の近くにいた人々が避難先を変え、南下していく。しかし湧上さんの祖父は壕に残ることを決める。湧上さんは祖父に南に避難しようと訴えるが、祖父は判断を変えなかった。
- ・ 家族の様子を見に湧上さんの父が壕を訪れる。その後、再び戦地に戻ろうとするが、祖父が「この戦争には勝てない。残るべきだ」とはっきり言い、壕に残るよう説得する。父と祖父で言い争いをしたが、最後は父が折れて壕に残る。
- ・ アメリカ軍に見つかり捕虜となる。

【問1】生徒に、湧上家全員が生き残れたポイントをあげてもらおう。

ねらい：「こうやったから生き残れたのではないか」というところを探し、全体的な内容を読み取らせたい。

【問2】湧上家が周りの状況に流されず、なぜそのような判断ができたのか考えよう！

ねらい：当時、色々な教えがあるなかで、湧上さんの祖父は家族と命を守る判断をして人生を変えた。子ども達にも、自分が「良い判断」をするためにどうしたらいいかを考えてもらう。

4. 講評

山口氏

【証言の選定について】

- ・地上戦という沖縄戦の特徴を押さえる。具体的に体験者の置かれた状況や目にしてきたものから扱う。
- ・戦場と死は外せない。
- ・地域の証言から入ってもいいと思う。地域を知ったうえで、他のところはどうだったのかを知るのもいい。

【証言から見えること】

- ・佐敷の証言は安全だったとはいえ毎日肉を食べている。それは貯蓄を食いつぶしているということ。
- ⇒日頃の生産と違う暮らしがある。それを加えた上で、なぜ貯蓄を消費し続けて生き延びていったのか。その辺りに目を向けると、その人たちが決して戦時中に裕福な生活をしていただけではない。戦前がすごく切り詰めた生活をしていた。その歪さをどう想像し合えるのか。その難しさはある。
- ・戦場における人間性の維持に関する部分もとても大切。
- ⇒戦場の中でふとしたときに、いわゆる毛遊モーアシび的な遊びが始まったりする。24時間ずっと緊張していたのではなく、色々な濃淡や局面がある。例えば、避難したひめゆり学徒隊が、爆弾の音がなくなったときにキャベツ畑でキャベツ投げをして遊ぶシーンがある。そういう瞬間がないと生きていけなかった。

【平和学習の取り組みについて】

- ・子ども達に授業をするときは、どのような人の営みがあったのかを考えてもらう。
- ⇒「戦場で逃げているときは裸足だったか、靴だったか」、「トイレはどうしたか」、「衣食住をどうしたか」など。
- ・24時間壕の中だけでじっと生活することはできない。単純に戦場と比べるのではなく、人の生活をどう描いてみるか、そこを上手くできたらいいと思う。
 - ・「赤ん坊が死んだお母さんのおっぱいを吸っているのを見たけど、そのまま見過ごした」という内容の話がたくさんある。そういった体験者が見た何気ない風景が、いかに人間性を失った姿か。そういった部分を、証言を通して子ども達に読み取らせたい。また、その行間を読めるようにしながら、先生も一緒になって考えていけたらと思う。
 - ・子ども達が学びの中で色々な体験者や事例に出会うことで「沖縄戦の体験は多様」ということを学べるようにしたい。
 - ・先生たちは子ども達を長い目で育てていると思う。平和学習も長い目で蓄積されたい。また、様々な問いがあると思うので、ぜひ考えてもらいたい。

山城氏

【証言の選定について】

- ・証言は読まないと、子ども達に何を伝えたらいいのか考えることも難しい。
- ・読むのも大変だと思うが、新しい発見がいっぱいあるので読んでほしい。

【証言から見えること】

- ・証言は非常に多様で、体験者からしか聞けない内容は確かにある。しかし、わかるのはその体験者の体験のみ。1人の体験から沖縄戦全体のことはわからない。また、各地域の特徴そのものはわからない。
- ・私たちは「捕虜になったら安全」とわかるが、当時の人々は捕虜になることをどう捉えていたか。防衛隊についても「逃げる性質がある」ということを私たちは知っているが、当時は逃げる＝処分。当時の人は逃げることに對してどう考えていたのか。これらは資料を読まないとわからない。
- ・当時の現場の状況というのは、たくさんの証言を読んでみてわかること。

【平和学習の取り組みについて】

- ・平和学習をする目的は「二度と戦争を起こさない」というのが最終目標だと思う。
- ・証言を語ってくれた話者は「若い人にこんな思いをさせたくない」という思いで語ってくれている。私たちを含む非体験世代にそのバトンをどのように繋いでいくか。できる限り証言を読む、現場に行く、そのような方法しかないのではないかと思う。

●アンケート結果（参加者の内、11人が回答）

今回のワークショップの内容はいかがでしたか？		
とても良かった・・・8人	良かった・・・2人	普通・・・1人
<p>主な回答理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで「沖縄県」としての視点でしか沖縄戦というものをみたことがなかったので、市町村別や地域別でこんなにも特徴がわかるものなのだと初めて知ることができた。 ・今まで講話を中心に、出来事を一方的に聞いて終わりの取り組みが多かった。自分たちで体験談から読み解いていくという取り組みは、新しい発想だと感じた。 ・「平和の礎」戦没者名簿の「空間分布復元図」を使って南城市の沖縄戦の現状を考えるワークショップは、地域によって実態が違う発見を見つけられたので、子ども達ともやってみたいと思った。子ども達が主体的に考え、交流して考えを深める授業へつなげられると思う。 ・一方的に講話を聞く平和学習から、考える平和学習へのイメージがついた。体験者から直接話を聞くことが難しくなっている今、証言から学ぶ・考えるという手法は、目から鱗だった。 		
今後、戦争体験の証言を活用した授業を実践したいと思いますか？		
実践したい・・・6人	実践したいが自力では難しい・・・4人	その他・・・1人
<p>主な回答理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの平和学習は、戦争体験者の話を聞く、沖縄戦に関するビデオを見て感想を書くという活動がほとんどだった。そのため、証言をもとに子どもたちに戦争中のことを考えてもらう活動はとてもおもしろいと思った。しかし、子どもたちに授業をするにあたり、教師の準備時間や教材などが十分ではないと思うので、難しいと感じた。 ・平和学習担当1人では取り組めない。まずは複数学年で共有して取り組む意義を理解してもらい、そこから証言を精査して選んだりするなど、前準備がとても大切だと思う。 ・戦争体験者がどんどんいなくなる中で、平和教育には教材の1つとして証言を活用することが必要だと感じる。証言を「歴史」として捉えるのではなく、現在でも起こっている戦争・紛争や、身近な犯罪問題などに関連させるような授業づくりを行うことで、子ども達自身が自分事として学んでいけるように工夫して実践していきたい。 ・身近な題材を使った平和学習はこれまで経験がない。これまでの平和学習は、沖縄県の全体的な戦争の概要であったり、1つの出来事についての説明がほとんどで、"受け身的な学習"だったように記憶している。自分の住んでいる地域の戦争実態を学ぶことで、自分事として"考える学習"が展開できると思う。 		

(2) 民話劇学校アウトリーチ事業

本事業は、令和3年度(2021)に市教育委員会より発刊した『大里のちてーばなし』と、過去に刊行した民話編の活用、普及推進を目的に開催した。県内で活動している劇団に依頼し、民話を題材にした創作劇を市内の小学校で公演している。

「ちてーばなし」とは、沖縄の方言で「伝え聞いた話」を意味し、『大里のちてーばなし』は昭和58年(1983)に旧大里村で実施した民話の聞き取り調査から得られた民話のうち、78話が収録されている。

今回の民話劇は、『大里のちてーばなし』、『沖縄・佐敷町の昔話』、『たまぐすくの民話』から、それぞれ民話を選出した。

なお、令和3～5年度開催の民話劇の映像については、「なんじょうデジタルアーカイブ」にて公開している。

①佐敷小学校

- ・日時／場所：2024年12月17日(火)／同小学校 体育館
- ・対象：同小学校5年生、学校関係者
- ・出演者：演撃戦隊ジャスプレッソ
- ・内容：
 - (1) 文化課職員による事前解説。文化課の紹介、民話の種類、上演する演劇の舞台になった場所の紹介やセリフに出てくる言葉の意味の説明。
 - (2) 演撃戦隊ジャスプレッソが『大里のちてーばなし』に収録されている「アシーハインマ」、『沖縄・佐敷町の昔話』に収録されている「佐敷小按司の力比べ」、「モーイ親方」の3作品を上演。

②知念小学校

- ・日時／場所：2025年1月8日(水)／同小学校 体育館
- ・対象：同小学校 全児童、学校関係者
- ・参加者：TEAM SPOT JUMBLE
 - (1) 文化課職員による事前解説。文化課の紹介、民話の種類、上演する演劇の舞台になった場所の紹介やセリフに出てくる言葉の意味の説明。
 - (2) TEAM SPOT JUMBLEが『大里のちてーばなし』に収録されている「子育てゆーれー」、『たまぐすくの民話』に収録されている「大歳ノ客」、絵本『安座真の大神宮』より「安座真のウフジチュウ」の3作品を上演。

開催時の様子

民話劇の上演（佐敷小学校）



佐敷小按司の力比べ



アシーハインマ



モーイ親方



お礼の言葉

民話劇の上演（知念小学校）



安座真のウフジチュウ



子育てゆーれー



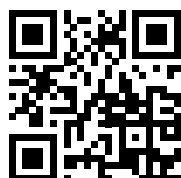
大歳の客



お礼の言葉



なんじょうデジタルアーカイブ
Nanjo Digital Archives



「なんデジ」では、南城市の人々が残してきた
様々な資料や写真などを公開しています

令和6年度（2024）なんじょう歴史文化保存継承事業 年報

2025年（令和7）2月28日発行

編集・発行 南城市教育委員会文化課
〒901-1495 沖縄県南城市佐敷字新里1870番地
電話：098-917-5374
メール：bunka@city.nanjo.okinawa.jp

印刷・製本 株式会社 アント出版
〒903-0804 那覇市首里石嶺町4-291-1
電話：098-840-3777
メール：info@ant-okinawa.jp

本書は沖縄振興特別推進交付金を受けて刊行された。